
ライン

Jan Ford

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライン

【Nコード】

N9576C

【作者名】

Jan Ford

【あらすじ】

とめどない欲望、理不尽な苦しみの繰り返し、他人と自分との間にある違いとは一体何なのか？横須証券株式会社の幹部6人が起こした事件を皮切りに、青島一輝たちの“日常”は先の見えない混乱の中へと突き進みはじめる。

予章（1）

3月11日

東京都新宿区

暑いくらいに暖房がきいている。

窓が全てカーテンで閉め切られているせいで、会議室の中はどこか薄暗かった。青島真二の脳裏には、いまだについさつき目にしていた曇り空の様子がはつきりと浮かんでいた。どうしてそんなものを覚えているのか自分でも分からなかった。

黒とシルバーに統一され、必要なもの以外は何一つない殺伐とした部屋は、7人が居座るのには少し広すぎるくらいの場所だった。巨大な円卓テーブルを囲う7人のスーツ姿の男達の手元の資料をめくる音だけがゆっくり時を刻み、口をきこうとする者はいなかった。資料から目を離してペットボトルを口に運んだとき、真二は自分の首筋を汗が伝っているに気づいた。それが冷や汗ではなくてただの脂汗だったならどんなにいいだろうか。青島真二は祈る思いで顔をあげた。ちょうどその時、壁にかけられた時計の長針が2時10分を知らせてカチリと震えた。

時間になってしまった。体中から体温が引いてゆくのが分かった。体が動かない。それは同じ場所に居合わせた残りの男達も同様だった。同じ時間に、彼らほど時の流れが止まってくれればと願った人はいないかもしれない。そして彼らほど、目の前の現実から目を背けたいと望んでいる人もいないかもしれない。ただ、田中正志一人を除いたならば。

全員の視線が田中正志に向けられた。

彼は椅子から立ち上がり、そして口を開いた。

「ご覧のとおりです。この資料には私が四ヶ月かけて調べたことの

全てが載っています。われわれの会社が犯してきた、証券取引法違反やそのほか諸々の犯罪の事実は、すでに警察にばれているんです。はっきり言って、強制捜査に踏み込まれるのも時間の問題でしょう」「それで？」横須商券の副社長である橋元義介が、口を挟んだ。「それで我々にどうしろというんだ？」

「私は……自首することが今この状況における最善の方法だと思っています」

挑戦を仕掛けてくるような、固い口調で田中は言いきった。いや、文字通り今この男は俺たち横須証券取締役の5人に向かって挑戦を仕掛けているのだ。横須証券の一社員として、共に責任を負う者の立場から。同時に事件の当事者達を周りから見る外野の位置に立つて。そう、あくまで外野に立つて。

「本気で言っているのか」

小暮が低く唸るような声で言った。敵意をむき出しに、田中のことをにらみつけていた。

「無論です。それ以外にあなたたち……いや、私を含めて、今のこの会社に行きこなすことなど無いではありませんか？」

真二は、田中正志という男のことを何度か人伝で聞いていた。体力があり、仕事も特別できるという訳ではないけれどきちんとこなし、マイペースな所はあるが人付き合いはいいらしい。たしか人事課長の宗谷が昇進させるべきかどうか悩んでいたのを聞いたのだ。『ただ、彼はマイペースなところが強くって。人に使われるのも使われるのも苦手だからどうしようか迷ってるんですよ』

酒の席で聞いた時には、そんな奴がいるんだなという程度にしか思っていなかった。

その男が今、自分達の目の前にたって、俺たちに破産の宣告をしようとしているのだ。真二は自分が悪夢を見ているような気がしてきた。いやに現実味があつて、残酷で無慈悲な悪夢だった。

「仮に今動かなくなつてたつて同じことです。幾日か経てばあなた達は逮捕されてしまふだろうし、今回のことに関わつてきた橘組の

連中も、おそらく捕まることでしょう。むやみに延命の手立てを講じているよりも、今自首してしまったほうがいいと思いませんか？」

小暮がいきり立って言い返した。

「万が一警察が何の動きも見せないようだったらどうする。むざむざこの身を引き渡すようなことになったら、むやみに逮捕などされたら、出所してどうやって生きてゆけというんだ」

「それはご自分で考えになることでしょう」

予章（2）

小暮はきつと目を上げていった。

「たとえ君がなんと言おうと、私は会社を出て行くつもりはない」

田中は答えに困って一瞬うろたえて見せた。それからおもむろに大きく息を吐いた。吐き出した息が心の中の憤りに火をつけて燃え上がり、田中の口をついて出てきた。

「どうして分かってくれないんです？」

小暮の頬に痙攣が走った。

「分かっているんだと？！分かっているのは君のほうじゃないか！われわれはこのことが見つければ破滅するんだ。財産も家庭も地位も体面も、この先の人生全てが消えてなくなるんだ！自首すればどうにかなると思うているのか？罪が軽くなればそれだけで十分だといったいのか？君は何も分かっている。たしかにそうかもしれない。どうせ逮捕されるなら自首したほうが言いなんてことは、私にだって分かっている。だが、逮捕してつかまっても、自首してつかまっても、結局は同じだ。全て破滅するんだよ！」

ぱんつと大きな音を立てて小暮の両手が机を叩きつけた。振動が真二の手元にまで伝わった。

息を切らして目をギラギラと光らせていた小暮から、とつぜん空気が抜けたように怒りが消え去り、その顔が悲しみであふれだした。まるで、声に出していつてしまったことで今まで見えていなかった現実の全てが急に目の前に姿を現して、小暮の表情に影をおろしたかのようなだった。

「どうして……こんな目にあわなきゃならない……。どうしてわたしたちがこんな目にあわなくちゃいけないんだ」

真二はたまらなくなつて顔を伏せた。机の上、目の前に田中の作つた資料があつた。

俺が横須商券に勤めていなければこんなことにはならなかった。

俺が横須証券株式会社の専務をやってさえいなかったら、目立つた職についてさえいなかったのなら、こんなことにはならなかったのだ。

「やめましょう……。いま嘆いたって仕方の無いことです」

橋元が消え入るような小さな声でささやいた。不気味で、悲痛な沈黙が流れた。

「わるかった。もう取り乱したりしないから、続けてくれ」

言葉を次ごととする者はいなかった。誰もが口を閉ざしたまま、丸々1分くらいの時間が流れ去っていった。

こんな会議を開いて何の解決になるのだろう。暴力団に寄生され、息も絶え絶えの会社に、生き残るすべなど残されているのだろうか。真二には何をどうすればいいのか分からなかった。解決なんてものはありえない、全てが手遅れなのだと、知らない声がささやいていた。あの男の死も、伊横須証券役員6人の運命も、この会社の末路も、全てはこの茶番が始まった時から決まっていたことなのだ。いまさらどうあがいたって、何も変わりはない。

「……このままではだめだ」

田中の声が会議室に響いた。真二は顔をあげて田中のほうを見た。「奴らの動きを放っておいたら、どのみちこの会社は今よりずっと悪い目を見ることになるんです。仮にあなたたちが捕まらなかったとしても、それだけは決して変わらない。私たちには何の対抗策も残されていないんです」

「ならば考えるのだ」小暮が答えた。

予章(3)

「どうせ何もしないで逮捕されるといふのなら、私はできるだけのことをする。証拠なんて消してしまえばどうにでもなる」小暮は突然こちらを向いた。「青島」

「はい」唐突に呼びかけられて、真二は思わず身構えた。

たちはなくみ
「橘組側とのコンタクトはどうなっている」

「羽鳥のことですか？」

真二は答えに迷った。本当のことを言ってしまうと、交渉は全く進んでいない。けれどもこの場でそんなことを言ってしまったら、5人の絶望感はさらに深まるにちがいなかった。今まで羽鳥とのコンタクトを行ってきた者として、今の状況を作るきっかけを生んでしまった者として、真二にはそんなことはできなかった。

「現時点ではあまり齒ごたえがあるとはいえませんが、この資料を見せつければ、相手も多少態度を変えてくると思います。今までの出来事が全て警察に露呈されると知れば、無視はできないでしょうから」

「少しの間の時間稼ぎにはなるな」と橋元がうなずいた。

田中は役員達のやり取りを脇で聞きながら、目の前が真つ暗になるのを感じていた。この人たちは、本当に何も分かっていない。自分たちが今どんな立場に立っているのか、それさえも理解できていないのだ。

ばかばかしい。俺は一体何のためにここに来たんだ？体の周りの気圧が一気に上昇する感覚に包まれて、気付くと田中を怒鳴り声を上げていた。

「いい加減にしてください！」

全員の視線が田中のほうへ向けられた。今まさに何かしゃべろうとしていた橋元も口をつぐんだ。

「あなたたちは目先の問題について考えているだけで、現実を見て

いない。警察の動きをこれだけ見せつけられておいて、いまさら証拠の隠滅や、暴力団との問題を議論して、何になるというのです！」
声は会議室中に響いた。

「もうやめましょう・・・こんなことは。せめて最後に、奴らに一泡吹かせてから締めくくりましょうよ。それがわたしたちが堂本にできる、唯一のはなむけじゃないですか・・・」

最後の言葉は震えるのを抑えきれず、田中は言ってから、こらえきれなくなつて顔をうつむけた。悲しみの波が、嘔みたいに胸の奥からあふれ出してきた。

田中の脳裏に、堂本のあの屈託ない笑顔が浮かんだ。笑顔に続いて次々といろいろな場面が頭の中に蘇った。消そうと思えば思うほどその姿はより鮮明になり、記憶が際限なくつむぎだされた。胸にこみ上げる熱が田中に思い出のつらさを教え、忘れようと努めていた後悔の念が再びこみあげてきそうになった。

俺はなんて馬鹿だったんだろう。

田中は自分の身勝手さに吐き気を感じた。

予章（４）

「・・・証拠を消すんだ」

小暮は頑として言い張った。

田中は小暮の目をじっと見つめていたが、何も言わなかった。この人は決して自分の意見を曲げたりしないだろう。末端の一社員である自分でさえもそれはよく分かっていた。横須商券の二代目社長の座に着いたときから、今までもずっとそうだったのだ。

「こんなことをしているようだから、いつまでたってもこの会社は先代の頃よりも大きくなれないんじゃないですか」

「なんだと！」

小暮が立ち上がらんばかりの勢いすごんだ。

言ってしまうてから後悔したが、どうしようもなかった。田中はすごい剣幕でにらみつける小暮の目を、なるべく毅然として見えるように睨み返した。

「やめてください」あわてて橋元が止めに入った。

小暮は黙ったが、じつとにらみつけるのだけはやめようとしなかった。

前社長が胃がんで倒れた直後に急きよ後継者へと抜擢されたのが、当時総務を務めていた小暮久則だった。５６歳という年齢にもかかわらず、社員の誰よりもエネルギーで、商売意欲ならば誰にだって引けをとらない。その反面、他人の意見を受け入れる柔軟性と寛容さに欠けているという欠点はあった。いや、自意識過剰だったといったほうがいいかもしれない。実力が伴っているがゆえに、その自信には鉄壁の要塞のような揺るがなさがあり、総務職にいたときからすでに人と手を組んで仕事をすることを避ける傾向があったらしく、５年前に社長の椅子についてからはその性格に拍車がかかった。

「そうだ」突然、小暮が言い放った。「君の言い分はよく分かった。

では、てつとり早い話ここで多数決を取ればいいじゃないか」

真二は愕然として息を吸い込んだ。もう決めてしまうというのか。
「手を上げるのは今ここにいる7人だ」

「しかし多数決とは……」

堀口は何か言おうとしたが、次の言葉が思い浮かばずに口をつぐんだ。

「意見がありますか、堀口代表？」

「あ……」

堀口はYESともNOともつかずに口をパクパクさせたが、結局、何も言わずに口を閉ざしてしまった。

「君は構わないか、田中君」

「ええ、構いません」

「反対の人はいますか？」

不気味な沈黙が流れる。全員が体を固めたまま、口を開こうとしなかった。

どうして皆黙っているんだ？本当にこのまま全てを決めてしまってもいいのか？これから自分の運命が決定されてしまうかもしれないというのに、どうして誰も何も言おうとしないんだ？

「では、自首することに賛成の者は、挙手」

田中が手を挙げた。

俺は一体どうしたらいいんだ？田中の言っていることは正しい。むやみに策を弄しても、状況がよくなるわけじゃない。それは分かっている。けれども、この俺にいまさら逃げ出す資格などあるのか。全てを始めるきっかけとなった俺が逃げ出して、巻き添えを食らった奴らを置き去りにするなんてことが果たして許されるのだろうか。そのとき、橋元の手が上がった。

辺りの空気が凍りついた。小暮が、私たちの味方じゃなかったのかという表情で堀口の方を見た。

数秒後、浅井の手がゆっくりと上げられた。

小暮の顔からわずかに赤みが引いていった。3人の手が拳がつて

いる。

どうしたらいい。上げてもいいのか、いけないのか？自首するのか、それとも全てを隠しとおすのか？しかし、答えは誰からも返ってこなかった。真二は自分が孤独なのを感じた。

1時間も2時間も時間の経ったような気がした。あらゆる物が止まっていた。鼓膜の下に、心臓の規則正しい鼓動が伝わっていた。体を動かすことができない。真二は不意に、電話口で青い封筒を片手に立ち尽くす自分の姿を思い出した。何もかも、あの時と同じだ。あれだけの後悔の後で、自分は何一つ変わってない。警告もできない。ただ手を上げるといふことさえできないのだ。

やがて小暮がゆっくりと口を開いた。

「3人だ」

力がすっかり抜け落ちたみたいに、田中はパタリと腕を垂らした。橋元の手が、静かに下げられた。

「経営の継続に賛成の者は挙手」

4人の手がいつせいに上がった。

「経営を継続する。これで決定だ」

小暮は厳粛に言い切って、田中のほうを見上げた。全てが決まった。俺と、ここにいる6人と、横須証券の運命はいま決定された。

田中は表情をなくして遠く向うを見つめていた。真二はその瞳の中に妖しげな光を見たような気がした。

「これで解散とする」

いつもの硬い表情で、小暮は立ち上がった。堀口が、谷屋が、そして浅井と高橋もうつむきながら立ち上がり、真二はそれに続いた。一人、また一人と重役たちは部屋を後にし、最後に1人立ちすくむ田中に一瞥をくれてから真二も部屋を出て行った。

背中の後ろで、会議室のドアが音を立てて閉まった。

第1章（1） / 1

1

5月13日

電灯が一つ浮かんでいる。

青島一輝は夜の道を一人家へと向かっていた。人影はなく、音を立てる物もない。

まるで体に重りが乗っかっているかのように歩くのがつらかった。疲れがたまっている時ほど、いつもの道のりを長く感じる時はない。早く帰ってゲームでもしたかった。そうじゃないんだったらさつさと眠ってしまいたい。

山村先生の声が、突如、頭に浮かび上がった。今日の午後の部活でのことだ。一輝たち1年生の部員は全員、剣道場の前に立たされていた。

「次のテストで順位を10位上げられなかったやつはペナルティだから」

何で部活の顧問にまでそんなことを言われなければならないのか、意味が分からない。一輝の隣に立っている吉沢はこちらに視線をあわせて、口には出さずにそう言っていた。一輝は危ないから前を向いてろと視線を返した。

「剣道部の今年の一年生は、どうも成績が悪いとの話をきいた。部活をがんばったって、勉強を怠けてるんじゃないからな」

村山先生はそういつて部員に睨みをきかせた。常に起こりっぱなしの顔に、さらに威圧感が増す。

結局、勉強の話も含めて一輝たちは延々15分間も鬼顧問の話を聞かされるはめになった。部活が終わって、それこそ意識が飛ぶん

じゃないかと思うほどきつい練習を終えた後に先輩が言ったことは、このお説教は毎年恒例の儀式のようなものらしい。

成績が悪いつていうのもたぶんでっちあげだよ、とも聞いた。吉沢はそれを聞いて、帰る間中ずつと愚痴をはいていた。ただ、一輝やその先輩は、吉沢本人の成績に関して言うならば鬼顧問の話はあながちでたらめとはいき切れないな、とひそかに思っていた。

なんにしても今日は期末テストの一週間前だ。いやでも帰ったら勉強しなければならぬ。十分きつい練習なのに、その上ペナルティを食らうなんてごめんだった。

桜園公園に差し掛かったところでふと見ると、備え付けの柱時計が11時の少し前を指していた。塾から帰るのはいつもこれくらいの時間なのだ。それから帰ってから学校の勉強もしろというのが、そもそも間違っているのだと一輝は思った

マンションに着いた。パスワードを入れて中に入り、青島家の部屋がある12階までエレベーターを使う。

ただいま、と言いなながら玄関を上がって、手洗いうがいを済まし、そのままの格好で居間に入って、用意してあった夕食をさっさと平らげた。

部屋に下がろうとすると、母さんが一輝のことを引き止めた。

「明日から期末テストの一週間前でしょ？」問い詰めるように聞いてきた。

「そうだけど」

「じゃあ、部活はないのね」

母さんはそういうと、安心したように台所へ引き下がった。どうやら一輝に期末テストのことを思いださせようとしたらしい。一輝は、ついさっき一生忘れられないほどに念を押されてきたばかりなんだから、わざわざ確認することないだろうとうんざりした。

自分の部屋に入って、ベッドにカバンを放り出す。机の前につき卓上ライトのスイッチを入れた。カバンからノートを一冊取り出して英語の予習を始めようとしたときだった。

突然どこからか男の怒鳴り声が聞こえてきた。

第1章(2) / 1

「もつとよく見せる！」

声はどうやら廊下のほうから響いているらしかった。同じ階か、それとも別の階だろうか。反響していて、それもドア越しにくぐもって聞こえているのでよく分からなかった。ロイヤルマンション坂田に引っ越してからもう5年になるけれど、喧嘩や暴動のような騒ぎをお目にかかったことは今まで一度もない。一輝は気になって耳を傾けた。いったい誰がさけんでいるのだろうか？

耳を澄ますと、小走りで外の廊下を踏み鳴らす音が聞こえてきた。ずいぶんと乱暴な印象を受ける。

足音が消えて何の音も聞こえてこなくなった。

おそらく、「もつとよく見せる！」と怒鳴った声の主が、今まさに「よく見せ」てもらっているところなのだろう。

しばらくの間沈黙が続いた。一輝はずっと耳を澄ませていたが、外からは物音一つ聞こえてこない。予習を片付けなければならないことを思い出し、粘るのを諦めてて机に向かおうとした、次の瞬間、さつきと同じ男の声が廊下いっぱいに響いた。

「こんなことをしたって無駄だぞ！」

再び沈黙が流れる。

「あの人は今日来れない！」

誰と話しているのだろう。一方の男の声ばかりが大きくて、相手の声が聞き取れない。だけど、会話をしているのは確かだった。

クソツという悪態に続いて男の駆け足の音が響いた。足音から男のあせりや不安が伝わってくるかのような、あわてた、せわしない靴音が廊下を叩き、それがだんだんと小さくなってついに聞こえなくなった。どこかに行ってしまったようだ。

廊下から聞こえてくるのは、後に残されたもう一人の人物の足音だけだった。その人物がどこに行くのか多少気になったけれど、勉

強を放り出してまでする必要があったとは思わなかった。一輝は机の前に居直って、ノートに手をつけた。

突然、玄関のドアが開いた。

「ただいま」

父さんの声だ。一輝は弾かれたように玄関の方向を向き、ぼうぜんと壁のむこうを見た。廊下から足音は聞こえてこない。0だ。1 - 0 1。1は父さんだったのだ。

どうしたのさっきの、と問い質す母さんの声が聞こえた。なんでもない、と返した返事はひどく疲れているようだった。

一輝の父、青島真二は、横須証券という証券会社の社員を勤めていた。よくは知らされていないが、重役を勤めていて、このマンションに引越そうと言い出したのもほかならぬ父さんだった。どうせ引越すのなら東京のほうがいい、という母さんの反対も押しのけて決められたらしい。今に至っても、一輝は千葉県の一角に住居を構えた理由を聞いていないし、何度聞いても二人はそのことについて話してくれなかった。

常に落ち着いて、それでいて冷たい雰囲気を持つ父親だった。少なくとも一輝はそうだと思っていた。一緒に公園や旅行に言った記憶はほとんどない。もっとも、父さんと近くにいる機会が少なかったのは仕事が忙しかったせいでもある。

それにしてもさっきの男は何だったんだろうか。しゃべり方からしても、あの足音の雰囲気からしてもあの男が素行の良い一人前の男とは言いがたかった。それだけではない。父さんもまたそのような男を黙らせ、取り乱させ、あわてて退散させるだけの何かをしていた。金銭関係か、仕事の関係か、単なる因縁か、それとも女性関係だろうか？最後の一つは無いな、と思い、すぐに懸案項目から外したが、どれにしたって、男のあのあわてきつた態度を説明することはできていなかった。

一輝が一人想像を膨らましている間に、真二は自分の部屋に引き下がってしまった。

部屋の扉がバタンと音を立てて閉まった。

第1章(3) / 1

一輝は、前にも似たようなことがあったのを思い出した。あれは10年近く前のことだ。当時は埼玉にある母側の祖父母の家に住んでいて、一輝はその頃小学校の入りたてだった。学校ではようやく数人の話し相手ができて、帰り道に一緒に話しながら帰ったのを覚えていいる。同時に、6年間通った通学路が頭の中によみがえってきた。

家に帰ろうとすると、玄関の前に二人組みのスーツ姿が立ちふさがっていた。今でさえ駅の中によく見かける普通のサラリーマンの風体が、あのときはひどくおっかないものに見えたのだ。一輝は近寄ることができなくて、結局近くの通りに止まって、近くの建物のかげに隠れることにしたけれど、男たちは一向に立ち去る様子が無かった。それも時々、インターホンに向かって何かいっているのが見えた。とても、温和な雰囲気とは言いがたかった。一輝はその間ずっと、泣きそうになるのを耐えていると、やがて日も暮れて辺りが暗くなってきた頃に家の中から祖父が出てきた。

眉を寄せて、男達に向かってたしなめるように何かを言うと、男たちもそんな祖父に向かって何やら言い返した。しばらくして、祖父は男たちの間を通りぬけるように道路に出てきて、陰に隠れている一輝のところへと駆け寄ってきた。

こんなところにいたのか。さ、おじいちゃんと帰る。祖父はそれだけ言って、一輝の腕を引いて家に入った。玄関を通る時に、一輝はじっとこちらをにらみつけていた2人の男のことを見上げた。それは、生まれてはじめて目にした。疲れと絶望とで打ちのめされた人の表情だった。その時の一輝にはその表情の意味が分からなかった。男達が父の勤める横須証券の系列会社の社員で、後に契約を打ち切られたということを知ったのは、それから4年ほど経ってからだった。

時間が無い。さつさと宿題を片付けなけりゃ。一輝は目を覚ましたみたいに慌ててシャーペンをつかんで机に直った。父さんのことはとりあえず後でまた考えよう。いちいち構っていたらきりが無い。隣の部屋からは、ひっそりと静まって何の物音も聞こえてこなかった。

第1章（4） / 1

晴天。

雲ひとつ無い空に太陽がさんさんと照っている。それなのに、東京の街中は凍りつくような寒さで道行く人々を包み込んでいた。

「あいつほんつとにありえないんだって」

車の滑走音にかき消されないように香川が大声を張り上げた。

「俺もう、五千円は貸してるぜ」

「何に使ってるんだよ」

「……とかじゃない？」横を通り過ぎていったトラックが香川の言葉を引き裂いた。

「俺だけじゃないぜ。相沢とか西原は一万くらい貸してるって言うてた。全部で五万くらい借りてるって西原は言ってたな。このままじゃ絶対返ってこないだろな」

「お年玉は？」

「あつても使っちゃうだろ」

「それじゃどうしようもないな」

一輝と吉沢は笑った。

駅から市川中学高等学校までは8分くらいの距離だった。一輝と吉沢と香川の3人は、通学路のビルの間を歩いていった。通りを折れてしばらく行くと、学校が姿を現した。ビルの面する大通りからはだいぶ離れた、都会の喧騒から見放されたような場所だ。少し距離を置けば、地元の人たちでもここに学校があることを知らない人のほうが多いのだそうだ。日々の忙しさに追われているこの都市では、自分に関係の深いこと以外はあまり重要でないらしい。生徒にしてみれば、自動車の音も無く静かでけっこうだった。

市川中学高等学校は、創設から10年もたっていない新しい私立学校であった。東京都の東端に位置し、地価が高いせいか面積は窮屈なくらいに狭くてグラウンドも何とか申し訳が立つという程度の

広さで、そのくせ建物だけはやたら高く作られていて7階まであった。おかげで音楽室や理科室などの移動教室のとき生徒にとつては一苦労だった。進学実績は他の私立に比べると中間より少し下くらいでお世辞にも流行^{はや}つてる学校とはいえなかったし、一輝が中学受験でここを受けたのも第4志望としてで、理由は自分のうちから比較的近かったというだけのことだ。しかし結局第1志望から第3志望までを落ちてしまい、ここに来ることとなったわけだった。もっとも、それらの落ちた学校というのは母さんが半分高望みで受けさせた学校で、一輝はもともと受かるなんて思っていなかったし、第5志望の学校は市川よりも偏差値は高かったがとても通えるような場所じゃなく、はじめから中学で受験をするんだったらここに来ることが決まっていたようなものだった。

3人はしゃべりながら学校に入った。教室にはまだあまり人がいなく、一輝たちは話をしながらS H Rが始まるのを待った。
ショートホームルーム

やがて教室に人が増えて、そこかしこが盛り上がって来る頃になって、ようやく1年4組担任の藤村先生が教卓の前に立った。40代前半の男の先生だ。規則や礼儀にうるさくその上怒ると怖いので、誰も口にはださないものの、あまり生徒からの印象は良くない。「席について」

教室中のしゃべり声が潮の引いたみたいに小さくなり、皆は席に着いた。

藤村先生は欠席者をチェックして連絡を言うのに、ものの1分もかけなかった。叱り散らすのにかける時間は10分や20分だつてかけるくせに、こういう事務的なことにはひどくせっかちなのだ。

一輝はだからまさか、S H Rの後に先生が教室に残り、自分のところに歩み寄ってくるものとは思ってもいなかった。

1時間目の準備をしようと、下に置いたカバンを開いた時だった。「青島」

いきなり頭の真上から声をかけられて、思わず反射的に「はい！」と言っていた。顔を上げると藤村先生がすぐ目の前に立っていた。

いかつい強面の眉間にしわを寄せ、こちらを見下ろしている。心臓が不整脈を起こして縮み上がった。

「ちよつと来い」

頭が真つ白になる。一体何のことで怒っているんだ？部活・・・勉強・・・それとも生活態度か？どれにも心当たりは無かった。でも何かあるのだ。

言われるままについてゆくしかなかった。教室中、ほとんどの人がこつちを見て、興味ありげにささやいたり、苦笑いや、笑いを浮かべたりしていた。恥ずかしいのと不安とで顔が熱くなるやら青ざめるやら、変な感じだった。一輝は諦めて藤村先生の後に続いた。

藤村先生は教室の外に向かって歩き出した。一輝もそれについていく。先生が怒る場所と言うのは、6割以上が教室の前、3割が通学路などの校舎の外、そして残りが職員室だと決まっている。一番危険な場所が、職員室だ。しかし、廊下に出た藤村はそこで立ち止まらずにさらに進んでいった。無論、校庭に出てから用を済ませよう、ということではあるまい。職員室に行くのだ。一輝は啞然とした。怒られるようなことをした覚えは無いのに。移動教室の途中の人たちからの注目を集めながら、一輝は放心状態で歩き続けた。

「呼んできました」

職員室の扉を開けてすぐに、藤村先生が言った。

「ありがとうございます」

答えながら立ち上がったのは、部屋の奥のほうにいる、見たことの無い若い男の先生だった。深刻な表情を浮かべて一輝のことを見ている。

職員室は授業用の教室3つ分くらいの広さで、それでもたくさん的大型机や資料の棚などで埋め尽くされていてとてもごみごみしていた。机は上がプリントやファイルなどで埋もれているものなど少なくなく、そこに座って次の授業のない先生がパソコンに向き合っただけという画面をにらんだりしている。

藤村先生につれて来られているというだけで、職員室にいる先生

が皆「なにをして怒られるんだ？」という非難の目で一輝見ているような気がして、一輝は、廊下を歩いてきた時に味わった恥ずかしさよりはましかもしれないけれど、やはり不安が頭の中を渦巻くのを感じた。

「青島君。ちょっとこっちに来てくれる？」

一輝は言うとおりに、その先生のところへ向かった。不安感で押しつぶされそうになるのを必死に耐えようとする。頭の中ではまだ、どうしてこんなことになったんだ、という疑問が行ったり来たりしていた。

ふと、その先生の机の上で何かが動いているのに気が付いた。横からなのでよく見えないけれどあれは、パソコンの画面だ。画面に何かが映っている。近づくとつれて、それは何なのか少しずつ見えってきた。

一輝は机の前まで来て、立ち止まった。いまや画面の中の映像が正面から見えた。

「見ての通りなんだ。今、大変なことになっている」

一輝は、さっきまでのショックが物の数に入らないことを悟った。画面に移る父親の顔を見て、一輝の思考は完全に停止してしまっていた。その映像が今まさに、走り去っていく警察の車輛を捉えている。

”横須証券 経営者6人が逮捕”のテロップが、”生中継”の文字の横でチカチカと点滅していた。

第1章(5) / 2

2

5月13日

「社長！何か言ってください！」

「橋元さん、今回の事件について・・・」

「今回の事件の責任についてどうお考えですか！」

こいつらは本当に人に向かって質問をする気があるのか、と前田は疑問に思った。こう矢継ぎ早にまくし立てられちゃ、言いたいこともいえないだろう。言っただとしても聞き取れやしない。

「前田！何やってんだ！」同僚の宮元が叫んだ。「お前も撮れよ！」撮ろうと思っても撮れないのだ。人だかりの先は、相変わらず目を開けていられないくらいのフラッシュであふれていた。それは6人の容疑者の移動とともに、少しずつパトカーの待つ道路へ向かって動いていった。

さがってさがって、という警官の声も聞こえた。今日の逮捕劇の予定がどうしてマスコミに知れ渡っているのか、あの警官はきつと訳が分からずにいるに違いない。それはまた前田にとっても同感だった。つい2時間前までは、自分がこんなところで横須証券の役員の逮捕の場面取材するはめになるなんて、予想だにしてなかったのだ。

「今すぐ××駅に行ってくれ」

前田はパンツ一丁、ほとんど裸の格好で受話器を取っていた。ついさっきまでシャワーを浴びていたのに、電話の呼び出し音があまりにもしつこいので仕方なく出たのだ。受話器の向うで待っていたのは、なんと加持^{かじ}だった。

「どうしたんです」

羽間出版、編集長の返事はほとんど間を置かずに返ってきた。

「スクープだ。横須証券の取締役がこれから逮捕される」

「え」

あの横須証券が。そいつは間違いなく大スクープだ。

「本当ですか」

「いや、本当かはどうかよく分からない」

「どういうことですか？」

「匿名で電話がかかってきたんだ。横須証券の社員だと名乗っていた。それ以外は何も言っていない」

「信憑性に欠けますね。ただの悪戯じゃないんですか」

「悪戯だったらもっと大手の出版社にかけるさ」加持は意気を高揚させて言った。

「大手だったら相手にもされないでしょう。ネタに困ってて、全く信用できないような悪戯でも喜んで信じてしまうような小さな出版社だから、電話をかけてみたんじゃないんですか？」

加持編集長はこの手の冗談が通じる人だったが、それでも士気をそがれたらしくウームと唸った。

「あたってなんぼだ。とりあえず行ってみる。宮元の奴にも言っておいたから7：30には××駅についてるはずだ」

7：30。あと1時間もなかった。こうなったら行くしかないだろう。

「すぐに向かいます」

それから急いで服を着て、家を出た。コートを羽織るのも忘れて出てきたので、電車を降りてから後悔した。

宮元と合流してから、のんびり歩いたのがいけなかった。会社の前には既に大きな人だかりができていた。

「一言お願いします！」

聞いていて、まるで断末魔の叫びのように思えた。

小暮社長がパトカーに乗り込もうとしていた。無駄な抵抗のような気がしたが、前田はできる限り前の記者に体を押し付けて、頭の

上に掲げたカメラのシャッターを切った。2枚、3枚と、社長の頭にフラッシュを浴びせる。洪水のようにシャッターの音が鳴り響き、どれが自分のものなのかも分からなかった。

「社長！」

最後の喚声を合図に、小暮社長を乗せたパトカーが発進した。パトカーは始め緩やかに、だんだんと速くなって遠ざかっていった。とどめの一枚を撮り終わると、シャッターの大合唱は次の獲物の所へと移ってゆく。

第1章（6） / 2

6人の重役は警察につれられ、次々とパトカーに乗り込んでゆく。最後の一台が会社の前を離れていつてから、辺りはようやく静かになつてきた。

野次馬に来ていた観客たちの数は徐々に少なくなっていくが、入れ替わりに通りを歩く新たな野次馬たちが、記者に向かって事情を尋ねたり、立ち止まって何事だろうかと横須証券のビルを眺めていた。

「撮ったか？」

宮元が息を整えながら近づいてきた。スーツは乱れに乱れ、まだ軽く息を切らしている。嵐の中から出てきたような格好だ。

「ざんねんながら」

「もう少し早く来てればな」宮元が悔しそうに笑った。「まさかこんなにいるとは」

「そっちは撮れたのか？」

宮元は肩にかけたカメラを手にとって、「何枚撮ったのか覚えてないくらいだ」と答えた。

護衛をしていた数人の警察官たちの乗るパトカーが、2人のすぐ横を通り過ぎていった。ぐったりと座席に寄りかかっている制服姿の男の姿が、ドア越しにちらりとうかがえた。たったの4人でこれだけの報道陣を相手に奮闘し、ごくろくなことだった。

「どうして知れ渡ってたんだろう？俺たちの知らないところで情報が出てたのか」

羽間出版は、業界でも全くの名の知られていない小さな出版社だから、そういうことも大いにありえた。

「うちに電話をかけたのと同じ奴が触れ回ったんじゃないか？」宮元は襟を整えながら言った。

「その自称“横須証券社員”って奴がか？」

「そいつはきつと強烈な自己顕示欲の持ち主か、よっぽど暇をもてあました愉快犯だな。自分の会社のトップが逮捕されるのを報道するなんて、普通じゃ考えられない」宮元はまるで分かったように口をきいた。

「他の会社の人間が情報を握って言いふらしたのかもよ」

前田の言ったことは無視して、宮元は、どうする？このまま戻るか？と尋ねてきた。

「すぐ帰ってもしょうがないから、そこらの喫茶店で休んでこうぜ。たしか駅前によさそうな所があったと思う」

急いで戻る必要は無かった。羽間出版では時事的なニュースをとりあつかった雑誌や新聞は一つもだしていないのだ。

来た時に持っていた地図を前田がもみ合っている間に落としてしまい、しかたなく同じく駅に向かう報道陣の後をつけて2人は駅にたどり着いた。

喫茶店“ブルボン”はアンティークな装飾を施したおしゃれな店だった。昼前だったので中は空いていたが、いつもはもっと多くの人でにぎわっているのだろう。

「今回の事件にどれくらいページを割くかな」宮元は飲んでいたコーヒーを手元に置いた。

「加持さんは乗り気みたいだったけど、今回のことはうちの出している雑誌のコンセプトにも合っていないからなあ」

羽間出版の出す雑誌の中でもっとも印刷数の多い『モダン・ヒストリー』で扱うのは、一昔前の社会問題や、世間に忘れ去られた事件の裏舞台、そこで織り成されてきた知られざるストーリー等だ。誰も手をつけなくなったところを見計らい、独自の調査や取材を行い、そこにあるものを詳細に描いてゆく。けれども時事的なニュースは載せないし、物好きしか買わないから出版部数はなかなか増えない。

「だろうな」宮元は残っていたコーヒーを飲み干す。「こんなに頑張っ張って撮ったんだけど」

「でも電話かけてきた時は、加持さんかなり興奮してたぞ」
「そりゃあ自分の出版社の独占スクープとなれば、誰だって多少張り切るさ」

第1章(7)/2

「それにしても、何か意図でもあったのかな。俺だったら自分の会社の悪いニュースを流そうなんて思わない」前田はつぶやいた。

「ということは、あれは横須証券の社員じゃなかった、ってことか？」

「普通に考えたらそうだ。でも、部外者がどこでそんな情報を得るんだ？」

「警察だったら簡単に分かる」宮元が提案した。

「警察官が、たとえ面白そうだからってこんなことするか。だいいち警察にしてみたら、マスコミに知られるのは逆に迷惑だろ」コーヒーを飲もうと手を伸ばしてから、前田は空になったカップを不満げにみつめた。「事件に絡んだ人物が密告したとか？」

言うてから、ありえないことだと気づいた。放っておいても世間のさらし者になった事件を、何で前もってアピールをする必要があるのだろうか。そもそも、事前に情報を得ることができて、且つこんな真似をするだけの目的を持つ人間がいるだろうか。

「まあ今後の展開しだいであるさ」宮元はポケットから携帯を取り出した。「もうニュースが流れてる頃だろ」

見せてくれと言って画面を覗き込んだ。ボタンを数回操作すると横須証券本社ビル前の映像が画面に映し出された。リアルタイムではなく、逮捕劇の様子をプレイバックして流したもので、画面はひどく横揺れしていた(宮元はどこにも映っていなかった)。逮捕された6人の顔のアップが次々と映され、記者達の絶叫に近い質問の声と、役員5人の無言とがテロップとなって表示されている。5人の顔は、土気色といっていいほどに青ざめていて、ひっきりなしに浴びせられるフラッシュの光のせいで余計に白く見えた。

音楽とともに映像が切り替わって、正面に女性キャスターが現れた。

『今日午前7時50分ごろ、本庁は株式会社横須証券の役員5人を、証券取引法違反の容疑者として逮捕しました。突然の逮捕に、これから日本の株式市場に大きな影響が出ることが予想されており、また、横須証券が進めていた山本ファンドの買収についても、今後変化があるものと思われます。今回横須証券が行ったとされている不正取引とは、先月6日に・・・』

証券取引法違反なんて、ちょっと遅れてる。いちど世間で騒がれた事件ていうのは、汚職事件を除けば、当分の間は起きないものだと思っていたのに、とすると、横須証券はなかなか懲りない会社だった。

そのとき、前田は不意にあることを思いついた。

「なあ、この事件を『モダン・タイムズ』に載せられないかな。トップ記事としてさ」

「そりゃ無理じゃないか？『モダン・タイムズ』じゃ昔の事件しか扱わないし・・・」

「違うんだ。今回の事件と前にあった事件を一緒に書くんだよ。昔流行した証券取引法違反の犯罪を題材にして、今回の事件はその照らし合わせの材料にするんだ」

「なるほど、いいんじゃないか。加持さんに相談すれば載せてくれるかもしれない。旬のニュースと関連づけて発行部数もアップってわけか？」

「そうじゃない」前田は身を乗り出して言った。「このままじゃいけないと思わないか」

「何がさ」

「このままじゃ、羽間出版はずっと保守的で流行おくれな出版社だ。ほとんどの人たちには見向きもされないような雑誌を書き続けて終わっちゃう。そろそろ新しい物にも目を向けていかなきゃだめだろ」

宮元は突然口元に笑みを浮かべて言った。

「じゃあ、どうして羽間出版なんかに入ってたんだよ」

「入った時はこんなこと思ってたんだ」

宮元はコーヒーを一気に飲み干してから反論した。

「分相応つてものがあるだろ。最新のニュースを追いかけるノウハウも何も無い俺達にできることなんて、高が知れてる」

それを言われたら、元も子もない。

「とりあえず、やれるだけやってみるさ」

「応援はできないぞ」

「まあ精一杯がんばるよ」

なんかあつたら、途中経過だけでも教えてくれ、と言って宮元は笑った。

そう、とにかくやってみないことには何も始まらない。まずは役員の経歴を詳しく調べてみることから始めよう、と心の中でつぶやいて、残りコーヒーを勢いよく飲み干した。

第1章(8) / 3

3

7月5日

この日千葉県は今年の最高気温35 を記録し、うだるような熱天下にあった。

渋滞の真っ只中の国道 号では、車の排気と日光とでことさらに熱気がたちこめ、座席に座っているだけで汗が止まらない有様だった。動かない車の列にいる人たちは、目的や、どれだけ急いでいるかは違えど、皆同じようなストレスを胸にして自分の前方の車をにらみつけていた。久々の家族サービスで海に向かおうとしていた父親は、休日をこんな風に費やさなければならぬことに苛立ちをつのらせていた。4分の1をそんな家族連れの車が占めて、のこりは定刻に遅れそうであせっている運搬屋のトラックや、恋人とデートの場所へ向かうカップル、友人の家へ向かう途中の者など様々だった。どの車もクーラーの生ぬるい空気が充満していて、レジャーをしに行く人たちは、まだ何もしていないのに疲労感でいっぱいになっていた。それでも、彼らが「帰ろう」と言い出すことは無かった。

羽鳥という男だけは違っていた。彼は苛立ちもあせりも、わずかながらの疲労感すら感じていなかった。彼は考え事をしていた。彼の頭はそのことでいっぱい、とするとどこへ向かうために自分が車に乗り、渋滞に巻き込まれているのか、それすら忘れてしまいかねないような様子だった。彼はタバコを手を持っていたが、1度吸ったきりでもう半分が灰になっていた。明らかに、彼だけはここに居合わせる他の誰とも違っていた。

羽鳥は一時期前に売られていた軽自動車に乗り、安物の黒いスー

ツを羽織り、髪は自然体で短髪だった。助手席には使い古した黒い通勤カバンが置かれている。はたから見れば、何の変哲も無い通勤中の会社員だった。そこにはわずかながらの違和感も無く、また、そうであるようにと彼はいつも気を配っていた。

突然、どこからか音楽が鳴りだした。ロック調で、30年近く前の流行歌であり、彼の携帯電話の着信音でもあった。彼ははたと夢想の世界から我に返ってカバンから携帯電話を取り出した。

「羽鳥か」

電話口に出たのは、聞きなれた甲高い男の声だった。ヒステリックな調子が混ざっているが、それはいつものことだった。

「はい」

言わなくても分かるのに、相手は「俺だ、陣内だ」と名乗った。

「どうしました」

「集まるのは中止だ。連中の話はでまかせだった」

やはり今回のことは嘘だった。はじめから、あんまりにもスムーズに進むので違和感はあった。渋滞に巻き込まれて正解だったかもしれない。

「分かりました。それで後始末は誰が・・・」

「もう頼んである。とにかく今日のことは無しだ。じゃあな」

一方的に電話が切れた。羽鳥は軽く舌打ちをしてまた携帯をしまった。あの人と仕事をする、いつもろくなことが無い。どうしてあんなのが自分よりも上に立っているのか不思議でならなかった。

けれども用事がなくなったのは好都合だった。羽鳥はほとんど吸っていないタバコをそのまま灰皿につっこんで、100メートルむこうに立つ道路標識に目を凝らした。問題ない。ここから青島真二の家までそう遠くないはずだった。

第1章（9） / 3

あの事件が発覚してから、既に2ヶ月あまりがたった。その2ヶ月の間は、青島家の周りに警察がつめている可能性もあったので青島家の様子を見に行くのは避けていたが、これだけの時間が経っていないながら、いまだに周辺の監視が続けられているとは考えにくかった。もういいだろう。親友であり、また、俺が人生を破滅させた男の家族がどうしているのか、多少なりとも興味があった。

前の車が少しずつ動き出した。羽鳥も軽くアクセルを踏む。

思えばここは、青島に会いに行く時にいつも通っていた場所だった。たいていが、夜帰宅時を待ち伏せに来ていた。羽鳥と顔を合わせるたびに青ざめる青島を見るのは、一種の快感でもあり、哀れで心苦しくもあった。

最初に再開した時のあいつの驚き様を、まだはつきりと覚えている。あれは去年の夏・・・いや、春先のことだったかもしれない。土砂降りの雨の中だった。真夜中に自宅へ向かう途中の青島に後ろから声をかけたら、あいつは黙って固まってしまった。いきなり名前を呼ばれてどう反応したらよいのか分からなかったんだろう。

「誰ですか」

青島の声は雨の音でかき消されてほとんど聞き取れなかった。羽鳥が何も言わなかったから、あいつはもう一度「誰です？」と聞いてきた。

全てを話してやると、あいつは再び固まってしまった。今度は文字通りからだの芯から凍り付いてしまい、そしてからなきついてきた。地獄の中に光がさしたと思ったのだ。たすけてくれ、と震える声で青島は言った。聞こえたのはそれだけだった。消え入るようにか細い懇願は、雨の激しさに打ち消されて全く聞こえなかったのだが、聞こえていなくて良かったかもしれない。もし聞いていたら、昔の親友を裏切り、人生を破滅させるまでもっと苦しまなければ

ならなっただろうから。

「俺は仕事をしに来たんだ」

そう、仕事なのだ。仕事の中に旧友との仲などがあっていいはずが無い。人類は裏切りと略奪を繰り返して、現代まで生き延びてきたのだ。俺がしたのもそれと同じことだった。

「羽鳥、お前は俺のことを見殺しにするのか？」

その通りだ、青島。

車の列が再び前に動き出した。羽鳥は道路の左に折れて車を回した。

ロイヤルマンション坂田は、この辺りではそうそう見られないような高級マンションだった。田舎の土地に1本だけそり立つ26階建ての建物はだいぶ離れた場所からでも容易に見つけることができる。建設当初は近隣地域からの苦情で、一時期は建設を見合わせなければならぬような事態にまで陥ったこともあった。結局、建設予定者である胡桃物産から3度にわたる説明会が行われ、それでも解決案は見つからず、最後まで双方に妥協の姿勢が見られないままに建設は決行された。はじめのうちこそ大きな抗議運動に出ていた住民側も、施工が進むにつれて徐々に勢いをなくしてゆき、そうしている間にロイヤルマンション坂田は完成した。都心に近く、交通の便もそれなりに整っていて、何よりまわりを田んぼやそれほど高くない建物など平坦な景色が覆っているということで購入者は胡桃物産の予想を上回った。働き盛りの世代よりも、定年退職後の年齢層からの購入が多く、他業者もここから近い場所に同じような高層マンションを建てようと目をつけはじめた。

第1章（10） / 3

ロイヤルマンション坂田までは5分もかからなかった。近くに車を止め、念のために辺りに張り込みの車がないかと確認してからマンションの入り口に向かった。本来このパスワードは住居者しか知らないはずなのだが、青島が逃げ込んだ時に追いかけるため、羽鳥は前にもパスワードを調べてことがあり、昨日も今月分のパスワードを手に入れておいたので問題なく中に入ることができた。今の時代、この程度の情報だったら誰だって造作なく手に入れることができる。

マンション内に警官が張り込んでいるという可能性もあった。2ヶ月前とは髪型や服装を変えてきたとはいえ、見つければアウトだ。腹を括っていくしかない。

現実的な不安以外にも、羽鳥は胸の中になかなか収まらない胸騒ぎを感じていた。まるでこのマンションのどこかに青島真二の亡霊が潜んでいて、羽鳥が来ないかじっと待ち構えているかのような微かな恐怖を感じずにはいられなかった。エレベーターの閉塞感がよけいに恐怖を煽った。

やはり、ここに来てはいけなかったのかもしれない。

エレベーターが26階で止まり、扉が開いた。

青島の部屋は、ここから左にいつて突き当たりのところにある。

部屋に近づいてゆくにつれて、不安感は大きくなっていった。いやな予感がした。何か違和感があった。

そして、不安と違和感の根源が羽鳥の目の前に姿を現した。青島真二の部屋の扉に、堂々と貼り付けられている青い封筒。封筒の真ん中にワープロで文字が打たれている。

羽鳥勇介様

羽鳥は自分の目を疑った。突然のめまいが津波のように押し寄せてきた。夢を見てるのだ。ここがあまりにも青島のことを思い出させるから、青島への罪悪感をあらわにみせつけてくるから、だからこんな夢を見ているのだ。そうにちがいはなかった。

青い封筒は、やはり目の前にあった。全身から体温が引いてゆくのが分かった。青島真二もまたこの封筒を見て、今の自分と同じこの恐ろしい悪寒を感じていたのだろうか？ いや、そんなはずはない。青島はそのときまだ、この手紙が何を意味しているか露とも知らなかったのだ。けれど俺は知っている。この手紙が俺にもたらすものとは……復讐だ。

「どうかしました？」

羽鳥は文字どおり弾かれたように後ろを振り返った。全ての汗腺から汗が吹き出た。

そこにいたのは60歳くらいの男だった。ちょうどエレベーターから出てきたところらしく、羽鳥のいるところへと歩み寄ってくる。小柄で、羽鳥よりも一回り背が低かった。薄くなった髪から地肌が見える。

「ちょっと、友達を訪ねにきたんですけど」

言ってから、とんでもないことをしてしまったことに気づいた。

青島の友達と名乗る人間がここに来たのだと警察に知られたらおしまいだ。

「きてみたらまだ帰ってなくて、それでこんな封筒が貼られてる部屋を見つけたんです」

それですか、と男は言った。男は羽鳥の隣に立つと苦笑いしながら手紙を取り外した。

「取っちゃうんですか」

羽鳥は驚いて男の顔を見た。

「いいんですよ、いつものことだから」

「いつも……？」

「私はこのマンションの管理人なんですけどね、実はこの手紙、

よくおなじものがこの扉に貼られているんですよ」

「ここに住んでる人が貼ってるんじゃないんですか？」

管理人だという男は、怪訝そうに羽鳥の顔を覗き込んだ。

「この部屋にはだれも住んでいませんよ。それに、住んでる人が自分でやってるんだったら私だってこんなことはしません」男は困った顔をして指先で手紙をもてあそんだ。「１ヶ月くらい前ですかね、この部屋に住む人が引っ越してからみかけるようになったんです」

第1章（11） / 3

青島家はもうここを出て行ってしまったのか！信じられなかった。残された家族がどんな生活をしているかなんて全く聞いていなかったし、人を使って調べさせようともしなかった。

「実はこの部屋に前住んでいたっていうのは、ほら、ついちょっと前に逮捕された横須証券の役員の家族だったんですよ。それとこの手紙が何か関係知るのかもしれないとも思ったんですけど、本人たちはもういないから確かめようが無くて。そもそも、『羽鳥』っていう名前がここに住んでいた人のものじゃないんです」

「そんなこと私にいつちゃって大丈夫なんですか」と言いそうになるのをこらえた。今は話の焦点をそらしてはいけない。

「この手紙って、誰が貼ってるのか分かってるんですか」

「それが分からないんですよ。このマンションの住人の誰かだとは思っただけ」

住人の誰か。そのうちの一人が俺に復讐しようとしているのか？羽鳥は背筋に寒気を感じた。ここに来てから感じていた不安感も、得体の知れない誰かから向けられていた憎しみによるものなのかもしれない。一度思うと、よけいに本当のことのような気がしてならなかった。

けれどロイヤルマンション坂田には、羽鳥と、橘組がしてきたことを知っている人間などいるはずがなかった。どうして俺が住人から恨まれなければいけないのだろう。もしかしたら、青島は誰かに全てを話していたのかもしれない。だとしたら青島と親密な関係にあったその人物が、俺への復讐を企んでいるというのだろうか。しかし社員にも話せないような事情を打ち分ける気になる人物が近隣住民の中にいたと考えるのは、あまりにも不自然だった。

そもそも、事件の全貌を知る横須証券の6人の役員は既に逮捕され、そして残りの2人は……2人はもうこの世にいないのだ。

羽鳥への復讐をたくらむ人間などいるはずがないのに。

「じゃあそういうことで」

管理人の男はそう言って立ち去ろうとした。

「あ、あの」

「何ですか？」

「その手紙、もらえませんかね」

おかしなことを言う奴だ、という風に男は笑った。手紙がなければ何も始まらない。相手が誰なのか、何をしようとしているのか確かめなければならない。

「ミステリーっぽくって面白そうで。事件とかをファイリングするのが趣味なんですよ」

「こいつからも事件の匂いがしますか」

「ぶんぶんしますね」

男はもう一度笑ってから手紙を見た。どうしたものかと考え込んでいる。

羽鳥には、この手紙をもらいさえしなければ何も始まらないと考えることはできなかった。目の前の危険よりも真実を知ろうという欲求を優先し、自らの行動に遠慮を持ち込むことはない、それは彼の今までの人生においても一貫されてきた考え方だった。

「でも、いちおう人にあてられた物ですし、あげるのはちょっと・
・」

「じゃあ中に何が書いてあるのか教えてくれませんか？」

えっ、と男は口を詰まらせた。それから、やられたなと言って小さく笑みを浮かべた。

「もしかして、あなたはもうその手紙の中身を見てるんじゃない」

「まあ。あんまりにもたくさんあるので、どうせいたずらなら構わないだろうと思って、2通だけね」

「内容はみんな違うんですか？」

「いや、おんなじだよ。少なくとも私が見たその2通はね」

同じ物を出していたということは、手紙の送り主は俺が来るのを

待ち続け、なんともなんとも管理人が取り外すたびに手紙を貼り付けに来ていたのだ。俺が再び青島家にやってくることを確信して。なんとしてでも俺にその手紙を渡そうとして。

「わかりました。じゃあ、『羽鳥勇介様』が現われても私が見たつてことを言わないと約束してくれるなら」

「いいんですか」

「ええ」

羽鳥は手紙を受け取った。

「なんて書いてあるんですか？」

「ええつとたしか・・・『10日後にここに来い』だったかな」

マンションを出てから、羽鳥は大きく息を吐き出した。夏の昼下がりの外の空気は蒸し暑くてじめじめとしていたが、羽鳥には新鮮でおいしいものに思えた。

今日はもう帰るしかない。結局、青島真二の家族には会えなかったし、彼らがどこに引越したのかまでは教えてもらえなかった。そしてこの手紙だ。青島真二はとことん俺のことを恨んでいるらしい。たとえ刑務所の中に入っているとしても、こんなに遠くにいる俺に復讐をしてみせるほどに。

車に乗り込んで、エンジンをふかした。そのとき初めて気が付いた。

手紙の送り主は、一体どうやって羽鳥が手紙を受け取ったのを知るんだ？

7月8日

8時35分。ようやく全てのテストが終わった。一輝は気がぬけて大きなため息をついた。窓の外を見ると、外はもうネオンサインでいっぱいになっていた。

昨日、学校の近くで通り魔が現われたらしい。今朝のホームルームで藤村先生がそんなことを言っていた。

「場所は 駅から少し離れた所の裏道だ。被害に遭ったのは3年生の生徒で、その生徒は自転車通学で家に帰る途中のことだったそうだ。電車を使って通学している人はそっちにいくことはないとおもうが、一応全校生徒に注意を促す必要があるということで、その通り魔の特徴と保護者への説明を書いた手紙を配る」

渡されたプリントには通り魔の格好と、顔の特徴がのっていた。顔は正面ではなく、後ろから見た大体の髪型だった。その通り魔が後ろから襲ってきたので、被害者の生徒は後ろから見た格好しかわからなかったそうだ。

「同じような事件が先月からも何回か起きている。電車通学の人には近くに行かないから、といったが、いつどこでまた通り魔が出るかわからないのでみんな十分に注意すること」

偶然だが、事件の起きた現場は一輝が学校から塾に行く途中にいつも通っている場所だった。もちろん昨日の朝の時点では一輝にはそんな事知る由もなかったのだけど、心当たりのある場所があったので実際に行って確かめてみたら、そこに通り魔事件があったことを告げる看板が立っていたのだ。今日塾に来る途中のことだった。

場所はビルと飲食店の間の、幅が2メートルぐらいしかない長さ50メートルほどの暗い裏道だ。普段の人通りはほとんどなく、もっぱらこの道に面する飲食店「水樹亭」が後で捨てるごみや空き瓶などを置いておくスペースに使われていたのだけれど、最近になって市川中学高等学校の生徒が夕方ごろ頻繁に通るようになった。というのも、やはり最近　駅から1kmの所に昭栄学院という塾の支部ができて、市川中学高等学校の生徒がそこに通うようになり、彼らがここを近道として使うようになったからだ。

昨日吉沢たちは同じところを通って駅に帰ったはずだ。あいつらはいいつも塾帰りに近くで遊んでいくのでいつも帰りが遅いし、確かに一輝と最後に別れたときもゲーセンの方向に向かっていた。吉沢たちが事件後の現場を見ていないんだから（SHRの後に聞いてみたら見ていないといっていた）、通り魔が現われたのと襲われた生徒があそこを通ったのは、吉沢たちが帰った時刻よりもっと遅かったということになる。おそらくは10時前ごろだ。

「帰ろうぜ青島」

はっとして後ろを振り向くと、岸田が肩にカバンを提^さげて立っていた。

「どうだったテストは」

「聞いてくれるな」

岸田はおいおいと言って笑った。

「引越しかいろいろあつて塾の宿題に手つけてなかったのが響いた」ここ1ヶ月は本当にいろいろなことがあったのだ。「お前はどつだったんだよ？」

「まあまあかな。思ってたより難しかったからちよつとてこずったけど」

岸田がこういう反応を見せるということは、かなり良くできたという証拠だ。3年間同じ塾にいて身につけた観察眼からすると間違いなかった。

「原西のやつ、だいぶへこんでるぜ」

荷物をまとめて立ち上がろうとすると、岸田が言った。西原は教室で入り口のすぐそば、一輝のいるのと反対の場所の机に原西が両腕で顔をうずめて座っていた。

一輝と岸田は西原をなだめながら塾を出た。昼の猛暑はどこにいったのやら、外には肌寒い空気が流れて、おまけに空では低い稲妻の音がゴロゴロと轟いていた。今朝のニュースでは台風が来るのは明日の朝だと言っていたが、どうやらそれは外れたみたいだ。

岸田たちは途中の交差点までで別れた。一輝だけが自転車で、二人はそのまま徒歩で駅まで向かう。

千葉のロイヤルマンション坂田を出て、一輝と母さんは東京都内のアパートに引っ越した。マンションでの悪戯や、たびたびかってくる悪質な電話が絶えずだんだんとエスカレートしてきたので、仕方なしに引っ越したのだ。電話はどれもこれも、横須証券とその役員に向けた、怒りと偏見に満ち、高臨みな位置から投げかけられた罵声だった。彼らはみな一様に言った。青島真二は社会のクズだと。強欲な経営者だと。そして、彼らは一輝が反論することを決して許さなかった。

経済的にも問題があった。一家の大黒柱の収入がなくなった以上、青島家にはこれ以上ロイヤルマンション坂田のような億ションに住まうだけの余裕はなかった。4人の祖父母も援助を申し出てきたが、母さんはそれを断ってしまった。母さん側の家族には実際に二人を養っていくだけの余裕がなく、父さん側の家族とはもともと仲が悪くてずっと疎遠だったので、いまさら援助を受けるようなことはできないという訳だ。結局、2人は東京に安く住まえるアパートを見つけてもらい、そこに引っ越すこととなった。

本当に、事件からたった1ヶ月の間に本当にいろいろなことが起きた。信じられないようなことばかりが。一輝には全てが不思議でならなかった。どうして父さんはあんな事件を起こしたのか、何故それが自分の父親に起きたのか、そして、1ヶ月でひと一人の生活がこつも暗転するものなのかと。けれど何より不思議だったのは、

いま自分が、その変化に慣れてしまっていることだった。

雷の音が心なしに近づいてきているような気がする。一輝は自転車をこぐ足に力を込めた。

7月8日

雨が壁を叩きつける音で前田は目を覚ました。風がビルに裂かれて悲鳴を上げていた。

手元の時計はもう9時半を指している。どうやら30分以上寝てしまったようだ。前田は頭を上げて編集室の中を見回してから、体を起こして背伸びした。

「すごい風ですね」

向かいのデスクの安原だった。寝不足のせいか、パソコンの画面からずっと離れていないせいなのか、メガネの下から大きくまがのぞいていた。

「ああ・・・台風か」

天気予報だと台風が来るのは明日の朝だと言ってたけれど、この様子だとまた編集部に缶詰になりそうだった。今日は汗をかいたからさっさと帰ってシャワーを浴びようと思っていたのに。

上半期の映画特集の企画を12時までに提出しなければならぬのだが、まるでやる気が出てこなかった。なんとか気力を出そううと思つて仮眠をとったが逆に頭が働かなくなってしまった。だるさの理由はわかつていた。寝不足や、今やっている仕事への興味の無さ以上に、2ヶ月以上かけて続けていた取材が行きづまってしまったことが今でも尾を引いているのだった。

前田はまず横須証券の役員6人の近辺に情報を集める事からはじめた。一人一人の生い立ちや人間関係、生活面から彼らの人間性を分析し、そこから今回の事件へ関連づけてゆくつもりだったのだが、そこで第一の関門が前田の前に立ちふさがった。近年の日本で代表

的な証券会社の役員と言えど、こういつた取材の経験が少なく、他の出版社とのつながりが薄い羽間出版に勤める前田には、6人の情報を簡単に入手する術が無かったのだ。手探りで横須証券について調べ始めてから、ようやく役員の一人、青島真二の住所を特定するまでには2ヶ月もかかってしまった。それがちょうど一昨日のことだ。前田はやつとのことで青島真二の自宅に赴いた。幸い同じ千葉県、自宅からあまり遠くない場所だったので行くのに時間はかからなかった。管理人に聞いてみると、彼らは一ヶ月近く前に東京のどこかに引っ越したそうだったが、もともと取材ができると期待していたわけではないので問題は無かった。むしろ扉の前の写真が堂々と取れて都合が良くらいだった。

管理人の話によると、青島真二の住んでいた部屋の扉にはいつもおかしな封筒がいつも貼つてあるそうだった。宛名に『羽鳥勇介様』と書かれ、中には一文『10日後にここに来い』とだけ書いてある、おそらくは悪質な悪戯の一種だろう。管理人はつい先日とその手紙を知らない男にあげたと言っていた。前田は一通りマンションを写真に収め、そこを後にした。

そしてそれつきりだった。前にも進まなければ、左右を見渡すこともできない。行き止まりだ。そんな無念の思いが、今でも前田の中ですぶっているのだった。

「よお、例の記事はどうなつてんだ」

宮元が書類の束を抱えて横に立っていた。

「昨日言つたろ。もう無理っぽいつて」

「なんだ本当にやめるのか？せつかくここまでがんばつたつてのに、もつたないじゃんか」

「俺だつて続けたいけどな、もうどうにも手が出ないんだよ」

思わずため息が出た。前田はいまさらになつて疲れている自分に気がついた。

「まだ諦めるのは早いぜ」

宮元はそう言つて口元に笑みを浮かべた。

「なにかあるのか？」

期待で胸が膨らんだ。宮元は抱えていた書類の一番上の紙を引き抜いて手渡してきた。紙面には6人分の顔写真と住所、それに1人1人の出身地や卒業した学校の名前が載っていた。

「俺の友達の亀山からちょうど昨日もらったんだ。首都圏出版の編集部で働いていて、前に自分達が参考にした資料なんだけど、お前のことを話したら、取材はもう終わってるし羽間出版ならあげちゃっても大丈夫そうだからってくれたんだ。まあ、言っちゃえばうちらなんか競争相手じゃないってことだな」

「本当にいいのか？」

「ああ。でもよそに流すようなことはするなよ。亀山に迷惑がかかるし、俺も困る」

「わかってる。ありがとな。亀山さんにもお礼言つといてくれよ」

これでまた取材が続けられるのだ。2ヶ月かけて一人の住所を調べるので精一杯だったのが、ほんの10秒足らずで全員の情報が手に入るなんてまるで夢のようだった。既に手をつけられているという事も全く気にならなかった。

「それともう一つ別のところで面白いことを聞いた。役員の一人の青島真二って人はどうやら橘組たちばなの組員と昔からコンタクトがあったらしい」

「橘組？何でそんな・・・」

橘組といえば一昨年の銃撃事件で話題になった指定暴力団だ。暴力団と証券会社の社員がつながっていたなんておかしな話だった。

「確かな情報じゃないただの噂かもしれないけど、本気で調べるつもりだったら組に乗り込んでみるよ」

笑いながらそういつて、宮元はコピー機のもとへ去っていった。

面白いかもしれない。横須証券の専務と橘組組員。それも、複数の役員ではなく青島真二にだけ繋がりがあったといからには、2人

に何か特別な接点があったのだ。

前田はもう一度宮元からもらった紙に目を通した。

『青島真二・・・経歴：北芝小学校 吉正寺中学校 早稲田高校
早稲田大学』

将来の暴力団組員に早稲田で知り合ったとは考えにくい。とすると青島真二が問題の人物と知り合った可能性が考えられるのは、北芝小学校か、吉正寺中学校のどちらかだった。この暴力団員というのが青島真二や残りの役員の手を引いて今回の事件を起こさせたと考えることもできる。噂とは言えど、調べてみる価値はありそうだ。そのとき、前田は誰かのデスクの前で人だからできているのに気がついた。山口の所だ。6、7人が集まって、デスクの上の何かを全員でみつめている。突然、その中の一人がそこから抜けだして編集長の加持の所へと駆けていった。何が起きているのだろう。前田は立ち上がって山口のデスクにまで向かった。

台風突風の突風と雨粒の嵐が激しい音を立てて建物をたたきつけ、体がびくりと窓のほうを振り向いた。窓の外は滝のように落ちてくる雨でほとんど視界のきかない状態だった。

山口のデスクで皆が見ていたもの、それはパソコンの画面だった。一瞬いかかわしい物でも見ているのだろうかと思像したが、そこから聞こえてくるのは想像とかけ離れた、硬く張り詰め、緊張した男性リポーターの声だった。前に立っている奴の背中から覗き込むようにしてみると、リポーターは吹き荒れる風と豪雨の中をマイクを片手にどこかの建物の前に立っていた。すさまじい風の音とパソコンの音質の悪さが災いして声は少し聞き取りにくかったが、それでも何をいつているのかは理解できた。画面の下にテロップが出ている。

『横須証券役員 殺人事件に関与』

「殺人？」

思わず声を上げてしまった。前田は信じられない思いでまばたきをし、もう一度テロップを見た。しかしそこに書いてあることは見

間違えてもなんでもなかった。確かにあの横須証券の役員が殺人に関わったと書いてある。これはどこの番組だ。でたらめなことを言ってるんじゃないのか。けれど、嵐の中、マイクを握って中継を伝えるリポーターの声から冗談のような物は感じられなかった。

「はい。私は今横須証券本社ビルの前に立っています。5月13日、ちょうどこの場所で、横須証券の役員6人は逮捕、連行されました。そしてつい先ほど警視庁出記者会見が行われ、その役員6人が殺人事件に関与していたということがわかったのです」

画面が切り替わり、記者団のカメラとフラッシュを前に会見文書を読み上げる警察官の姿が映った。

「本日、横須証券元役員で現在証券取引法違反の罪に問われている小暮、堀口、浅井、橋本、谷屋、青島の6人を殺人容疑で再逮捕しました」

間違いではなかった。あの6人が。今まさに、俺が調べている6人が殺人を犯していた。では一体、誰を殺したんだ？

再び画面が切り替わった。司会に女性キャスターがその答えを教えてくれた。

「今回新たに発覚した殺人事件で被害者とされているのは、東京都在住、事件当時38歳の田中正志さんです。田中さんは生前、今回再逮捕された6人が経営していた横須証券に勤務しており、職場間でのいざこざから事件が起こるに至ったものと思われます」

「本当に信じられないような事件ですね」もう一人の男性キャスターが口を開いた。「証券取引法の違反のみならず、自分の会社の社員を殺害するなんて前代未聞の話です」

全くその通りだった。テレビの前の多くの人が同じことを思ったに違いなかった。

番組は2ヶ月前に横須証券が起こした証券取引法違反の事件と、事件直後の日本経済への影響をイメージ映像を使って説明しだした説明が終わると、キャスターの2人があの時社会全体に走った衝撃はすごい物でしたね、とか、株主の企業経営に対する不安も増大しました、とか言って話を引っ張った。

前田は殺人に関する情報を聞こうとじっと画面を睨んで待った。自分が取材していた6人だからというのではなく、純粋に、6人がどうして殺人を犯したのか、その動機が知りたかった。彼らが何を望み、何に駆り立てられたのか、その”何か”の正体をこの目で確かめてみたかった。普通の犯罪者にはない、”何か”を。

しかし、キャスター達は事件の詳細については何も語らずに次の

ニュースに移った。

「すごいことになったな」

宮元だった。いつの間にか前田の後ろに立ってパソコンの画面を眺めていた。

「やっぱりこの事件を追いかけてて正解だった」

宮元がとがめた。

「こういう派手さは、お前の書こうとしてたのとは違うんじゃないか？」

「そういう意味じゃない。俺達が思っていた以上に、この事件には奥があるんだ」

不謹慎にも、前田は胸の躍るのを感じていた。企業として起こした犯罪、そして殺人。本来別物であるはずの2つの事件が交わった先に、まさに自分が明かりを当てようとしている先に、誰も見たことのないような真実が眠っている。そんな気がしてならなかった。

吹き荒れる雨風が再び壁を叩きつけて轟いた。

7月11日

横須証券の役員6人が殺人容疑で再逮捕されてから3日がたった。各出版者やテレビ局は皆一様にこの話題を取り上げてはトップページやワイドショーを割いて解説を行った。ただ、解説といっても単に出演者が事件の動機やいきさつについて、それぞれの考えを述べて意見の交換を行うだけという趣旨のものがほとんどで、後は被害者の田中正志という人物の素行や会社での評価を調査したり、犯罪の専門家に話を伺うというのがちらほら見られるくらいで、事件の詳細は世間の人々にほとんど明かされていなかった。こうした状況について、事件に関心を持っている人たちは少なからず違和感を感じていた。殺人事件が起きてその犯人たちは既に捕まっているというのに、詳しいことは少しも報道されていない。明らかに今まで起きた事件とは何かが違うというところを感じていた。そして、いくらかの人たちはそこに警察の意図が働いていることに気がついた。この事件にはまだ続きがある。だから警察は何もしゃべれないでいるのだと想像した。

その考えは実際当たっていた。しかし、彼らが最終的に事件の真実について『全て』を知るのとはそれからしばらくの月日がたつてのことになる。

台風は過ぎ、夏の猛暑が再び姿を現した。前田はちょうど駅のホームから出てきたところだった。焼きつくような日光の明るさに目を細めながら、ビジネスバックを開いて1枚の地図を取り出した。目的の場所はここから20分ほどの場所にある。時間ならば問題な

かった。わざわざ余裕を持って30分前につくように家を出たのだ。厄介なのはこの暑さだけだった。こんな日差しの中を1時間近くうるつこうものなら、まず確実に脱水症状にかかってしまう。早めに行つて屋内で待っているか、近くのコンビニで時間をつぶすしかなかった。

埼玉県中部に位置する 市は、見たところとても田舎な場所だった。都会の様子から比べると駅前を通りは何も無いも同然で、人々から見捨てられたように静まり返っている様子に、前田は自分がつまはじきにされているような寂しさを感じた。土曜だからとはいえ駅から出てくる人は全然いないし、四方を見回しても高い建物はほとんど見当たらなかった。

ここに、青島真二が通っていた吉祥寺中学校がある。前田は通りを一人歩きだした。

資料を受け取ってから、前田は次の日さっそく吉祥寺中学校で青島の担任をしていたという教師にアポイントをとった。そして、そのうちの一人の笹山という人にOKを出してもらい、今日学校で会ってくれるよう約束を取り交わしたのだった。もっとも青島の担任をしたあとの2人は定年で辞めてしまっていて、笹山が残っていたのはラッキーだった。笹山も既に高齢で、30年近く前のことをどの程度覚えているかという不安はあったが、そこは本人が覚えてるというのだから信じるしかなかった。

吉祥寺中学校に着いたときには前田はこれ以上は無理というくらいに汗をかきつくして熱中症寸前の状態になっていた。コンビニで休もうというもくろみは失敗だった。入るうにも、どこを探したって店の一つも見つからなかったのだ。

青島真二はこんな田舎の町で暮らし、少年時代をすごしてきたのだ。当時は今よりもつと建物も少なく、住宅地のあったところには自然があふれていたかもしれない。そんな環境の中で育ってきた男が東京に出て証券会社に勤めた時に何を思ったのだろうか。

吉祥寺中学校の校舎は想像していたよりもずっと大きく、ボロボロだった。最初はコンクリートの壁にたつたでも這っているかと思っただ、近づいてよく見てみるとそれはびっしりと張り巡らされたひび割れだった。校庭では野球部が活動をしていた。校舎の中に入っただ待つの人は人目にさらされるようではなかった。前田は校門の前に木立を見つけてその日陰で時間をつぶすことにした。質問内容を何度も確認しながらじつと時間が経つのを待って、それからようやく学校に入った。

校舎の中は期待していたほど涼しくなかった。靴を脱いで上がろうとすると、奥から初老の男が歩み寄って挨拶をしてきた。どうやらずっとここで待っていていたらしい。時間つぶしなんかしなければよかった。

「今日はどうもよろしくお願いします」

「こちらこそお世話になります」

笹山の声には60台とは思えないような張りがあつた。体格もどちらかといえは大柄なほうで、実際の年齢より10歳は若く見えた。

前田は笹山に案内してもらって、応接間の椅子に腰を下ろした。

応接間は、廊下もそうだが掃除が行き届いていて外見よりもずっときれいだった。

前田は簡単に挨拶を交わしてからすぐさま本題にはいった。

「今日は笹山さんが一度担任になられたことのある、青島真二という人物についてのお話を伺いたいと思います。先日電話口で説明させてもらいましたが、私は先程起きた横須証券株式会社の事件について調べていて、今回の取材もその件に関連するものです。よろしいですか？」

笹山は返事の代わりに楽しそうに笑みを浮かべた。

「こんなことで出版社のインタビューに受けることになるなんて、

夢にも思いませんでしたよ。やっぱり教職っていろいろなことがあってもいいですね」

前田はなんと返していいかわからず、笑ってごまかすことにした。犯罪を犯した自分の生徒についてインタビューされるのが、果たしてももしろいことの類たぐいに入るのだろうか。

前田は始めに青島真二が学生時代どんな性格だったのかと尋ねた。「性格は、そうですね。個性が強いというか、華やかで、クラスの中でも目立ってる子のうちの一人でした。世話好きで、友達の間で起きた揉め事の仲裁に買って出ていました。目立ちたがりやな所もあつたんでしょう。今はめっきり見かけなくなりましたが、似たような子は、当時私の受け持ったクラスでは大体クラスに1人か2人ぐらいいたものです。ただ、傷つき易いというか、悪口なんかを言われるとずっと引きずってしまうような繊細なところもあつて、別に深刻にというわけじゃないけれども、相談に乗ったことがありました」

「深刻じゃないとは、どういう風に相談を受けるんですか？」

「普通に普段話している時にそういうことがポロツと口に出るんですよ。それでちよつと話をするという程度です」

ずいぶん詳しく覚えてるな、と前田は思った。

前田は、おぼろげな印象でも分かればそれでいいと思ってこのインタビューに臨んだつもりだった。笹山にとって青島真二の担任を受け持ったのは30年近く前のことだ。当然、笹山のほうはある程度青島信二のことを話せると思ったから今回の申し出に応じてくれたのだろつが、それにしてもここまではつきりと1人の生徒のことを覚えてるなんて少し不自然じゃないだろうか。もしかしたらでまかせを言っているのではという考えが頭に浮かんた。

成績のこと、部活のこと、家庭の状況（さすがにこれは覚えていないと答えられた）について前田は次々と尋ねてはメモを取った。笹山の受け答えはとても親切で、わざわざ学校にしまいこんであった記録を手元に用意して、それと合わせて説明してくれた。すると青島真二は成績も良く、部活についてもテニス部でレギュラーをとめていたということだった。特に勉強のほうは、早稲田に進学したというくらいだったからかなり良くできたらしい。これだけ目立っていたのならば、笹山が30年たっても青島のことを覚えているのはそれほど不思議なことではないのかもしれないとも思えてきた。そこでついに本命の質問をした。

「交友関係のほうはどうでしたか」

他のことを話しているうちにだんだんと記憶が戻ってくるのではないかと思って、前田は一番重要なこの質問をできるだけ後のほうに持ってくることにした。今回の訪問の目的は、青島真二に関する情報というよりも、彼とかかわりのあった人物を特定することにある。友達の中にそれらしき人間がいらないようならば、学年の中に素行の悪い生徒はいなかったかと聞くつもりだった。

しかし、笹山は意外な答えを返してきた。

「青島はいつも、羽鳥という子と一緒にいました」

笹山の声から一瞬暗いものが臭ったような気がした。おかしい言い方だった。まるでその1人のことが重要すぎて、他の友達はいてもいなくてもどっちでもいいと言っているかのようだった。

「友達は、その羽鳥という子だけだったんですか？先ほどの話ですと、当時の青島氏は明るくて交友関係も広いような印象を受けましたが・・・」

「いえ、当然他にも友達はいたと思います」笹山は訂正した。「けれどもなにぶん、私もだいぶ前のことなのでそんなによくは覚えてい

なくて。覚えているのはその羽鳥のことだけです」

これはもしや当たりかもしれない。

「その羽鳥というのはどんな子だったんです？」

前田は自然と身を乗り出した。今日わざわざここまでやってきたのはこの話を聞かためなのだ。どうしても興奮を抑えることができなかった。

そのとき不意に、篠山が怪訝そうな表情を浮かべて言った。

「もしかして、あなたもですか」

突然だったので、前田は何のことを言われているのか考えることができなかった。笹山が探りを入れるような目線でじつとこちらを見つめていた。あなたも？ 一体何の話をしているんだ？ だが、考えてみても前田にはその言葉の意味するところが分からなかった。

わたくし
「私もとは・・・」

「いいえ、構わないんです。ちょっと気になったものですから」

前田はそうすかと言って話を受け流した。何を隠しているのか気にはなったが、羽鳥という人物に関する情報のほうが重要だし、もしも前田が「あなたも」の前にあたる人間と同じことを考えていると思われて、笹山が何も話してくれなくなったら元も子もなかった。

「それで羽鳥とはどういった・・・」

「彼は、そうですね」笹山の顔つきが難しそうに歪んだ。「青島ととても仲が良くて、勉強もスポーツも青島と同じくらいできる、一言で言えばとても優秀な生徒でした」

優秀な生徒？ 俺が見つけようとしているのは暴力団とのつながりがあったという人物だ。こいつははずれだ。

前田は「ほかに青島と友達だったこのことは思い出せませんか」と尋ねようとしたが、それより先に笹山が口を開いて言った。

「彼のことは今でもはっきり覚えています」

第1章（19） / 5

前田は開きかけた口をつぐんだ。

「あのときは、そりや大した騒ぎでしたよ。誰も羽鳥があんな事件を起こすなんて思っていませんでしたからね」

「何かあったんですか？」

「喧嘩です。確か15人もけが人が出て、私達教師も保護者からのクレームを処理したり警察の相手をしたりで」

喧嘩、とつぶやいた。

「羽鳥がどうしてあんなことをしたか、それは結局分からずじまいでした。彼はその後学校を辞めてしまっただけ」

「その羽鳥という友達について、もう少し詳しく教えてくれませんか？」

間違いない。羽鳥こそ、青島真二とコンタクトのあったという暴力団員なのだ。笹山は相手の様子を見て怪しげに眉をひそめたが、前田はそのことには気づかなかった。

「とにかくいろんなことを満遍なくこなして、問題のない良い生徒でした。青島とは3年間同じクラスだったらしく、仲が良くて、当時は3クラスしかありませんでしたからクラス替えをしてもある程度一緒のクラスの子がかたまるんです。かなり昔のことだからはっきりとは覚えていませんが、なんというか、独立心の強い子でした。あの喧嘩の原因も一つはそんなところにあっただんだと思います。けど、それ以上のことは良く覚えていません。保護観察が入ってすぐ彼はどこかに引っ越ししましたから」

「それは、喧嘩を起こしたからもうここに入れないという理由で？」

「さあ、それはよく分かりません。おとうさんの仕事の都合だったのかもしれませんが。転勤と事件がいまって、だったら引っ越そうということにしたのかもしれませんがね。青島のことを記憶に残って

いたのも、この事件があつた後、何度か青島に事情を聞いたたり羽鳥のことについて二人で話し合ったりしたからなんですよ」

どうりで青島について詳しくしゃべれるわけだ、と納得がいった。2人はそれから30分近く話し続けた。青島真二のことだけでなく、当時の学校の雰囲気や近所の様子についても教えてもらつたりもしたので、話題はなかなか尽きずメモは6ページ近くが黒く埋まつた。さすがにもうこれ以上聞くことはないだろうと思つたところで前田は話を切り上げると、笹山が校門前まで見送ってくれるということだった。

「今日は貴重な時間を割いてお付き合いいただき、本当にありがとうございます。ありがとうございました。これはほんのお礼ですが・・・」

いりませんといつて笹山は断つたが、前田は半ば無理やり封筒を手渡した。

校舎の外はあいも変わらず強い日差しであふれていて、そんな中でも校庭では野球部員の掛け声が響き渡っていた。

別れ間際、どうせなら聞いておこうと前田は口を開いた。

「つかぬ事を伺いますが、羽鳥のことについて聞いた時に『あなたも』とおっしゃられましたか、あれはどういう・・・」

笹山は思い出すようにああ、ともらした。「いや、実は前にいらつしやつた警察の方も羽鳥のことについて詳しく聞かれていったんです。あなたも、青島のことより羽鳥のことに関心を持っているように見えて、なにか気になることがあるのかと鎌をかけてみたんですよ」

笹山はそう言つて苦笑いした。

「そうですか」

前田は何も言えなくなつた。

先回りされていた。校門を出てから小さくつぶやいた。照り付けてくる日光がじりじりと肌に熱い。

前田も苦笑いを浮かべるしかなかった。

第2章（1） / 6

6

1月5日

冷たい風が吹いていた。真二は肩をすくめて道路のほうへと歩み寄った。外はまだ夜が明けきらず、人は全く見当たらずに車ばかりおり思い出したように通り過ぎてゆくだけだった。

頭がずきずきと痛むのを我慢して大きく息を吸い込むと、首筋に一気に冷気が忍び込んで思わずぶるりと震えあがった。目を覚まそうとして出てきたけれど、このままでは風邪を引いてしまう。真二は昨日から一睡もしていなかった。仕事が手間取って、ついさっきようやく全ての課題が終わったところだった。

正月とはいえ休みを取ることはできない。仕事は山積みで家に帰る時間もなかなかとれず、今日のように徹夜になることもたびたびだった。不意に、今ほど忙しくはなかった平社員の頃がひどく懐かしく思えてきた。中に入って温まろうときびすを返したとき、はじめてビルの自動扉の横におかしな紙が貼り付けられているのに気がついた。近くに寄って見てみると、それは何の変哲もない青い封筒だった。普通と違うのは、真ん中に一文、ワープロで文字が打たれていることだけだった。

青島真二様

そこに書いてあるのが自分の名前だというのに気づくまでに一瞬しかかった。広告でも人探しでも悪辣な悪戯でもなくて自分の名前があるのに、真二は驚きよりも先に違和感を感じた。

ポケットから手を出してそれをはがし取った。裏にはいくつもい

くつも丸められたセロハンテープが貼り付けてあつて、取るには手間がかかった。風に吹き飛ばされないためだろうか。そういえばこんなもの昨日は無かったはずだ。社員の誰かが帰るときに貼り付けていったのだろうか。

もしかしたら同じ名前の別人にあてたものじゃないかとも考えたが、そのときには既に封を破り取った後だった。中には三つ折の上質紙が一枚入っている。真二は開いて中身を見た。

1月5日の午後1時ちょうどに、
駅前の喫茶店『ブルボン』
に來い。來なければ身内の人間に危害を加える。

書いてあるのはこれだけだった。『家族に危害を加える』・・・脅かそうとするんだつたらもつといい文句があるだろうに。真二は小さく笑った。それからふとまわりを見回した。真二が昨日最後にここに来たのは夜中の3時頃だ。だとしたら悪戯の主がこの手紙を貼り付けていったのはついさっきのことで、もしかしたらまだその本人が近くにいるかもしれないと思ったからだ。こんなことのために早朝出勤するなんてよっぽど暇な奴なんだろう。はたまたリストラされた奴が腹いせにしたことか？

しかし、辺りにそれらしき人影は見当たらなかった。怪しい人間どころか人の気配すらしないのだ。あるのは、ビルに吹きつけて悲鳴を上げている風の音くらいだった。

真二は封筒をポケットに突っ込んで、自動ドアを抜けた。悪戯でも話のネタくらいにはなるかもしれない。

だが、建物に入ってエレベーターに乗り込んだ頃には、真二の頭の中は再び仕事のことではいっぱいになってポケットの中の封筒のことなど忘れてしまっていた。

第2章(2) / 6

結局一度外の空気を吸いに行つたきりで、真二はまた仕事の山に埋もれて一睡もせず働くことになった。

横須証券株式会社は今でこそ日本において代表的な証券会社となったが、ここに至るまでに、真二たち社員には死ぬ気で働くことが要求されてきた。真二が入社した当時は今ほどに大規模な会社ではなくて、上場も第2部までだった。バブルバブルと騒がれている中でも横須証券はこれといって景気が良くなりえず苦しい経営を続けていたが、ついにそのバブルが終焉を迎えたときには他社ほどに経営に打撃を受けずにすみ、前社長の横須翔はそれを期に攻勢に出て、一気に横須証券を盛り上げようともくろんだのだった。真二が入社したのもちょうどその時期に当たった。片っ端から営業を行い、あまり力を注がずにいた宣伝部門に一気に3倍近くの増員を行って、社員にはそれこそ地獄のような労働が課せられた。真二と同期だった社員の中でも耐え切れずに辞めていく者が少なくなかった。利益が上がってゆくにしたがつて全体的な余裕もでき、当時ほど仕事はきつくなくなつたが、それは下のほうの話であつて真二たち上層部やいくつかの部署は相も変わらず身を粉にして働かなければならなかった。

部屋の扉がノックされて、失礼します、武山ですという声がした。真二は入るようにと返事をした。さつきからずっと来るのを待っていたのだ。

「××物産の報告書を持ってきました」

片手にファイルを抱えて立っている武山の顔には、離れたところに見ても見極められるような濃いくまが浮かんでいた。疲労のせい、どこか足元がふらついているようにも見えた。

「9時半だ」真二はそう言つて掛け時計に目配せをした。「9時半では提出するように言つただろう」

「申し訳ありません」

さらに2、3言の注意をうけて謝ってから、武山はファイルを手渡した。武山は時間に厳しい性格でこういうミスはなかなかしないのだが、だからといって何か言い訳を言おうともしなかった。社長の小暮は社内会合の場などにおいて、よく言い訳をするなどという言葉の口にしていた。言い訳をするくらいなら、自分でその不祥事の原因を摘み取るようにつとめろということであり、実際横須証券の中ではそれが鉄則のような物として成立していた。

真二は報告書をざっと眺め必要事項が載っていることを確かめてから、武山に次の仕事の内容が書いてある書類を軽く説明しながら手渡した。

武山が出て行ってからしばらくして、人事部部長の宗谷がリストラ人事の報告書を持って部屋を訪れ、また少し経って営業部門の新しい企画を担当する堂本が来てから、真二は5時間近くの間、誰とも会わずにひたすら書類と格闘し続けることになった。空腹に気づいた時は既に3時を過ぎていた。真二は出前を呼んで届いた親子丼を食べながら、5時から始まる予定の取締役会での報告内容を確認めた。つい何時間か前に武山が持ってきた××物産を含めて、7つの企業の近況報告と今後の対応について話し合う会議だった。そして、真二は会議が始まる前までに2つの調査資料をまとめて小暮に提出しなければならなかった。徹夜のかいあってか何とかそれは終わっていた。

真二は食事を済まし、すぐに小暮のもとに向かった。

青島です、と言って部屋に入った。

とたんに照りつける日光が正面から真二の目を突き刺して目を細めた。部屋の間取り、外にあるビルの配置のせいで、社長室は冬の夕方になるといつも夕日が直接差し込むのだった。アンティークな安楽椅子、使われていない2つの木製の机、その上に置かれた装飾用の燭台や陶器が夕暮れの日差しを受けて淡いオレンジに染まっていた。奥の机に、電気をつけることも忘れて手を動かしている小暮

の姿があつた。逆光で顔が良く見えなかった。

第2章(3) / 6

小暮はこちらには見向きもせず、ここに置いておいてくれとつぶやくように言った。真二は言うとおりにしてから「そろそろ次の会議が始まりますが」と知らせた扉の前に引き下がった。小暮が何も答えずに黙々と書類に向かってるので、真二は仕方なしに待つて部屋に両脇に飾られた蜀台や陶器やらの骨董品を眺めていた。これらはみんな小暮が趣味で集めて飾っている物で、なかにはそれなりの値が張るものもあると聞いていた。最初のうちは、忙しい中でどうやってこれだけの物を集めたのか不思議でならなかったが、話を聞いてみるとこれらは全て亡くなった事業家の父親から受け継いだ物らしい。仕事場にこんな物を持ち込むなんて普通では考えられなかったが、小暮はこれがないと逆に落着かないらしく、真二にはそれがどうも理解できなかった。

時計はもう4時45分を指している。さすがにそろそろ会議に向かわなければまずいんじゃないか、と思った時に机の上でタイマーが鳴った。

「じゃあ、行くか」

小暮は机の上の書類を調えながら立ち上がった。やれやれ、だ。マイペースなのもいいが少しは急ぐようなそぶりをしてくれないとこつちだって不安になってしまう。

小暮は机の中を覗きながら、突然思い出したように言った。

「ちよつと用意する物があるから先に行っていてくれないか」

「時間は大丈夫ですか？」

小暮は空返事にああ、とつぶやくと机から何かを探そうとした。た。

「分かりました」

不承不承、真二は部屋を後にして先に25階の会議室へと向かった。

疲れていた。一人廊下を歩いていると何かがのしかかったように体が重く感じられ、真二はふとため息をついた。目的の場所があつて歩いているはずなのに、自分がどこを歩いているのが分からなかった。一瞬仕事から離れると、たまっていた疲れや憤りが一気に体へ押し寄せてくるということが時々ある。そういうのはたいてい朝電車に乗り込む前だとか出社する直前ということが多いのだけれど、仕事中にも無いというわけではなかった。

自分が一体何のために働いているのか、分からなくなる。

当然理由はあるのだ。家族を養わなければならないし、金はあるだけあつたほうがいい。それにこの仕事に対して感じているやりがいだつてあつた。それでも、そんなものに価値があるのか、と問いたくなる時があるのだった。

「価値」や「意味」なんて、突き詰めていけばどんな物にも存在しない。特に絶対的な尺度として位置づけられるような物などこの世のどこにもありはしないし、それらはあくまで人間が後付けした物なのだ。そこにあるのは「欲望」だけだ。それが真二の持っている、人生に対する考え方だった。

そもそも物事の価値を探す、意味づけをするという行為こそが、欲望に根ざした人間の行動に過ぎないのだ。だから真二は、人生にはこうこうこういう意味があるのだと人前で恥ずかしげも無く語っている宗教家の連中や、自分はこの世の仕組みを全部理解していると鼻高に言うような人間が大嫌いだった。この世のあらゆる憎悪を込めて憎んでさえもいた。そして、憎しみを感じずにはいられない自分の心の中の欲望に苦しむのだった。

けれどもそう考えた時に、果たして自分が今の生活を本当に望んでいるのかという問いにかち当たるのだった。自分が働くことの「価値」、それは金に対する欲求、達成感を味わいたいという欲求、家族を養いたいという欲求、そして家族をほっぽて周りの人から非難を浴びたくないという欲求、世間体を守りたいという欲求・・・数え上げていけばきりが無いが、これらの欲求を満たすことだった。

しかしそれ以上に、休みたいとか、楽をしたいという思いが膨れ上がることがある。二通りの欲望に、板ばさみにあうのだ。どちらかをとればどちらかが苦しみとなって押し寄せてくる。二つをとることはできない。逃げ道も無い。あることはあるが、それはすなわち死ぬということだった。欲望の波に押されて崖から落ちてしまった時に死はやって来るのであり、真二は自分が崖っぷちに立っていることを自覚していた。

いつの間にか真二は会議室の前に立っていた。中からは誰かの話し声が聞こえていた。部屋に入ると、橋元と谷屋が椅子に座ってなにやら議論を交わしていた。

「宗教なんて言ってみれば信者をどれだけ満足させるか、というだけのことじゃないか」

「だが、その宗旨が間違っているとも言いきれないじゃないか。どうも、青島君」

浅井が声をかけてきた。橋本もこちらに気がついて挨拶を寄越してきた。浅井と橋本は二人とも40中ごろの真二よりも20歳近く年上で、浅井のほうはこの会社の常務、橋本は副社長をそれぞれ務めており、かつ真二と同じく代表取締役でもあった。当然この役職に関しても年齢にしてみても真二の大先輩で、立場は近くても日常でのこの二人に対しての上下関係ははっきりしていた。

「何の話をしていたんですか？」言いながら席に着いた。

「宗教は善が悪かって話だよ。青島君はどう思う？」

「私にはそんな難しいこと分かりませんよ。それに、宗教といっても、一概に言い悪いって言えることもどうか・・・」

「ほら、青島だってこう言ってる」橋本はそう言っていてやつたりという風にニヤリとした。「全部が全部悪いなんて、考え方に偏りがあるんじゃないか」

「別に悪いとは言っていない。意味がないんだよ」

「それはつまり悪いってのと同じに聞こえるけどな」

「意味がないってのは、教え通りのことをしたって極楽浄土や天国には行けないってことだよ」

「どうして？全部の宗教の教義を見てきたってわけでも実践してみただけでもないのに何を根拠にそんなことが言えるんだ？」

「根拠はあるさ。なぜなら、あらゆる教義は全部“人間”が作ってきた物なんだからな」浅井はそこでこぼすような小さな笑みを漏らした。まるで病人のような影のかかった笑い方で、真二にはそこから浅井の底の見えないような深い疲労の色が読み取れた。突如、原

因の分からない恐怖が背中を走った。

「人間が作ったって事は、結局その教義の中には必ず作った人の“望み”が込められている。よく分かるような例を挙げるとすれば、そつだな、例えば『神のもたらす幸福』だとか『死後の極楽』とかがあるし、もつと言ってしまえば、この世の成り立ちや生きる意味が知りたいっ、ていうのもそつだな。いや、一番強いのがそれなんだろう。自分がどうして生きてるのか知りたくなるのは誰だって一度はあるし、往々にして答えが見つからないからな。だから、無理やりにもそこに意味をつけようとする。彼らには絶対的な根拠なんていらぬ。一瞬に感じた感動、夢の中に現われた神様、ちよつとした実践とちよつとした成功例、なんだって『神の啓示』だとか『真理を悟る瞬間』に差し替えてしまふ。そしてそこに疑問などないんだろ。あつたとしてもまずは忘れようと努めるものだ。だから、所詮それらは人間が自分達の“望み”を満たす物であつて、数学や物理のような真実は持つていないんだ。そして、彼らは自分たちのことを否定するものに恐怖し、怒りを覚え、排除しようとする。自分達の『真理』を守るためだ。その『真理』のおかげで満たされていた自分達の疑問に対する答えや、人生の充実感、未来への安心感を奪われないようにするために彼らは戦うんだ。もつとも、宗教戦争には宗教に対するこだわりの他にもいろいろと原因はあると思うけれど」

「だけど、その考え方には一つ大きな穴があるぞ。もしも、地上に現われた現人神とか真理の啓示とかが、本物だつたらどうなるんだ」
「それは」 浅井は間を置いて息をついてから、今度はさつきよりも大きく笑つた。「論外だろ」

真二も思わず笑つてしまった。確かにそうだけれど、それを言つたらおしまいだろ。

部屋の扉が開いて堀口と小暮が入ってきた。

「待たせたな」

「いえ」

2人が席に着いた。
「では、始めるか」

第2章(5) / 6

思えば3日ぶりの帰宅だった。

真二は駅の階段を外へと下り、ひっそりと静まった民家の郡を上から眺めながら今さらのように思い出した。

一つ一つの家から漏れ出ている小さな光には都会の夜景とはまた違った幻想的な面持ちがある。真二は昨夜会社のビルから眺めた外の景色を思い出して、千葉の一角にある、まだ快適とはいえない風景とを見比べながらしみじみと感慨にふけていた。若くてまだ入社したての頃は、仕事が終わったという開放感からなのか、その日に持って帰った疲れが多い日には決まって似たような感慨を覚えたものだ。それが、それもいつの頃からかあまり感じなくなった。感動そのものを疲労として受け取るようになったせいかもしれない。はたまた仕事や出世のことが頭の中を占めるようになったからだろうか。とにかくそういう感動とは離れて久しかった。なのに、真二は今日にしている風景の中に、昔感じたのと同じ懐かしさや、涙腺を突いてくるような安堵感を覚えずにいられなかった。いままで麻痺していた感情が急に思い出されたかのようにだった。

ここに引越してからかれこれ6年がたった。はじめ来た時は今よりさらに何も無かった田舎町にも段々と家の数が増えはじめ、大規模なショッピングモールや大型スーパーが立ち並ぶようになり、逆に駅と家との間にあった昔馴染みの家屋や商店は少しずつなりを潜めていった。真二はあまり近所の散策をしたりはしないけれど、きつと町中で同じような光景が見られているのだろう。日本中のこういう町にしたって同じなのだ。新しいものが立ち並び、古い建物は次々と消え去ってゆく。人もしかり、年老いた、人生経験の豊かな人間は次々と亡くなってゆき、新しい人間で埋め尽くされるようになる。かつてある外国人が「世界で一つの民族だけが生き残るとしたら、それにもっともふさわしいのは日本人だ」と評した「日本

人らしい日本人」など、すっかりなくなってしまうのだろう。そこには、日本人は細かいところに気が利くだとか、勤勉な性格だとかいうハンデは存在しなくなるのだ。日本人は諸外国の人間と同じスタート地点、いや、競争社会になじめないという点で数歩分送れた場所からスタートして、戦っていかねければならない。かつては湯水のように金が溢れ、いまや世界最貧の地にまで成り下がったマリ王国の辿った道を、日本もまた歩んでいくのだろうか。しかし、それ以上は考えなくなかった。

真二は一輝の教育に関してはあまり干渉していないので良く分らないが、たまに早く家に帰ってみると（本当にたまにだけれど）塾に行っていてまだ帰っていないということがあった。高校生とはいえ、夜の１１時に外にいるというのは大いに驚かされた。自分の学生時代にはそんなことは考えられなかったのだ。結局その日は好子と口論よしこになってしまい、そこへ一輝が帰ってくるという気まずいことになった。あなたは子供のことに全然関心がないくせにいちいち変な口出しをするな、とか、今の子供達にとって何が普通かなんてあなたには分かっていないんだと言われた時には真二もさすがに傷ついたし、憤慨もしたが、後になって考えてみると自分は確かに一輝のことなんてよくは分かっていないのかもしれない。そもそも小さい頃から仕事で忙しくて人並みにどこかに連れて行ったり、一緒に遊んだりすることもできなかったのだ。一輝にしても好子にしても言いたい事はあるかもしれない。けれど、だからといって家族のために毎日苦しみに耐えて働いている真二の立場がこうも軽んじられて、それでも黙っていなければならないというのはどうしても我慢ならなかったのだ。もっとも、何をしているから何をする権利があるなんて話をしてもきりが無いのは真二にも分かっていった。だからどこかで互いに妥協をしなければならぬ。しかし、二人にはどこが妥協点なのか分かっていなかった。

気づくともう家についていた。財布の鍵でドアを開けて中に入って靴を脱ごうとした時、突然居間の扉が飛び出すように開いた。

第2章（6） / 6

いきなり飛び出してきた好子を見て、真二は思わず息を呑んで固まってしまった。

「大変なのよ、いま電話をもらったんだけど・・・」

「どうしたんだよ」

好子はどちらかといえば色白なほうで化粧も少し厚く塗るタイプなのだが、今日の前にいる彼女の顔はそういうことではなく本当に白かった。

「弘昌さんとこの美穂ちゃんがまだ家に帰っていないって。まだ電話つながってるから、出てちょうだい」

「本当なのか」

弘昌は真二の兄であり、美穂はまだ小学生の長女だった。東京に出てきた真二の代わりに地元の新潟に残って近くの中小企業に勤め、両親と同居していた。東京に引っ越して好子と結婚した当時は年に五回以上は会いに行っていたのだが、だんだんとそういう機会も少なくなっただけ、最近では仕事が忙しかったりして年に2度お盆や正月に会う程度だった。今年は正月に集まらなかったで、美穂ちゃんのこととはしばらく見ていない。内気で、どちらかといえば人と積極的には話したがらない子だった。

真二はすぐにリビングへ飛んで行って電話の脇に置かれていた受話器をつかんだ。

「兄貴か」

「いたのか、真二」

弘昌の声は力なくしおれているように聞こえた。今にも崩れ落ちそうになるのを必死にこらえている。

「いま、どうなってる。美穂ちゃんは見つかりそうなのか？」

「いや」今度は確かに声が震えていた。「さっきまでずっと近所を探していて、警察にも捜索届けを出したけど何一つ分かってないん

だ」

「それは・・・目撃者とかも見つからないってことか？」

「最後に学校を出たのはいつとかなら知っている人がいたけれど・

・」弘昌はここで一度口を詰まらせた。「警察は誘拐や事故の可能性もあるって言っている」

「そうか」

なんと言ったらいいいのか分からなかった。自分の娘が行方不明になった。それもまだ小学生だ。とりあえず勇気づけなければならぬのだと気づいて、真二はなんとか言葉を探した。

「家出とか、どこか友達の所に行ってるとかはないのか？」

「とりあえず学校の友達の家には一通り電話してみたんだけど、誰も知らないって言ってた。それに家出なんて・・・俺の知る限りでは最近そんなに叱ったりしたこともないし、京子も家出じゃないって言ってる。それに・・・」

「なに？」

「へんな手紙があつたんだよ」

同時に、受話器からため息が聞こえてきた。その音から伝わってくる底知れない絶望感だけで真二は胸にずっと冷たい物が流れるのを感じた。手紙？何の？

「封書に、ワープロで一文『約束通り、倉田美穂はさらってゆく』って書いてあるんだ。差出人の名前もないし、ちょうど4時ごろにポストの中に入っていたのが見つかった物だから、多分悪戯とかそういうことでもない」

虚をつかれて返事をする事ができなかった。一瞬だが、遺書なんじゃないかと考えてしまったのだ。だが誘拐を告げる手紙にしても真二には十分な衝撃だった。

「『約束通り』って、何か心当たりはないのか」

「あるわけがないだろ。京子の知り合いにも、俺の会社の人とかにしてもそんなことは全くない」

けれどもその文書には、まるで美穂ちゃんを誘拐することをあら

かじめ取り決めていたような言葉が書いてある。わけが分からなかった。前から決められていた計画。そして手紙。

いや、もしかしたらその手紙は誘拐犯が警察の捜査をかく乱するために作った嘘偽りの物なんじゃないだろうか。あたかも犯人が美穂ちゃんに家族の知り合いが、恨みを持った人物のように見せかけて自分は悠々とどこかに隠れているのではないか。

それとも。まさか本当に『約束』があっただろうか。犯人と約束を交わしたのは別に弘昌たちと限ったことじゃない。

誰かが依頼し、依頼された人間はそれを遂行する。しかしそうすると目的が分からなかった。だいたい何のために当に被害者の家に手紙を送るのだろうか。復讐？あてつけ？考えれば考えるほどに何が何なのか分からなかった。

第2章（7） / 6

「心配かけて悪いな。あとは俺達で何とかするから」

「大丈夫なのか？ なにかあったらすぐうちに電話してくれよ」

分かった、と言いつて電話は切れた。

「こんなことが本当にあるんだな」

真二は呆然となつてつぶやいた。

「無事なのかしら、美穂ちゃん・・・」

答えるべくもなく真二は好子の言葉を見無視する形で居間から出て行った。

自分の部屋に入つて、真二はベッドの上に腰掛けた。頭の中は突然の出来事に混乱してまるで宙に浮いているかのようだった。

全く、現実味というものが感じられない。ぼんやりとスーツを調べながらようやく自分の兄の娘がいなくなったということのイメージが沸いてくる。美穂ちゃんが車に押し込まれる光景、兄貴達が警察と話している姿、そんなものがつぎつぎと浮かんでは膨れ上がっていた。

美穂ちゃんは誘拐された。それだけは確かなのだろうと真二は思った。そして、おそらく無事に帰ってくるということはない。たとえ無事に帰ってきたとしても、外見に何の危害も加えられていなかったとしても、知らない人間に連れ去られるという異常な経験はそれだけで相当なショックを本人の残すことになるだろう。小学生の女の子が背負う思い出しには、十二分に重いトラウマには違いなかった。

なんとという不幸だろうか。

けれど、それだつて無事に帰つて来れるに越したことはないのだ。美穂ちゃんは今、どこで何をしているのだろう。

それ以上考えることが真二にはできなかった。想像すればするほどに、自分の考えが闇の中に突き進んでいくみたいで怖かったのだ。

こうなつたらなるようにしかない。今ここで俺がどうこうしようと事態が良い方向に進むなんてことはないんだ。そう自分に言い聞かせた。そうして、弾みをつけるようにしてベットから腰を上げた、そのときだった。

床に一枚の封筒が落ちているのに気づいた。

青い封筒だった。真二ははじめ足元に落ちていたそれを見た時どうしてこんな物が自分の部屋にあるのかと不思議に思い、とっさにまさか好子が知らないうちに入って落としていったのだろうかと疑った。無意識にスーツをいじっていたので、まさにそのポケットからそれが落ちたということに真二は気づいていなかった。

いぶかしげに拾い上げて表を返した。そして『青島真二様』という言葉を見つけたとたん、脳裏に電撃のように記憶が駆け巡り真二は全てを思い出した。

引つ張り出すかのように封筒の中から手紙を取り出した。三つ折の白い封筒を指先に握る両手の動きがまるで冬の冷氣の中に放り出されたかのようにぎこちないのを見て、えたいの知れない恐怖が全身に這い上がってきた。今朝この封筒を見つけたときと同じだ。まるでデジャビュじゃないか。

今朝ビルの外に立っていた時の光景が鮮明に浮かび上がり、白紙の中に一文ワープロで書かれた文章が頭に飛び込んできて、手元の手紙と重なった。

間違いじゃ、ない。確かにそこには真二の恐れていた物があつた。

1月5日の午後1時ちょうどに、 駅前の喫茶店『ブルボン』
に來い。來なければ身内の人間に危害を加える。

どうして今の今までこの手紙のことを忘れていたんだろう。絶望のふちから突き落とされた気分、真二はそこから目を離せずにした。

もはや疑いようがない。こいつは悪戯でも他の「青島真二」にあ

てられた物でもなく、正真正銘本物の脅迫状だったのだ。

ベットのの上に腰がどすんと落ちた。体重と同時に、体内にあったエネルギーや活力が全て地面にひきつけられそのまま下へ下へ溶け落ちていくような感覚に襲われた。頭の中から血が引いてゆき、めまいがした。一瞬視界が歪んだが、それでも手紙が見えなくなるということはなかった。

知らせなければ。この手紙があつたことを、「約束通り」とはどういう意味なのか兄貴たちに知らせなければならない。

真二は立ち上がろうとしたが、その体は意思に反してピクリと止まった。頭の中で全く思いがけない考えが膨らんで、真二の足をつかんでいた。

もしもこの手紙を持っていたことを知ったら兄貴や京子さんはなんでしょう。真二がこの手紙に書かれている指示に従っていたのなら美穂ちゃんは今連れ去られたりしなかったのだ。そもそも、美穂ちゃんは俺のせいでこんな事件に巻き込まれたということになるんじゃないか。そして、実際その通りなのではないか。

齒軋りをせずにはいられなかった。こんなことを知られたら、俺にはもう兄貴たちに合わす顔がない。第一この手紙を渡して何が変わるというのだろう。犯人の指紋を見つけないなら、兄貴達のところへ届いた手紙を見ればいい話じゃないか。

隠さなければ。

真二がこの手紙を受け取ったことを、誰にも知られてはいけな。手紙はどう処理すればいいだろう。机の中や家のゴミ箱に捨てるの見つかってしまふんじゃないだろうか。やはり捨てるのなら駅のゴミ箱や会社の近くなどどこか遠くのところがいい。

真二は手紙をコートの内ポケットにしまおうとして、再び思いとどまった。

この手紙があれば、犯人が誰なのか分かるかもしれないじゃないか。そうしたら美穂ちゃんを助けることができるかもしれない。それをたかだか自分の体面のためだけに隠すなんて、許されるわけがない。

真二はあらためて、自分の考えていたことに愕然とした。

俺は何をしているんだ。

めまいが巻き起こって部屋の机が、天井が、床がぐるりと円をえがいて歪み、真二は頭を抱えてうなだれた。

どうしたらいい。どうしたらいい。どうしたらいい。

真二は狂ったように目だけを動かして、まるでどこかに自分を救う解決策が隠されているのではないかという風に部屋の中を駆け巡った。視界のなかの物があちこちに飛び回り、行ったり来たりを繰り返していた。自分の精神がその行為だけで何とかつなぎとめられていて、目を動かすのをやめたらあらゆる恐怖や不安が押し寄せてくるような気がした。

バカらしい。

落ち着くんだ。俺らしくもない。

真二は目をつぶって、じっと暗闇の中を見つめた。

こういうときこそ、落ち着いて冷静に考えなければならない。今までだって大変なことはいろいろあった。そして、どんな時だって、俺は自分でも信じられないくらいに冷静でいられた。なのに今日に限ってどうしたっていうんだ。同じことじゃないか。冷静になれ。

まずは自分を第三者の視点で見ればいい。いつものことだ。

真二はもう一度、自分の手の中にある手紙に目を向けた。そこにはさっきまでの焦燥は消え去り、しっかりと現実を見据えて状況を把握しようとしている自分がいるはずだった。自分を取り戻すことなんて造作もない。真二は小さい頃から、それこそまだ小学校に入リたての頃からどんなことにも動じない強い心を持っていた。それは同じクラスの友達の中で自分だけが特別な存在であるということ、を噛みしめるようにいつも真二に底知れない自信を与えてくれた。俺にはその心の強さがある。

あるはずだった。しかし手紙を握った手は小刻みに震えていた。

第2章（9） / 6

消えたとおもっていた恐怖が一気に押し寄せてきて、真二の体を丸ごと飲み込んだ。

冷静になれ。震える右手を左手でつかんだが、止まることはなかった。手紙を離して両手で頭をつかんだが、今度はじかに腕の震えが伝わってきた。

真二は立ち上がった。どうして立ったのか分からないほど無意識の行動だった。この手紙を持って兄貴達に電話で話をするためだろうか。それとも、隠しとおすことを決心したのだろうか。しかし、真二にはリビングに足を運ぶことも、ポケットに封筒をしまいこむこともできなかった。

何かをしなければいけないのだ。どちらかを選ばなければならぬ。

真二は手紙のことを話したらどうなるのかを想像した。

誰かに恨みを買っていたんじゃないかとまくし立てる兄貴に、そんな覚えはないと説得しようとする。手紙を警察に預けて事情聴取を受けることになり、警察署へと向かう道中携帯に幾度となく小暮から戻って来いというメールが届いてくる。こんな時に休まれたら困る。お前は今うちの会社ががどれだけ忙しいか分かっているだろう。身に覚えがないんだったらわざわざ行く必要なんてないんだ。早く戻って来い。・・・戻れるものか。血眼になって娘を探す両親の目の前からどうやって逃げ出せというんだ。そして、美穂ちゃんは見つからない。いや、見つかるかもしれないが、少なくともそこにはもう以前までの美穂ちゃんはいない。外に出ることにおびえ、人と話さなくなり、家に引きこもるようになるかもしれない。最悪、殺されていることだって考えられる。そして、兄貴達がその怒りや憤り悲しみ恨みを向けるのは真二しかない。本当な何か知っているんじゃないのか。じゃなければ、なんで美穂がこんな目にあわな

くちや いけなかつたんだ。教えてくれよ、真二。なあ。教える。

俺にはできない。できるはずがない。このまま手紙を隠して誰にも話さずにいられるのならどんなにいいだろう。

美穂ちゃん、答えてくれ。俺がこの手紙を警察に持って行って、何が変わるんだ？君が救われるか？それともこの手紙を使えば犯人は捕まるのか？本当にそうなのか？

いや。捕まりはしない。何も変わらないじゃないか。だったら、どうせ意味がないっていうなら、この手紙を兄貴達に渡さないことの何がいけないんだ。

手紙をポケットに入れ、真二はベットに座り込んだ。

どこからか救急車のサイレンの音が聞こえてきた。そんなに遠くでもなく、だんだんと小さくなっていくサイレンは、近所から発車したもののだと分かった。電話をしていた時にやって来ていたから気づかなかつたのかもしれない。急病人がいることを告げる警報の音は、真二にも最後の警告を行っているようにも聞こえた。

真二はサイレンの聞こえなくなるのを待った。ポケットに加わったわずかな重みを感じながら、両手に顔をうずめてただひたすら待ちつつづけていた。

昨日、あの後どうやって寝たのか真二は思い出すことができなかった。気づいたらベツトの中で横になっていて、目覚ましをかけるのを忘れていて好子に時間だと言って起こされ、急いで朝食をかつ込み、家を出て、3番線の電車に飛び込んでいた。1分1秒が勝負となる職場にいて、遅刻など普段ならありえない話だった。そうして、あせりと苛立ちに挟まれて満員電車の中で苦悶しているうちは良かった。電車から降り、蒸しかえる熱気にあふれた人の海から解放され、同時にすべてのことを鮮明に思い出した真二は、内ポケットの中に入っているはずの手紙を思い出して、頭の真に冷風を吹きかけたような感覚に襲われ、ホームを流れる人ごみの中で一瞬立ち止まりそうになってしまった。

忘れる以外に、手はない。

乗り換えた電車の中で真二は自ら結論を出し、その結論を自分に言い聞かせていた。いまさらくよくよ後悔してみたってただ単に苦しみを引きずっていくだけだ。手紙を持っていったって美穂ちゃんに戻ってくるわけでもないし、兄貴達は娘がひどい目にあつたことを知っても決して喜ぶわけじゃない、むしろ希望が断ち切られているという事実を突きつけられて落胆するだけだ。捨ててしまうに越したことはないのは分かっている。分かっているのなら迷う必要なんてない。駅でも会社でも路上でもいい。さつさとこの手紙を、真二の近くの人間に悟られないような場所に捨ててしまふんだ。

けれど、さつさと処分しようとしてあせっている意思に反して手がポケットの中の手紙へと伸びていかないのは、ぎゅうぎゅう詰めの中で体を動かせないためだけではなかった。

車窓から、すっかり青く晴れ渡った空が覗いていた。林立するビル頭越しを雄大に広がっていく空の景色は、この青い壮観な眺めがはるか遠くの場所にまでつながっていることを教えててくれている。

た。そして同時に、どこかで監禁されているか、それが、既に命を落としている美穂ちゃんの頭上にも、同じように空が広がっているということを真二に見せつけていた。

真二はつり革をつかんでいた手を握り締めた。この手紙を送りつけてきたのが誰か、それさえ教えてくれるんだったらどんなことだっとしてやるう。そいつを警察に突き出しさえすれば、全てが解決するのだ。

行くしかないのかもしれない、と真二は口の中につぶやいた。相手は真二と合おうと要求している。なら、手紙に記載されている待ち合わせ場所、『ブルボン』に行つてこちらに相手と交渉をする意図を示しさえすれば、もしかしたらもう一度コンタクトを取ってくるかもしれない。相手が何故こうまでして真二を呼び出そうとしているのか、それだけでも分かれば。

どうして俺はこんなことに巻き込まれているんだろう。いまさらのように、真二は思った。

電車のアナウンスから会社の最寄り駅に着いたという声が流れた。途中何度も人とぶつかりそうになりながら、足音と電子音が飛び交う駅の中を真二は呆然と歩いていた。昨日までは騒がしいだけ、煩わしいというだけだったはずの場所なのに、今日はそこに自分だけがのけ者にされたような疎外感がある。改札を抜け、『ブルボン』のある角に目を向けながらぼんやりとそんなことを思った。

第2章（11） / 6

カバンの中で携帯電話が鳴り出したのはちょうどそのときだった。拍子抜けのような、間ができたおかげで救われたようなタイミン
グだった。画面には番号と名前が出ている。小暮社長だ。真二は通
りの脇について通話ボタンを押した。

「青島、今どこにいる」

間違いなく、語調に怒りが込められている。真二は力の抜けた声
で、駅の前です、とだけ答えた。会社に遅刻し、さらには小暮の雷
を食らおうとしているところなのにもかかわらず、何でこんなに気
のない返事が返せるんだ？、と自分でも不思議だった。

「20分の遅刻だぞ。もう会議が始まる。分かってるのか！」

「すいません。今すぐ向かいます」

「ほんとに分かってるのか？ 急げよ、もうこれ以上予定の延長はで
きないんだ。あと10分以内に来なければ今日の会議は中止になる
ぞ」

切れた電話をカバンにしまって、真二は『ブルボン』のあるほう
を見た。駅前の通りはいつもどおりたくさんの人であふれていて、
次々と行きかう人々の影が真二の視界を奪った。あの人ごみを押し
のけて、進まなければならぬ。真二にはそれがひどく億劫に思え
た。できることなら帰ってしまいたかった。家に帰れないなら、ど
こか遠くの場所に行つてしまいたい。そうすれば全てが嘘だったこ
とになるんじゃないか。

カバンのチャックを締め切り、真二は向うの角へと向けて、1歩
ずつ歩き出した。横から追い抜いてくる人や、ぼうつとしているせ
いだろう、2、3人にぶつかりそうになりながら、おぼつかない足
取りで進んだ。目指す喫茶店の輪郭が、5階建てビルの陰から少し
ずつ覗いてくる。

そのとき、またもや携帯が鳴った。真二は足を止めて、さっきし

まったくばかりの携帯電話を取り出した。本当に『ブルボン』に向かう覚悟ができているなら電話に出なければいいのにな、とを思いながらも、点滅しているボタンに指を乗せた。

「竹田です。青島さん、今どこにいるんですか？」

真二がよく一緒に飲みに行く部下だった。押し殺したような声で話している。おおかた、大会議室の中にいて、大きな声を出すのをはばかっているのだろう。横須証券本社ビル6階にある大会議室は最大で300人を収容することのできる階段作りになっている。今朝は、本当なら今頃真二が壇上に立ってプレゼンテーションをしているはずの場所だった。会社の経営方針や、経済論について述べるプレゼンテーションで、もちろん小暮や橋本副社長を含めて重役も多く出席している。主役となる当の本人が欠場している会議室の中は、今頃険悪なムードと焦りとで満ち満ちているはずで、竹田が声をひそめなくなるのもよく分かった。

第2章（12） / 6

「青島さん。どこにいるんですか？」

返事がないのに驚いて、竹田の声があわてだした。

「駅の近くにいますんだ」

「なんだ、だったら急がないと。社長達も怒ってますよ」

「ああ、今から向かう」

「さすがにあと10分もしたら社長達も待っていてくれるかどうか・

・・」

「ちょうどさっきおんなじことを社長に電話で言われた」

「なんだか」急いでいないように聞こえますよ、と言おうとしているのが分かる。「急いだほうがいいと思いますよ。走ればきつと間に合いますから」

じゃあ、時間がないからと言って電話をきろうとした時だった。

「あ、それと、宗谷さんが変な手紙を預かってたみたいですよ」通話を終える直前についてのように言われたことだったので、もう少しで聞き流しそうになった。瞬間、どうして自分がこんなことをしていなければならぬのかを思い出した。会社のビルの前に朝早くから貼ってあった手紙、脅迫の文章が書かれていた手紙、そして実行された犯行予告。あの手紙のせいだ。電話が切られるという危ういところで、真二はどんな手紙だ？と叫んでいた。

「いや、別にどうってことはないんですけど……会社の入り口のところ、青島さんあての手紙が貼り付けてあったんですよ。ほら、青島さんって朝はすっごくは早くから会社に来るじゃないですか。たぶんそれを見越してあんなところにはってあったんだと思いますよ。ただ、差出人の名前がないし、貼ってあった場所も場所ですから、とにかく怪しいし、青島さんがなかなか来ないってんで宗谷さんが預かったんだそうです」

「もしかして、封筒とかに入ってる？」

「はい、封筒です」

「色は？」

「へ」

「封筒の色は何色だった？」

「ああ・・・たぶん青だったと思いますけど・・・どうしたんですか？」

雷に打たれたかのように、固まってしまった。実際、真二は雷に打たれたかのような衝撃を感じた。目の前の景色が意識の中からはじき出され、視界が全てホワイトアウトしていくかのようなだった。さつきまで見えていたはずの『ブルボン』の角も、そこにあった恐怖や圧迫感とともに嘘みたいに視界から消えていた。

「分かった。じゃあ、本当に急ぐから」

竹田は『本当に』の意味をどうとっただろうか、と思いながら、真二は電話を切って走り出していた。もし変に勘ぐりでもされて手紙の中身を意確認でもされたらと思いながらも、真二はとにかく走った。

交差点を1つ越え、ビルとビルの間裏道を抜けると、横須証券株式会社のビルはすぐそこだった。

第2章（13） / 7

1月6日

一輝はその日久しぶりに学校に出かけていた。正月休みは8日まであるし、特に登校日だとか部活だとかがあるわけでもなかったが、お気に入りの服を着て、大きなボストンバックを無理やりかごに押し込み、近所の学校まで自転車を走らせていた。学校といっても小学校だ。

母さんには久しぶりに小学校の友達の家泊まりに行くといっており、嘘を信じさせるために、わざわざ目の前でその友達と電話で話をしたり、いろいろと荷物を用意してもらったりもした。

だが、今日はこの重い荷物も、本当だったらほとんど必要ないのだった。泊まってきたと見せかけるために公衆トイレがどこかで服を着替え、中の荷物を多少いじくり、いつも持ち歩いている財布の中のテレホンカードで家に電話をかけたりする必要はあるかもしれないが、それだけだ。もっと大事なものはほかにあった。

口笛を吹きながら、一輝は上機嫌だった。外はまだ寒いが、頬を切る冷たい風がそれだけに心地よかった。まるでこれからしようとしていることを冷たい北風までもが黒い賛美をしているようで、自尊心をくすぐられる思いだった。

4時を告げる時報が鳴り響いた。冬の日の入りは早い。辺りは既に暗くなりだしていた。とりあえず、時間をつぶす場所を見つける必要があった。勿論母さんに見られるようなことはあってはならないし、知っている人にも見つからないような場所で、且つ寒さをしのげて居心地もある程度よくなければならない。一応、めばしい公園が学校から2キロほどいったところ見つけてにあった。そこに行く前に、今日一緒に『仕事』をする仲間と落ち合う約束になっている。

中高一貫の私立に通っている一輝は違うが、彼らのほうは今年、中学校の卒業式を迎えるはずだ。かれこれ半年は会っていないので、もしかしたら様相がすっかり変わっているかもしれない。派手な格好はできるだけ避けたほうがいいというのがグループ内の決めごとだったけれども、周りの空気に流されてそれを忘れている奴もいるかもしれない。1人がルールを破れば他の全員も分かったものではない。それに、人は予期せずに変わってしまうものだ。こういうことをしている連中ならば、なおさらだった。陰でくすぶっていた欲望がいつ表に向けて燃え上がるかなど分かってものじゃない。一輝自身についても同じことが言えた。いつまでもこのようなことを続けているわけにもいかない。

逆行を受けて遠くに見える小学校の角を視界に入れながら、そろそろ潮時か、とつぶやいた。そのときはメンバーのみんなにも説得する必要があるだろう。はたして、これだけいろいろなことをしてきた後で、みんなはすんなりと解散を聞き入れてくれるだろうか。そのときになったら、こちらに同調する人を探す必要もあるだろうな、と思った。不安だったが、やるしかないのだ。

角を曲がって、一輝は自転車を小学校の脇に寄せた。校門から50メートルほど離れたところにあるコンビニの近くには、既にメンバーが集まっていた。

第2章（14） / 7

格好はぱつと見たところ変わっていなかった。自転車を脇に置いて、5人で話をしていた。とりあえずはひと安心だ。

「青島、遅かったな」

「家を出てく時に準備とかでいろいろ時間とっちゃってさ」

「なんにしても、これで全員集まったな」大西が笑みを浮かべて言った。

「ああ」

「全員で集まったのは久しぶりだな」

「最後に会ったのはちょうど半年ぐらい前じゃないか」

「そんなになるのか。やつときたって感じだよ」

大西の表情に満足感がこぼれ出た。メンバーの中で一人だけ肥満体質の大西は、体格が良く、一見するととても喧嘩が強そうに見える。

きつと、グループの解散を申し出たら、こいつは一番最初に反対するだろう。用心する必要があるな、と一輝は自分の肝に命じた。

「悪いな。いろいろと都合が合わなくて」

「いいや、俺達も受検やらで忙しかったし。いいよな。青島と三木は、受検なんてなくて」

三木は一輝と同じく私立の一貫校に通っている。

「その分小学生の頃にしごかれたんだよ」三木がやや自嘲気味に答えた。

「まあいや。とりあえず青島の言ってた公園に行こうぜ」

そうだなと応じて全員が自転車に乗り込んだ。一輝も自転車に乗って、みんなを先導するために前にこぎだした。

6人は暗くなってくる町の中を大町公園へと向けて走り出した。まだ中学生とは言えど、できるだけ見られないために人通りの多い場所は可能な限り避けて行くが、それでも全く誰にも見られずにい

るというのは不可能だった。中には、こんな時間に部活や学校の帰りでもなく、どうして私服の子供たちが固まって自転車に乗っているのだろうと疑問の目を向ける人たちもいた。

もっとも、彼らにもこれから一輝たちがなにをしようとしているのかは分からないに違いなかった。遠くに遊びに行っていたと思うか、今の子達は遅くまで遊んでいるものなのだろうかと思うくらいだろう。でなければ、誰かの家に止まりに行くとか、集団家出の途中だとか想像するのが関の山だ。

まさか、これから小学校に忍び込んで盗みを働くことを計画しているなど、思いもしまい。

20分ほどで大町公園に到着した。辺りはすっかり暗くなっている。明かりは、街灯の光以外は完全に何もなかった。

首筋と顔面を吹き抜けてゆく風の冷たさもひどいものだった。6人は厚着をしていたが、それでも冬の夜の屋外を6時間近く耐え忍ぶのにはつらいものがあつた。

たとえどんなに寒くても、ゲームセンターやどこかの店の中などで暖まって人の目にあたるようなところには行かない。計画はあくまで秘密裏で、綿密でなければならぬというのが、グループの約束事の一つだった。それはこのグループの活動の目的が楽しみとは別に、純粹に犯罪を犯し、かつ捕まらないことにあるところにあるというところからきていた。

第2章（15） / 7

「本当にここで見つからない場所なんてあるのか」

三上は首を縮めて一輝の後を追いながらたずねた。

「だいじょうぶ。ちゃんと調べてあるから」

「にしても寒いな」

「お互い様さ。いやなら抜けてもいいんだぜ」

「冗談」大西が無理に引きつった声で笑い飛ばす。寒さでうまくろれつが回っていないようだが、それでも、一度中断をすすめた一輝に対する露骨な敵意が込められているのは分かった。

やっぱりこいつは解散に反対してくるだろうな、と心の中で確認する。

他の4人は一輝と大西の言葉に対して何も言わずに、黙っていた。解散に賛成か、反対か、それとも何も考えていないのかどうにもはっきりしないが、それでも多少解散について思うところがあるというのを、この沈黙が物語っているのかもしれない。

「ここまで来ちゃったんだから、いまさら中止つてのもめんどくさいしな」竹田があっけらかんとして靴を鳴らした。「走っていこうぜ、さっさと行っちゃったほうがあったまるだろ」

竹田はそういいながら真二の前に出てきて、早くしようぜ、とせかした。

考えすぎか。と思い直した。

解散がどうか潮時だとか思ってるのはしよせん一輝ぐらいなのかもしれない。俺と違って、みんなにはまだ余裕があるのだ。そういえばここ1年近く、一輝はグループに収集をかけようとしたことがなかった。疲れているのかもな、と思った。俺はだんだん飽きはじめている。だから解散なんてことが頭に浮かんだった。

そうだな、と一輝は目的の公園中心部に向けて走り出した。

一輝が隠れ場所にちょうどいいということを探していた場所は、

中央の大きな噴水のあるところから50メートルほど行つた茂みの中だった。芝生の上に点々と規則正しく並べられた茂みは、皆どれもドーナツ状の形をしていて中に空洞があり、がんばれば人が10人くらいは座って入ることができた。大町公園は比較的最近作られた公園で整備も抜かりない。一輝が最後に確認のためここに来たのは1ヶ月くらい前の話だったが、案の定、枝が生い茂つて茂みの中に空間がなくなっているということとはなかった。

6人はすぐには茂みに近寄らず、一輝だけが、入ることに決めた茂みの一つへと近づいていった。

あつまつて動いて怪しまれたりしないためだ。公園の中を歩くのはともかく、少年が6人もかたまつて芝生の上を歩いていたら、さすがに見ている人も気になるだろうということだった。

子供っぽいことには違いない。もし自分が第三者の視点から見えていたとすれば、この年になってまだテレビドラマの真似事みたいなことをしてる、と指をさして笑つただろう。弁解のしようもなかった。やめたいと思うのにはこういう理由も絡んでいた。

今日はいい加減に変に神経質な行動を取るのは止めにするよう提案するかと頭の隅で考えて、辺りに人がいないか注意を払いながら、一輝は茂みの中にもぐりこんだ。

荷物を置き、少ししてから首を突き出して外の様子を見た。5人は既にばらばらに分かれていて、どこにいるのかも分からなかった。辺りに人影はない。

首を引つ込めてしばらくすると、30秒くらいの間隔をあけて、竹田たちが次々と茂みの中にもぐりこんできた。

第2章（16） / 7

「なあ、そろそろこんなあほらしい下準備はやめようぜ」

まさにこれから自分が言おうとしていたことを唐沢が口にしてきたので、真二は逆に驚いてしまった。

「それ、俺も思ってた。いい加減小学生じゃないんだからこんなことする必要もないよな」一輝が心の中で考えてたのと似かよったセリフを大西が口にする。

「なんだ、そんだつたら俺もおんなじこと考えてたんだよ。もっと早く言ってくれば・・・」こんなしちめんどくさい下見などしなくてすんだのに。「もしかして皆もそうか？」

3人がまあな、というふうには苦笑いする。

「確かに、やらないですむんならやらないほうがいいと思うけどさ、ほかに行く場所がないじゃんか。だからしぶしぶって感じでさ」

村上の言うとおりだった。犯行を予定しているのは夜中の3時頃だ。それまでのあいだ町に出ようものなら、すぐに補導されて、計画の履行どころか親に嘘をついていたということまで白昼にさらすことになるのがおちだ。補導されないにしても現場の近くにうろついているというだけで十分危険だ。中学生が真夜中、それも集団で6人も集まって外を歩いているとなれば通行人たちの注目を集めずにはいられまい。仮にそのまま深夜になるまで待って犯行を行ったとしても、怪しい6人組の少年がうろついていたと証言されれば、犯行時刻に姿を見られていなくても警察にかぎつけられ、最悪捕まってしまうかもしれない。

危険は冒すけれど、絶対危険な目には遭ってはならない。それもこのグループの一つのルールだった。

「大西はどっちがいいと思う。いまのままこんな遠回りな準備をするのか、それとももっと簡単な、でも危ない橋を渡るか」村上が尋ねた。

村上は大西とそんなに仲がいいわけじゃない。それなのに、聞いてきた一輝ではなくて大西に聞き返したところに一輝は違和感を感じた。

「俺は」大西は答えに詰まって考える素振りを見せた。「ちゃんと目的だ果たせるんだったらどっちでもいいぜ。なんだったら屋内かどこか暖かいとこで見つからないような隠れ家を、また探せばいいんだ」

「そうか」村上の返事はそっけなかった。

結局6人で相談しあった結果、今日だけは予定通りここで時間をつぶすことになり、次回からまた同じような準備をするかどうかは別の機会に話し合うことに決まった。

風が吹き抜ける真冬の夜は信じられないくらい寒かった。ポストンバックから厚着やジャンパーを出して何枚も着込んだが、風はそのままのわずかながらの抵抗をあざ笑うかのように体を這い回り、温度を奪って流れ去っていった。

強い光をつけると見つかってしまうので、本を読んだり地図を見て計画の確認をしたりはできない。計画内容を口頭で確認し、後はライトのついたゲームや携帯電話をいじくるか、仮眠を取ったりするしかない。ゲームなどはたいいてい2時間ほどで飽きてしまうし、本番前に頭が固まってしまったりするとまずいので、皆ほどほどにして横になるか、小声で互いにはなしはじめ。

話題にもつまり、興奮で眠る気にもなれなかった一輝は、一人このグループが始まった頃のことを回想しだした。

第2章（17） / 7

最初は、ほんのちよつとした不満を互いにぶつけ合うという程度の間柄だった。

6人が出会ったのはインターネットの掲示板だった。中学入学から8ヶ月、ちょうど学校生活にもなじんで、なんとなく刺激が足りないように思えてくる時期だ。

その頃から一輝はネットにもちよくちよくと顔を出すようになり、当然のように、自分の学校のサイトへと行き着いた。サイトといつても、学校の行事や募集人数、進学実績などが何の面白みもなく並べられている公式ホームページではなくて、陰に隠れた陰気な欲望の立ち込める裏サイトのほうだった。

中学一年にして、あの殺伐として、秩序の吹っ飛んだ空間が自分の学校の人間が作ったものと想像するのはそれなりに衝撃だった。一輝はそこに書き込んだりはまったりはしなかったけれど、それなりに掲示板への興味をそそられた。

自分の思っていることを、誰かれはばかりことなく打ち明ける事が許された場。それがインターネットなのだと思った。

だからできるだけアクセス数の高く、なおかつある程度ルールの守られている掲示板を探して、書き込みを始めた。

生きることには何の意味があるのか分からなくなってきた。毎日毎日やらなければいけないことから逃げられず、将来が不安でたまらない。この世の中に果たして苦しみから逃れる方法なんてあるのか。答えは見つからない。毎日毎日、あつという間に過ぎていってしまう。宗教は皆デタラメだ。どうしたらいいのか分からない。

はじめのうちは、1行か2行くらい、ほんの短い文章を独り言のように打っていた。

そうしてしばらく待っているうちに、彼らはやってきた。いや、正確に言えば、最初にコンタクトをよこしてきたのは竹田1人だっ

た。まさか返事がくるなどと期待していなかったのでパソコンを開いて、昨日自分がコメントを送ったはずの場所に竹田のコメントが返されているのを見たときは、それが自分のに対して送られた物とは信じられなかった。

竹田は一輝と同じようなことで迷っているという旨の返事を返してきた。自分と同じようなことで迷っている人がいることを知って、一輝は救われたような安心感を得た。

もちろん、そのとき竹田はハンドルネームをつかっていたので、本名は分からなかった。誰かを知ったのはそれから1カ月後のことだった。

掲示板を通じたコミュニケーションの次は、個人的な交流もするようになった。竹田は一輝たちと似た疑問を抱える人たちの集まるサイトなどをいくつか知っており、そのうちのいくつかを実際に紹介してくれたりもした。パソコンを頻繁に使うわけではなかったが、しばしば訪れ、何度か投稿したりもした。

同じ町の人間がいるのに気がついたのはそれからすぐだった。つまり青島一輝、竹田耕太、大西遼平、村上龍、三上卓、谷雅夫の6人だ。実際は他にもいたかもしれないが、ともかくこの6人は互いにコンタクトを取り始め、2年前の3月には実際に会ってもみた。あのとき会わなければ、今、こんなことをしてなかっただろう。自分の存在価値が分からないのなら、俺達の存在を世に示して、確かめればいいんだ。

そう言い出したのが誰だったかは、もう覚えてない。誰が言い出したかはともかく、6人はその意見に賛同したのだ。

手始めはインターネット上で、そして、現実世界へと移行していた。

やるなら犯罪しかない。

世の中の人間が勝手に作った「秩序」という名の縛りを犯す。それこそ真に世の中の人に対して自分達の存在を示すことができる方法じゃないか。そこから人の存在意義も見えてくるんじゃないか。

今思えば、ただの屁理屈だ。そうやって無理やりな理論付けをして、俺達は犯罪を犯すという行為の魅力に惹かれていった。

多少の期待はあったかもしれない。犯罪を犯すことで、今まで見えてなかったものが見えるようになるんじゃないか、毎日のけだるいマンネリから抜け出せるんじゃないか、という期待が。

手始めは、学校での窃盗だった。

学校というのはあきれるほどに警戒心の欠如した所だ、というのが俺達の持論だった。持論といっても、本当にその通りでだったし、実際のところ俺達は論理を実践に移してうまくやっていくこともできていた。

さすがにああも窃盗が重なると、学校も手を打ったり、生徒のほうも多少貴重品などに対して気をつけるようになってきたが、痛い目にあわないうちはひどいものだった。盗む側の人間が被害者を「ひどい」というのもどうかと思うけれど、そうなのだからしかたない。扉の鍵なんて平気で開けていくし、誰もいない教室にいくつもカバンが残されたままという場面など、図らずしても簡単に見つけられてしまう。

実行は、こちらが拍子抜けするほど楽だった。一輝や三上は残りの4人と別の学校なので無理だったけれど、大西たちは実行犯と見張り役、受け取り役など分けていろいろやっていたらしい。

かくして起こった学校内の窃盗団の跋扈も、2ヶ月ほどすると下火におさまった。誰にも見つからず、盗った金額の総計は15万円程度。金は全て公園で寝泊りしているホームレスの寝床においていた。べつに金欲しさにやったことではない。

学校での窃盗に見切りをつけると、今度は普通の店や家に手をつけようということになった。まだ早すぎる、失敗したら今度こそたでは済まないし、もっと安全なところからいったほうがいいのではないかという意見もあったけれど、退けられた。逃げ出すようにいやだったのだ。それに、学校でのことがあまりにもうまくいって

いたので強気になっていたところもあった。

もうこれ以上は思い出す必要もあるまい。さまざまな本を使って犯行に適する場所や時間、タイミング、注意点や技術を身につけ、さらにはいくつもの経験を通して、俺達は今日にまでたどり着いた。最初に感じていたスリルや緊張も、今日に至ってはかなり薄れてしまった。

一般的に犯罪者が捕まるのは安心感が生まれて警戒感が低下しはじめる時だというから、気をつけなければならないのは分かっていたけど、こればかりは、どうにもならない。

だからこそ、そろそろ潮時なのだ。大きなへまをしでかす前に、手を引かなければ。

「青島」

突然声をかけられて、軽く心臓が飛び上がった。寝そべる一輝を見下ろしていたのは竹田だった。

「なあ、トイレ行かねえか」

「いいけど、外出ても大丈夫か？」

「こんな寒い日に真夜中の公園に出てる人なんていないよ」と言つて苦笑いを浮かべる。見られるわけないって。

うーんと唸りながら、一輝は横になったり座ったりしている4人の様子を盗み見た。特に、何か反応を遣してくることはない。

「まあいいか」と言つて立ち上がった。ちよつと動いて体を温めるのもいい。

一輝と竹田は公園の奥にあるトイレへと走つていった。風が冷たく吹き付ける。もちろん人影など見当たらなかった。

「なあ、青島」

用を済まして、トイレからでてきた時だった。竹田が神妙な顔でこちらを見ていた。

第2章（19） / 7

「もう止めないか、こんなこと」

「いまさらなんだよ」

突然のことに、思わず反論してしまった。

「正直俺はさ、こんなことがいつまでもうまくいくなんて思えない。いつか失敗する時が来ると思うんだ」

竹田が真剣な目つきでにらみつける。

「今まで黙ってたけど、実は大西とお前以外の3人には話をとおしてあるんだ。みんな止めることに賛成してる。俺達は今日限りでこの集まりから抜ける」

竹田は決然と言い切った。

「それって・・・」

「そう。解散だよ」竹田の言葉に迷いはなかった。「もう2ヶ月くらい前から決まってる。今回俺がみんなを集めたのもそのためだ」

「お前が集めた？何言ってるんだ。今回の計画を提案したのは・・・」

「大西だよ。でも違う。俺達4人で決めたんだ。そして大西をけしかけて、今日集まるように仕向けた」

「なんのために？だったら放っておけばよかったじゃないか。わざわざこんなことをする必要なんて・・・」

「大西がどう出るか分からなかったんだよ」

意味不明だ。どうしてそんなに大西を意識するんだ？あいつ一人に、何ができる？

「青島は知らないかもしれないけど、大西はしばらく前からかなりまずい連中と付き合いはじめてる。いわゆる不良だよ。バックには暴走族だとか暴力団とかも繋がってるらしい。」竹田は困り果てたというふう苦笑した。「そいつらに大西が、武勇伝ってことで俺達の活動を触れ回ってたんだ」

「だから面子を守るために、大西はなんとしても解散に反対してく

るって、そういうことか？」

「そうだ。だから今日俺達は、わざと計画を失敗させるつもりでいる」

「自分が言いだした計画が失敗に終わったところで失意のうちに話を持ちかけて、それで、大西に解散を納得させる」

「そういうことだ」

「何で俺に黙ってたんだ」

「青島も反対してくると思うたんだよ。盗みをしようと最初に提案したのはお前だったろ」

「そうだった」すっかり忘れていた。

「で、どうなんだ。賛成なのか、反対なのか？」

もちろん賛成だ、前から止めようかと思ってたんだよ、と言うと、竹田は大げさに安心した。

「お前が反対してきやしないかと不安だったんだよ。もし大西にこの話を話して形勢を巻き返そうなんてされたら、それこそ俺たち4人は大西の仲間の連中にどんな目に合わされるか分からないからな。特に同じ学校の3人は」

竹田はそれから今日の計画について説明した。なんてことはない、単純な方法だった。要するにわざと学校のセキュリティに引っかかって後は逃げるだけだ。

頼むぞ青島、とだけ言って竹田はもと来た道を戻りだした。一輝もそれについて、冷たい寒空の公園の散歩道を歩いた。

第2章(20)/7

時刻は午前2時。丑の刻。幽霊が一番出てくるのはこの時間だと聞いたことがある。

一輝たちは三島中央小学校の裏口の前に立っていた。立ち込める冷気は肌をも凍りつかせるほどだったが、自転車で走ってきたばかりなのと緊張もあって、体の芯はそれほど寒さを感じていなかった。一輝が6年間通った学校だ。そこにこれから不法侵入しようというのだから、人生ホントになにがあるか分かったものじゃない。

登るぞ、と村上が口だけで合図をした。一輝たちは周りに人がいないか確認する。

村上の足が金網にかけられ、ガシャガシャという金属音を辺りに響かせた。もしこの音を聞いている人がいたら本当に幽霊が出たかと思ったかもしれない。夜中に徘徊する甲冑の騎士だ。西洋じゃあるまいし。

見張りに残った竹田と谷以外の4人が登りきると、今度は手はずどおり非常階段のところへと向かう。ここでまた村上が見張りに残り、3人は閉ざされた鉄格子を乗り越え、できるだけ足音を立てないようにして階段を上っていった。目指すは3階の扉だ。4日前に調べに行ったところ、そのガラス窓は割れてテープで塞がれただけになっていた。昨日も外から様子を見に行っただけだけどガラスは割れたままだった。

どうせなら、わざわざ手間をかけるよりその場にあるものを活用したほうがいい。

一輝は手早くテープをはがして、ガラスに穴を作った。中に手をつつこんで鍵をまわす。一応6人とも手袋をしているので指紋は残らない。

だがこれだけでは扉は開かない。中から別の鍵がかけられているのだ。しかもこちらは鍵本体がないと開け閉めができない。

そこで三上の出番だ。一輝と場所を変わって手袋をはずし、用意しておいた金属片と針金を指先に、腕を穴に入れる。

こんなめんどくさい扉を入り口に選んだのにも、理由があった。三島中央小学校は60年以上前とかなり昔に校舎が建てられたのだけれど、最近、防犯設備の導入があつて学校中の扉やドアに自動警報装置を設置したのだ。そのため、侵入の際には例のごとくガラスを割ってそこから建物に入ってゆかなければならない。

けれど2重鍵があるから大丈夫と高を括ったのか、外に面した非常階段ぞいの扉には警報装置がつけられていない。セキュリティがどこにかけられているのかは谷と三上が調査済みだった。

そんなことを思っている間にも鍵が開いた。三上が扉の取っ手に手をかけ、ゆっくりと引いていく。警報は鳴らないはずだとはいえ、もしも間違つたことになったら取り返しがつかない。3人が同時に息を飲んだ。

何の音もしない。

緊張を抜かないようにして三上が建物の中へと足を入れた。

真っ暗だった。何も見えない。月明かりのある外とは違って、校舎の中は微かな光も見えなかった。

一輝はポケットからペンライトを取り出して、静かにスイッチをONにずらした。3人の目の前におぼろげな光の輪が広がった。遠目に気づかれないように、ライトには布をかぶせて必要最低限の光しか発しないようにしてある。

頭の中の道順と照らし合わせながら、闇の中をゆっくりと足音を忍ばせて進んでいく。狙うのは2階にある職員室の金庫だ。

閑静とした廊下の中を、自分の脈の波打つ音だけが耳元で響いている。

第2章（21） / 7

宿直室には今日も見張りの人間がいるはずだった。大きな音を立てれば、見つかつて一巻のおしまいだ。

「ライト、もつと足元にも当ててくれ」大西が耳元でささやいた。
「これじゃあ転んじまう」

「分かった」とうなずいたが、一輝は光の向きを少し下げただけだった。残念ですけど、その御要望はかなえられませんね。

不服そうにもう少し、と言ってきたが、三上はそれを「声を出したら気づかれる」と返して黙らせた。大西も言い返そうとするが、大きい声がでてしまうのを恐れてかそのまま何も言わずに歩き続けた。

予定通りだ。

一輝たち5人の目的は今回の計画を失敗させて、大西にメンバーの解散を納得させることにある。けどそのためには、失敗の原因をメンバー全員か、もしくは大西一人に置かなければならない。でなければ、責任者にメンバーを抜けてもらうだとかして、大西に解散を阻止する口実を与えてしまっからだ。

もちろん、一輝たちの思惑がうまくいったとしても大西は反対してくるかもしれない。それでも前者と後者では説得のし易さが違ってくるだろう。

本人もお察しの通り、大西には今から派手に転んでもらうことになってる。2階の階段を出てすぐ右側の廊下、机と椅子が積み重ねて並んでいるはずのところだ。

実は大町中央小学校では明日、高校で言う文化祭の様なものがある日になっていて、そのために教室中の机と椅子が廊下に積み重ねられているのだ。そして大西だけがそのことを知らない。あとは廊下に出て、わざと机のある方向から光を遠ざけてやればいい。大西は机に激突し、宿直員が飛んできて一輝たちはすぐさま逃げ出すという寸

法だ。

階段に足を踏み出す。音を立てないように1段1段慎重に歩き、2階に着く。もう少しだ。大西は3人のなかで右側を歩いてる、このままライトをまっすぐ当てて・・・

突然のことに一輝は自分の左足が痙攣を起こしたのかと思ったが、そうではなかった。携帯が電話の着信を知らせて振動していた。

頭の中で6人の間で取り決めた言葉が駆け巡った。

犯行中、携帯電話は互いの仲間以外の着信を遮断し、緊急の要件以外では通話連絡を厳禁とする・・・緊急の要件以外では いたいどうしたっていうんだ、2回の廊下はすぐ目の前だぞ。

さりげないふうを装って、2人の様子を伺う。さすがに大西もバ イブが鳴ったのに気づいていた。一輝は諦めてポケットから携帯電話を取り出した。

かけてきたのは非常用階段の下で待っていた竹田だった。

「青島」

声が上がっている。同じ声を竹田が出したのを一度だけ聞いたことがある。一番最初に留守の住宅に忍び込んで、近所の人間が庭の手入れをしに家に入ってきた時だ。

「大変だ人に気づかれた。たぶん金網を乗り越えた時からだ、さっきまで二階の部屋の窓からこっちの様子を伺ってた。もしかしたら警察を呼ばれたかもしれない」

何てことだ。

「どうしたらいい」

「とにかく急いで出て来い。人に見られそうになったらすぐここちから連絡するから今のうちに早く」

「頼むから声を抑えてしゃべってくれ」

「悪い。でも急ぐんだ」

「だけど」計画はどうなる？

竹田は黙ったままだ。大西のいる前じゃ何も言えない。

「今から行く。人に見られた、逃げるぞ2人とも」

第2章（22） / 7

「マジかよ」

三上が毒づいたのとはほとんど同時に大西が舌打ちを漏らした。

「ったく何やってたんだよ竹田たちは」

最悪だ。一輝はもと来た道を早足に歩きながら自分も舌打ちした。これで大西に責任を取らせることも、メンバーを解散させることもふいになった。おまけに目撃されて急いで逃げなければならないというおまけつきだ。前もつてした準備も全て水の泡だ。

悪いことはさらに続いた。三上が勢いよく開いた出口の扉が大きな軋み声を上げたのだ。学校中に響き渡る、宿直の人が起きていたら間違いなく耳に入ってくるような大きな音だった。

真っ青になっっている暇もなく、3人は校舎から飛び出して階段を駆け下りた。気づかれたかどうかなど確かめもせず、ひたすら下へと足を動かした。

「こつちだ」

見ると竹田が足もとで手招きをしていた。

「裏口は危ない、校庭のほうから出る。こつちだ早く」

歯軋りをしながら竹田のあとを走って追いかけた。あごの力が抜けるたび歯がガチガチと音を鳴らした。

校庭の金網を乗り越えて校舎から出た。谷と村上に合流し、息をつく間もなく自転車をとめてある工場前の道路に向かって駆けた。背中からパトカーのサイレンが学校の方向へ近づいてくるのを聞いて、寒さとは別の理由で全身に鳥肌が立った。

「パトカーだ」誰かがかすれた声で言った。「音を立てずにいかな」と見つかる」

可能な限り足音を忍ばせながら、それでも一輝たちは全力で走った。自転車を見つけると飛びかかるようにして鍵を外し、乗り込むと同時にこぎだした。どこでもいいからとにかくここから遠くへ。

それだけを考えてひたすらこいだ。

家々の間を抜け、無人の交差点を渡り、車の通らない道路を横切って進んでいった。寒さも疲れも感じなかった。こびれついたサイレンの響きだけが頭の中で絶えず反響していた。

どれだけの時間がたち、どれくらいの距離をいったのだろうか。

一輝たちは見たこともない町の景色の中で、荒い息をついてぐつたりと自転車に寄りかかっていた。

「くそ」

吐息とも愚痴ともつかぬ声で大西が吐き捨てた。

「何でこうなるんだ」

大西の自転車が蹴飛ばされて横倒しに地面に叩きつけられ、そのひょうしにハンドルが内側にへし曲がった。

くそ、ともう一回叫ぶと地面に仰向けに寝転がった。

はじめての失敗。それも自分達で失敗を望んでいた時に、全く予期しない形でやってきた失敗なのだから、皮肉以外の何ものでもなかった。

真つ暗闇の2回の廊下が頭に浮かんた。あともう少し、曲がり角まで本当に目と鼻の先の距離だった。もう3歩進んでいたのならうまくいっていただろう。竹田が携帯をかけてきさえしなければ。

もちろん、竹田を責めるべきではない。これは全員の責任だ。

思えば、今までがうまくいきすぎていたのかもしれない。所詮は素人の中学生が馴れ合いでしていたことだ。いつか失敗するはずだった。それがたまたま今日だったというだけのことだ。

もうやめよう。こんなことは今夜で最後だ。大西を説得して、普通の学生生活に戻ろう。

覚悟を決めて、一輝は何気なく空を仰いだ。

冬の夜空に太陽の昇ってくる気配は感じられなかった。

第2章（23） / 8

1月7日

真二はホテルのベットの所で目を覚ました。

眠気はなかった。体中が、指の先まで醒めきっている。

手を伸ばして目覚まし時計のスイッチを切った。まだ5時だった。セツトした時間よりも1時間早い。二度寝するほどの眠気はない。起き上がって部屋の電気をつけ、顔を洗い、昨日の夜コンビニで買ってきた弁当を食べた。

カーテンを開けると外は真っ暗だった。光はどこにもなく、東京の街は深夜以上に夜だった。

手紙の主が再び会う約束を取り付けてきたのは今日だった。午後1時、喫茶店『ブルボン』に一人で来ること。一枚目の手紙の文面と同じ、感情を感じさせない、一方的で有無を言わせぬ要求だけが短く書かれていて、美穂ちゃんのことについても一言も触れていなかった。唯一美穂ちゃんに関係したことといえば「身内の人間に危害を加える」の中に「別の」という2文字が加えられていたことぐらいだった。1人でダメなら2人目、3人目があるという徹底した冷酷さに、真二は底知れぬ恐怖と、どうしようもない己の無力を感じずにはいられなかった。

『ブルボン』にやってくるのは誰なのか、送り主は何が目的でこんなことをしたのか、美穂ちゃんは無事であるのか、真二はここ2日間、それらのことばかりを考えて仕事も何もほとんど手につかなかった。

だが、考えて分かることなどなかった。

はつきりしているのは今日いくらかの答えが明かされるだろうということだけだ。自分でどうこうできるものは一つもない。そう。分かったことといえば、今の自分の運命が見ず知らずの他人の手に

握られているという事実くらいだった。

しかし今は落ち着いたものだった。ある意味、諦めがついてしまったのかもしれない。俺がどうあがこうと、何も変わらないんじゃないかという諦めが。

スーツを着て、部屋を出ることにした。1時からの待ち合わせに時間をとられるかもしれないので仕事はできる限り済ませておく必要があった。

会社にはまだほとんど人影がなかった。真二はがらんとしたロビ―をぬけ、エレベーターに乗って自分の仕事部屋へと向かった。

こういうときは例にも漏れず時間がゆっくりと進むもので、机に向かっている2時間が4時間にも6時間にも感じられた。

朝会に出向いてから、部屋に戻って仕事を再開した。しかし、効率よく進んだのは1時間かそこらで、11時になる頃には、手が動かないといっていいほど少しも書類の文書に集中していられなかった。

動悸を抑えようと真二は窓を開けて深呼吸をした。窓を開けると車の騒音が部屋の中へと流れ込んできて、かえって落ち着かなかった。

ここから落ちたら死ねるだろうか。

ふとそんなことを考えている自分に気づいた。

自分の考えに驚くということとはなかった。自殺を考えるのは頻繁というほどでもないが、少なくともなかった。いつもは仕事や生きがいのなさに絶望するけれど今日はまた違うことが真二の背中を押していた。

投げ出すにはまだ早い。これから全てが始まるんだ。

真二は窓を閉めて机につき、仕事の続きに取りかかった。必ず自分の力で今回のことに決着をつけてまたいつもの生活に戻してみせる。そのためにも目の前の課題をほったらかしにはできない。そう自分を説得して、真二は前を向くように自分に言い聞かせた。波打つ動機を無理やり抑えてペンを握り、書類との格闘に集中しようとしてめた。

1時間半後、12時半を知らせる時計のアラームを聞いて真二は部屋を後にした。

空は曇りで、外は凍えるほどに寒かったが、体は緊張からくる動悸で火照っているくらいだった。早足に歩道を突き進むと『ブルボン』まではあつという間だった。

午後0時42分。時計で時間を確かめ、目の前にたたずむ建物を見据えると、急に今までは感じていなかった激しい怒りが胸の中で燃え滾った。敵の姿を、憎むべき相手の姿を見つけたように錯覚したからだろうか。この中に手紙の主が待っている。心の中でそう言葉にしてつぶやくと怒りは我慢できないくらいに膨れ上がった。

恐怖と不安が巻き起こって怒りを消し止めてしまいう前に、猛る足取りで開きだした自動扉の間に飛び込んだ。

中はそれなりに人ごみで混んでいた。昼休みに立ち寄ったらしいサラリーマンや買い物途中の女性、遊びに来たらしい若い男達の声があちこちから聞こえてくる。

「お客様、お一人様ですか？」

のんきにたずねてくる20くらいの男性店員にそうだと答えた。手紙には来るように書かれていただけで、待ち合わせ客と名乗れだとか言う指示はなかった。真二はだったら余計なことはせずに席についていようと前もって考えていた。

「カウンター席でよろしいでしょうか？」

「いや、できれば静かな席がいいんですけど」

ではこちらにどうぞ、と店の奥のほうへ案内してくれた。カウンターのような人目につく席でできるような話じゃない。最悪、相手がなにも言わずに帰ってしまう可能性もあった。

「ごゆっくりどうぞ」

午後0時45分。あと十五分だ。

暖房が効きすぎているわけでもないのに真二は頬を伝った汗をぬぐった。

50分。見える範囲に怪しそうな人物は見当たらない。

56分。辺りを見回してみるが、誰も近づいてこない。店内は相変わらず明るい話し声が絶えなかった。

58分。じつと時計の秒針を見つめた。そろそろ来るはずだ。店の空気には何の変化もない。

残り60秒。秒針が12時を通り過ぎる。カウンター向うの壁掛け時計も同じ時刻をさしている。喉が渴いている。何度つばを飲んでも潤わない。

30秒、20秒、もうすぐのはずだ。

「青島真二様という方はおられますか。小暮久則様が電話でお呼びです。お客様の中に青島真二様という方はおられますか」

小暮・・・社長？虚をつかれて一瞬何がなんだか分からなくなっていました。が、すぐに理解が追いついた。時計はちょうど午後1時を指していた。壁掛け時計もだ。これは小暮じゃない。小暮久則は偽名だ。

「すみません。私です」

飛び上がるように立ち上がって、レジまで小走りで駆けだした。周りの客が変な人を見るような目つきで見てきたが気にならなかった。

「私です」

店員も真二の勢いに驚き、無言で受話器を渡した。

「青島だ。でたぞ」

たたみかけるようにいって、受話器の向うから無表情な声で返事が返ってきた。

「どうもこんにちは」

「お前があの手紙を私によこしていたのか？」

「そういうことになるな」

「美穂ちゃんは無事か？」

信じがたいことに、笑い声が返ってきた。

「そんなことをこんな場所で言われると困るな。まわりに人がいるんだろ。聞かれたらどうするんだ？」

「答える」

怒りで受話器を持つ手が震えた。店員が不安そうにこちらを見ている。

「おいおい、俺の話を聞いているのか？このことを他人に話したら彼女がどうなっても知らないぞ」

「ということは無事なんだな」

「どっちでもいいさ。なにも危ないのは倉田美穂に限った話じゃないんだぞ」真二の心境とは裏腹に、電話越しの男の声は陽気だった。「場所を変えよう。今から番号を言うから、とにかく人のいない場所電話をかける」

そう言つと男は電話番号を読み上げた。明らかに携帯電話のものだった。真二はそれを自分の携帯電話に打って登録した。

「お前は誰だ」

「そうあせるなよ」

電話が切れた。

真二は礼も言わずに受話器を店員に返して自分の席に戻り、すぐに登録したばかりの電話番号を呼び出した。が、返ってきたのは通話中を知らせる電話案内の声だった。

呼び出しの中止ボタンを押して、その指で危うく携帯電話をへしおつてしまいそうになるくらい、手に入った力がはいった。

完全になめられている。

何とか怒りを抑えて、相手がどんな人物なのかを考えようとした。声の感じは堅くもなく柔らかくもなかった。歳もそれほど離れていないような感じがする。

そして、あの男は真二とのやり取りを楽しんでいた。まるで勝手知った友達と話しているような口ぶりだった。楽しむことだけが目的だとしたら、はたしてこの俺に、あの男と一人で対峙して全てを解決することが出来るだろうか。真二は底知れない絶望感が心に根を張っていくのを感じた。そしたら、俺の人生はどうなってしまっただ？

不安を振り払おうと、再び呼び出しのボタンを押した。今度は3秒ほどでつながった。思わず息を飲み込む。

「悪いな。上司から電話があつて」

「会社勤めなのか」驚いて尋ねた。

「まあそんなところだ。それより取引の話をしよう。要求を呑んでくれれば倉田美穂は返すし、お前の身内にも何もしない」

「要求とは何だ」

「簡単なことだ。横須証券株式会社に俺達が自由に干渉できるようにしてもらいたい」

「は？」

聞き間違いかと思った。男が横須証券株式会社をどうにかしろといっている。

「なにを言ってるんだ？」

「だから言葉どおりのことだよ。俺達がお前が専務を勤める会社に自由に干渉できるようにしてもらいたいんだ」

「意味が分からない。そんなことできるはずがない」

「できるさ。そのための算段は俺達がしてある。お前には、社長とかのお偉い連中にこのことを伝えてもらいたいんだ」

「どういうことだ」

「小暮久則をはじめ、役員連中にお前にしたのと同じかそれ以上の脅しをする。なんだったら横須証券の社員に手をかけてみたってい

いぞ」

「ふざけるな」

震える声でそう一言だけ搾り出した。憤怒で震えてるのか恐怖で震えてるのか分からなかった。

「ふざけてなんかない」

「そんなことをしてどうするつもりだ」

小さく笑い声がした。余裕を持った、こちらを見下ろしてくる笑い声だ。頭が真っ白になった。視界が本当に歪んで見える。

「まだ言えない。そのときになれば全て分かる」

「どうしてこんなことを・・・」

「それも俺達が見てれば分かる」

「本当に社長達に伝えなければならぬのか」

「もちろんだ。あと、警察には何もしゃべるな。美穂ちゃんの誘拐とお前にやった手紙のことはいいが、今回のことを他言したらただじゃすまないぞ」

いまさら警察に行けるわけがない。

「社長連中にこのことを伝えて、全員に脅迫が終わったら美穂ちゃんも返してやるつもりだ。言っとくが警察に行こうとしてもすぐに分かるぞ。電話で伝えるのも無駄だ。警護の人間の姿が見えればすぐに気づくからな」

もはや何も言い返すことができなかった。言い返そうにも、頭の中が真っ白になってまともにものを考えることができなかった。

「そういうことだ。明日の1時、もう一度この番号に連絡して来い。じゃあな」

「待ってくれ。最後に一つだけ教えてくれ」最後の力を振り絞って尋ねた。「どうして、この俺なんだ？」

電話口に沈黙が流れた。何のための沈黙なのか、男がどんな顔をして黙っているのか、真二はそのことを強く知りたいと願った。

「都合がいいから、とだけ言っておくよ」

電話が切れた。あとには、無機質な電子音だけが残っていた。

第3章（1） / 9

7月17日

その日は天気予報が外れて大雨になった。

朝から小雨が降りだして、今はザアザアと音を立てるほどに雨脚が強くなっていた。夏の午後はひどい湿気と前日までに残ってた暑さで羽鳥を憂鬱な気分にした。

羽鳥はいつものスーツを着込み、この雨の中で国道を抜けたところだった。バンパーをかけても曇ったままの前部ガラスが苛立ちと不安に拍車をかけ、知らぬうちに舌打ちをしていたようだった。

「羽鳥さん、やっぱりこんなの行かなくなっちゃっていいんじゃないですか？」

助手席に座っていた小宮山がめんどくさを隠そうともせずと言った。

小宮山は羽鳥の直属の部下で、秘書的な存在だった。羽鳥の執り行う事業にはたいてい小宮山も絡んでいる。今回の、横須証券の乗っ取りに関してもそうだった。どちらかといえば羽鳥とは違ったタイプの性格で、軽率なところは目にあまるが、行動力があって人付き合いもうまくいった。

「念のためだ。俺が手をかけたことなんだから、その根は自分で摘み取るのが道理だろう。それに、ついてくるって言っただのは小宮山じゃないか」

「そうなんですけどね」大きくため息を吐く。「めんどくさくなってきたやつて。こんな天気だし」

小宮山はそう言っただけで自分の着ているスーツの襟をいじくった。わざわざ地味な格好の物を選んで羽鳥が貸した物だった。非番だとはいえ目立つようなことがあってはいけないと思ったのだ。それに、ひよっとすると内ポケットに収めたサイレンサーを使う必要が出て

くるかもしれない。

「もしも呼び出してきた相手がこちらのしていたことをある程度知っていて、強硬手段にでもそのような態度を見せたら、迷わず、消すぞ」

分かってます、と小宮山が気のない返事をした。

「でも、もしも相手が大人数でしかけてきたらどうするんです？」

「そのためにお前に来てもらってるんだろ」

「相手も銃を持っているとしたら大した応援はできませんよ」

「あの手紙を書いたは一般人だ。その筋の人間は出てこない」

同業者の人間だとしたらこんな事をする動機がない。十中八九、相手は青島達と何らかの形で交友のあった人物だと、羽鳥はにらんでいた。だから、羽鳥が青島真二の住んでいたマンションに来るのを見越してあんな手紙を貼り付けて呼びつけ、復讐しようと企んだ。自分がどれだけ危険なあだ討ちをしているのかも知らずに。

一昨日、羽鳥は『十日後に来い』という指示に従って再度ロイヤルマンション坂田を訪れ、そこでまた同じ青い封筒を見つけた。その中には一枚の地図と、宣戦布告のような趣旨の内容が書かれた手紙が入っていた。その地図に示してあった場所というのが今羽鳥達の向かっている旧工場団地の空き工場だった。まさに、決闘の舞台にふさわしいセッティングというわけだ。

手紙をあてつけてきた人物の始末のほかに、羽鳥には大きな懸念があった。この手紙を書いて廃屋で待ち伏せしているのが一人にせよ大人数にせよ、そいつらが他の人間にもこのことを言いふらしている可能性があるのだ。

もしそうだったら、とてつもなく厄介なことになる。せつかく、横須証券がらみで事が露見しないようにと行った工作も、役員5人にした口封じも全て無意味になっていしまう。羽鳥はそれだけはどうにかして避けたいと考えていた。だからこそ、今日手紙に指示された場所に出向いて、直接話を聞く必要があった。始末をするかを決めるのもそれからだった。

「今は、一般人だつてやろうとすれば拳銃も手に入る時代ですから」
「なるほど。そういうことも考えられるな」

「とするとやっぱり危険ですよ」最後の警告とでもいうように、さ
さやき声で言ってきた。

「そうかもしれないな」

それでも行かなければいけないのだ。

「まったく、一体誰がこんな世の中にしてしまったのやら」

小宮山がぼやいた。

第3章(2) / 9

1時間くらいして、車は廃工場の前へとたどり着いた。うるさい音を立てて落ちてくる雨粒以外に何一つとして動く物の姿が見えず、ここに、本当にかつて人が出入りしていたのかと疑いたくなるほどだった。町に生物兵器でも投げ入れられて、人だけが死に絶えてしまったのならこんな風に寂しい風景が出来上がるかもしれない。それほどに、辺りには生氣というものが感じられなかった。

半世紀、いや、それよりも短い時間でもさかのぼったのならば、ここも人の掛け声と機会の稼動音であふれていた。そう思うと不気味な感じもした。所詮どんなに活気に満ちていようと、人間などあつという間に荒廃し、落ちぶれてしまふ。そんな現実を突きつけられているかのようにだった。

傘をさして2人は車を出た。来た時に見たが、やはり辺りに人影はない。

人を殺すのにはもってこいの場所だ。その上この雨。近くには工場が連なるばかりで民家はずっと遠くのほうにある。たとえサイレンサーのついていない銃を撃ったとしても、銃声を聞きつけられるようなことはないだろう。

もしかしたら。

「本当に銃を持ってるかもしれませんね。相手さんは。ここでは俺達を撃つても気づかれないでしょう」

「お前もそう思うか」

目の前では扉の開けっ放しになった工場の入り口が、ぼつかりと暗い屋内をのぞかせていた。

「やっぱりやめておきませんか？」

小宮山が眉間にしわを寄せて工場をにらみながら促した。

この先に、俺達に復讐を果たそうとしている人間がいるかもしれない。あの日獄中に葬ったはずの青島真二たちの亡霊が。薄暗い工

場の中で、じつと羽鳥が来るのを待ち構えて。

俺は自らの幻影を葬るために、青島を葬った。中学生のあの日、自分が今の道に進まなければ歩んでいたはずの人生を生きる青島真二を消し、今の自分の生き方が間違っていないことを確かめようとした。力も金も、青島真二の行き方より勝っているということを確認したかった。そして俺はそのことを証明して見せた。俺は今日も外のこの地を踏みしめているのに、青島は狭い牢屋の中に閉じ込められ、まずい飯しか食えず、むなしい労働に従事して、暮らしている。それも全て、羽鳥には力があり、青島を支配することができたからだ。この生き方が正しかったからだ。

それなのに、今俺の目の前には青島の亡霊が身を潜めてる。どこかで銃口をこちらに向けて、俺を殺そうと待ち構えている。

「いや、行こう。いまさらやめるのもなんだ。素人相手に俺達がびびってどうする」

「それもそうですね」気が進まなそうに小宮山が答えた。

入り口へと進んでゆく。後ろから小宮山の足音がついてきた。

工場の中は、天気の良い日もあってかほとんど真っ暗といってよかった。がらんどで、機材の一つも残っていない。おそらく廃業になってから工場だけ売り渡そうとして、全て処分されたのかしたのだろう。そのあとで急に商談が決裂し、ただっ広い廃屋だけが残ってしまったのかもしれない。おかげで人がひそんでいられるような場所はそんなにない。が、この暗さは身を潜めるのには十分だった。これだけ視界がきかなくなると、こちらから銃の狙いをつけるのは難しい。羽鳥は人影はないかと注意を払いながら、ゆっくりと中へ一歩ずつ進んでいった。

「小宮山、あの手紙をロイヤルマンション坂田の青島の部屋に貼り付けたのは誰だと思う？」

突然気になってたずねてみた。

「さあ、見当もつきませんね」小宮山は相変わらずどこか口調が不機嫌だった。

「考えてもみれば当たり前のことだけれども、その人物は俺がいつあの手紙の元を訪れたのか知っていたはずだ。でなければ、10日後にどうこうしろなんて約束ができるはずない」

「はあ、確かにそうですね」

「とするとだ」羽鳥は得体の知れない不安が胸に渦巻くのを感じた。「その人物はずっとあの手紙の前に張り付いていなければいけないことになる。それもできないことじゃない。けど、幾ら復讐のためとはいえそこまでするとは到底考えられないだろ。だって俺がいつあのマンションに出かけて手紙を見つけるかなんて、相手の側からしたら見当もつかない事のはずだ。それこそ朝も、昼も、夜も、深夜だつて十分ありえる。実際俺があの手紙の元を訪れたのは事件から2ヶ月も経つてからだった。そのあいだずっと同じ場所で張り込んでいるなんて普通だったらできない。大人数の仲間がいたってそんなことはやらないだろう。なのに相手は10日後という期限を守ってきた」

おかしい。おかしすぎる。俺は何かを見逃している。

「何かおかしくないか？」

「どういうことです」小宮山の声色からは恐怖が感じられた。

頭の中でさまざまなことが交錯した。青島真二と再会した夜のこと。横須証券の乗っ取りを計画した時のこと。幹部5人の逮捕、そしてロイヤルマンション坂田で見た青い封筒、『羽鳥勇介様』・・・

そのとき羽鳥は全てを悟った。

「あの手紙の目的は、復讐じゃない」

ガチャリ、と拳銃の安全装置の外れる音が工場の中に響いた。羽鳥はようやく自分に向けられている銃口に気がついた。

「だから何度もやめたほうがいいって言ったんだ!!」

小宮山が、この世の物とは思えないような絶叫を上げた。

羽鳥はポケットから拳銃を取り出そうとしたが、遅かった。

銃声が炸裂して頭蓋が打ち砕かれたのを最後に、羽鳥は全ての意

識を失った。羽鳥は視界が暗くなるのを知覚し、続けざまにいくつもの銃声が鳴り響くのを聞きながら、永遠に覚めない眠りについて床に崩れ落ちた。

第3章(3) / 10

7月17日

「病院に運ばれたって？」

「ついっさつき。腕の骨を折られて・・・」

「原西、おまえは大丈夫なのかよ」

「大丈夫じゃないけど、岸本よりは」

原西が大きく咳き込んだ。雑音で音が割れる。

「一応手当てとかしてもらったらどうなんだ」

「めんどくさいからいいよ」

「財布、盗られたのか」

「ああ」歯軋りが伝わってきた。「クソツ、ホントついてねえ」

電話の向うから突然人が立ち上がって椅子が揺れる音と女の人の小さな声が聞こえた。おそらく岸本の母親だろう。どうですかと尋ねているのが、微かだが聞こえた。答える医者の方は病院の中で話していると思えないくらい大きくて、原西の持つ携帯電話にもしかり届いた。

骨折なので無事とはいえませんが、腕以外では特に問題はありません。

その後岸田の母親を慰める言葉が続いたが、原西の「岸田は無事みたいだぜ」という一言で遠くの声はかき消された。

「で、どこで襲われたんだよ」

「塾の帰りの、ほら、前にも一度通り魔があつたところだよ。通り魔だぞ、ただの通り魔。ちくしょう。かつあげまでするなんて聞いてねえぞ」

悔しそうに言っているけれど、言い方がおかしい。どこまでも能天気な奴だな、といつもなら笑って言い返しそうになるところだったけれど、今夜ばかりはさすがに笑うことができなかった。

一輝は指先で手紙を握り締めながら質問した。

「相手は何人くらいだったんだ」

「6人ぐらいだ。よく覚えてねえ。2人相手にかかってくるなんて、卑怯だろが」

かつあげってそういうもんだろ、とツツコム余裕もなく、一輝はさらに尋ねた。

「歳は」

「たぶん俺らと同じくらいだ」

「そいつら、何か変なこと言ってたか」

「まったく何でそんなこと聞くんだよ」

原西が陰悪にはね返してきた。体中を殴られて財布も取られ、気分最悪の中で、心配して電話をかけてきたはずの友達から突然意味の分からない質問をまくし立てられたらそれは怒るだろう。

「いや、わるい。なんでもないんだ」

「そうかよ」

とりあえず岸田のどこに行くから、と言って原西は通話を切った。

一輝が口を挟む間もないくらいに、あつという間に切られた。

俺もお前と同じくらい最悪の気分なんだよ。

受話器を置くと、母さんがすぐに岸田君たちはどうだったの、と聞いてきた。一輝はそれを適当に大丈夫みたいと言って居間を出ようとした。詳しく教えてくれと声をかけられたが、無視した。

「なによ、反抗期？」

背中からさっきの原西と同じ風に邪険に声をかけられたが、それも無視した。前までの母さんだったら、どんな時でもこんな風に荒れた口調で話すことはなかった。母さんは、父さんが逮捕されてこの小さなアパートに引っ越してからずっとこんな感じで機嫌が悪く、化粧もしなくなり、髪の毛をぼさつかせて、外見は10歳くらい老け込んでしまった。幸せな生活から突き落とされた人はどうなるか、一輝はこの2ヶ月近くの間ずっと思い知らされる羽目になった。しかし、それも今は慣れて何でもなかったが。

できるなら鍵をかけたかったが、築40年のボロアパートにはそんなものはなかった。一輝は母さんが入ってくる気配はないかと確かめてから、手に持った手紙を開いた。

第3章(4) / 10

三つ折にされた手紙が手のひらに落ちる。

手紙を開いて文面を見た。やはり、見間違えでもなんでもない。そこには最初に見たときとなんら変わらないことが書いてあった。

7月17日午後10時、お前と同じ塾に通う岸田洋一と原西敬介を襲った。嘘だと思ふのなら、明日の早朝ポストに2人の財布を入れておくから確かめる。

7月20日の午後10時に現金10万円を持って市川中学高等学校の校舎裏に來い。來なければ同じ手口でお前の学校の知り合いを襲い、そいつらにお前が谷雅夫、竹田耕太、大西遼平、三上卓、村上龍と何をしていたかを全て話す。

まさかいまさらになってこんなことが起こるとは思ってもいなかった。もつとも、1月はじめにメンバーを解散したときもこんな事態、全く想像すらしていなかった。メンバーの名前が漏れていた。そして少なくとも一輝に関しては住所まで知られている。

けれど誰がこんな事をしたのかは、考えてみるまでもなかった。一輝たちの名前、住所、そして今までやってきていたことを知っていて、且つこれだけの事をやれる人間は、1人しかいない。

一輝は怒りを抑えながら机の上の携帯電話を握り取った。そのときちょうど居間の電話が鳴り出して母さんが出たが、構わずメニューを開き、電話帳を並べ、問題の人物の名前を押して・・・

「一輝、電話よ。学校の友達から」

通話ボタンにかけかけた指が止まった。

「誰？」

「岸田君」

岸田は一輝とは違う学校だ。その上、今は骨折して病院にいる。

一輝はふすまを開けて部屋を出て、怪訝そうな表情をしている母さんから受話器を受け取った。無言で、何かが変だと伝えている。まさかとは思いなから受話器を耳元に当てた。不安感が胸の中で渦を巻いて広がり始めた。

「もしもし、岸田か？」

たつぷり5秒ぐらいが流れたかと思った。それくらいの間があった。「岸田？」

返ってきた声は、岸田でも、人ですらなかった。

「青島一輝だね」

キーキーと甲高い電子音がそう言った。ボイスチェンジャーを使っている。

「だれだ」

「君に手紙を送った、犯人さ。手紙はもう見ただろう？」

「どうして電話をかけてきた」

さりげなく横に視線を流すと、母さんがこちらを怪しげに見ていた。自分の心臓が大きく波打っているのが分かる。ここで話されたら、まずい。

「特に理由はないよ。暇だったからどうしてるかなって思って」

感情を感じさせない、平坦で抑揚のないしゃべり方だった。本当に人じゃないのではと錯覚してしまいそうだった。

「今忙しいからさ、後でまたかけてくれないか」

必死に平静を装った声を出した。

「いいじゃないか。ちよつと話さないか」

「後でもいいだろ」

「いやだね」

「何で今じゃなきゃいけないんだよ」

「言っただろ？暇なんだよ。君こそ何で忙しいんだい。教えてくれなきゃ、俺、切らないよ」

母さんはまだこつちを見ている。額を汗が流れ落ちて目に入った。考えようとしても、頭が凍ってしまったかのように働かない。間違

いない。相手はこっちの様子を知っていて話をしようとしている。

「頼むよ。宿題残ってるんだ」

「なんだ、宿題だったら後でもできるだろ。ほんの5分くらいだよ。話してもいいだろ」

だめだ。どんなに言ってもこいつは引きついてくる。

「いい加減にしろよ。もう切るからな」

「切ったらまたかけるよ」平坦な口調の中に、一瞬だけ感情が混じった。「分かるよね。同じ人から何度も電話がかかってきたらさすがに君のお母さんだって怪しむと思うよ」

声にこもっているのは、嘲りでも、怒りでも、馬鹿にしたようなあきれでもなかった。これは「なにをあせってるんだ？」

第3章(5) / 10

「あせってる？」鼻で笑う音が聞こえた。「どうして僕があせんなきゃいけないんだ」

横に座っていた母さんが立ち上がって、台所に戻っていった。喉につかえていた重りが軽くなった。

「そんなことするか」

「いい加減なことを言うなよ。あせらなきゃいけないのは君のほうだろ。このままだとまずいんじゃないかな。君が今までしてきたことが知れたら、君の周りの人たちはなんて言うかな」

またもや笑い声がこぼれた。冷ややかな空気が耳を伝ってくるようだった。

「まあ、普通の生活はできなくなると思うね。犯罪者の親子か。父親のほうは会社をつぶし、息子は夜な夜な盗みをはたらくろくでなし。おっと、これはこれで面白いかもしれない。君は父親のことをまだ誰にも言っていないんだろ。どうせならそのことも言いふらしてやろうか」

「やめろ」怒りと恐怖で受話器をつかんでいた手を握りしめた。全身の皮膚から冷や汗が吹き出た。

「家も引つ越さなきゃいけないるんじゃないか？最近また引つ越したばかりなんだろ」

「どうしてそんなことを知っているんだ」言いながら、空いているほうの手で拳を握った。当たり前だ。電話口で話している声の主が誰なのか、今はつきりした。

母さんに聞こえないように声を潜めた。「父さんのこともだ」

「さあね。自分で考えたら」

「じゃあ、その答えとやらを言ってやろうか」

鎌をかけてるんじゃないことを分からせるため、すごんでみせた。
「答え？」

「そう。お前がどうして父さんや、俺が竹田たちとしていたことを知っているのか」

「言ってみなよ」

電話の相手は考えの読めない、無表情な声に戻っている。

台所に視線をやった。流しから水の流れる音がする。

「お前は、大西だな」

確信を持って、言った。相手は何も言ってこない。凶星なのか、外れていてまたもや一輝を鼻で笑うつもりなのか、とにかく黙っている。

「俺達がしていたこと、父さんや俺の住んでるところを知ってるのは、あのメンバーだけだ。それに岸田たちを襲わせるのも、お前の付き合ってたっていう連中に手伝ってもらえばできた。そうじゃないか」

声ににじんでしまう自信のなさを隠そうとして、威嚇するようなこわばった言い方になってしまった。それでも相手は何一つ言葉を発してこない。一輝は電話の向こう側を見ることを強く望んだ。一体どんな顔をして聞いているのか、それが見れるのなら。

「無理やり解散させたから、その報復ってことか？」

電話口からはかすかなかなノイズの音が流れてくるだけだった。

「何とか言えよ」と言おうとした時だった。ノイズ以外の音が耳に入ってきた。一瞬、反論をしてきたのかと思ったが、聞こえてきたのは耳ざわりなボイスチェンジャーの声ではなかった。

「何がおかしいんだよ」

笑っている。一輝は耳を疑った。機械を通していない肉声、それだけじゃない。聞こえてくるのはどちらかと言えば柔らかくて弱弱しく、人を馬鹿にしたような高い声で、大西の太く大きな声とは似ても似つかなかった。

「やっぱりね。やっぱりそう思うよね。だけど残念ながらその回答は外れだ。そればかりか君はとんでもない人に濡れ衣を着せてる。」

そつだ。ちようどいいから大西君に電話してみなよ。きっと面白いことになる」

第3章（6） / 10

「どういう意味だ」

「電話してみなよ。そうすれば分かる」

そういった途端だった。どこからか、海外のロックのメロディーが流れてきた。くぐもった音は、一輝の部屋から鳴っているものと分かった。・・・携帯の着信音だ。

まさか、大西か？いや、そんなはずはない。たまたま大西の話をしていたところにこうも都合よく電話の鳴るはずがない。単なる思いこみだ。だいいち、大西は今電話の向うで話しているこの相手のはずだったのに。

「ちよつと待つてろ。電話を切るな」

一輝は受話器を床において立ち上がった。何がなんだかさっぱり分からない。頭が混乱している。あの電話の相手は大西じゃないのか？だったら誰がどうやってこんな事をできる。一輝たちがしてきたことを知っていて、かつ一輝の住所を知っている人間があの大西以外にいるのか？

いや、いた。一輝は自分の考えたことの意味に凍りついた。まさか、そんなことがあるだろうか。いいやありえない。

電話を取った。鳴り続く着信音。そして、非通知の着信番号が液晶に写っている。

通話ボタンを押した。

「もしもし」

「青島か。青島だな？」

「大西！」

大西だった。急いで居間に戻って受話器をもつ片方の耳に当てるが、切れてない。

「どうして俺の番号を知ってるんだ」

メンバーの携帯の電話番号は、あの日解散を決めたときに、互い

に全て消去することにしたのだ。一輝や谷たちの間につながりがあったと言つ痕跡を残さないためだ。実際に分かれ間際、消したということを目で確認して。

「メモを取っておいたんだ、何かあったときのために」

両耳を受話器に当ててるが、片方の声が片方から漏れてくることはなかった。

「どういうことだ。何かあったのか」

間が空いた。言おうか言うまいか迷っている。今日はもう十分悪いことがおきた。まだ何かおきるっていうのか？冗談じゃない。

「実は、脅されてるんだ。相手は俺達、達でして来たことを全て知ってるって言っている。手紙がポストの中に入ってた。なあどうする。ばれてるんだ何もかも」

ああ、最悪だ。

「俺もだよ。脅されてる」

「なに？」

「俺もだ。同じ手紙をもらった」

「嘘だろ」

「本当だ。なあ、お前じゃないんだろうな」

この際はつきりと言っておくべきだ。

「お前があの手紙を送ってきたんじゃないのか。全てをばらすと手紙に書いて仲間に俺の友達を襲ったんじゃないのか」

「ふざけるな。そんなわけないだろ！そもそもあいつら・・・お前の言う仲間とはとつくのとうに別れたんだ。何で青島がそんなことを知ってるのか知らないけどな」

「村上に聞いたんだ」

「あいつか」ちつと舌打ちする。「余計なこと言いやがって」

「今はそんなことどうだっていいだろ。そうだ、竹田達には電話したのか」

「したさ。けど誰も出ない。みんな番号を変えていたんだ。三上が残っているから、4番目のお前にようやくつながったんだ。どうす

るつもりだ。青島も金を出すよう書かれているんだろ」

「残念ながらその通りだ。10万円。たいそう欲張りなことだ」

「青島のほうが高いな。俺は5万だ」

「安く見られたな」

「黙ってる」

「それより実は、特別ゲストにつながってるんだ」

「誰だよ」

「手紙を送ってきた犯人」

大西は大げさに驚いてみせた。

「何だつて?!」

「本当だ。今からちよつと話してみる」

携帯電話を顔から話して家の電話に口を近づけた。

「待たせたな」

「いや、いいよ。どうだい。面白いことになってるだろう」ボイス
チェンジャーに戻っている。

「ホント、笑えるよ」怒りに歯をかみ締めながら、一輝は言った。

「なあ、一つ頼まれてくれるか」

「なんなりと」

馬鹿にしたような含み笑いは機械を通した声でも伝わった。

「アーって言っていて欲しいんだ」できるだけ卑屈っぽく聞こえる
ように言った。

「ふざけてるのか」

「頼むよ。そしたら何でも要求どおりにする。別にどうってことな
いだろ」

「・・・まあ、いいよ」

アーと言う声が電話口から流れ出した。一輝は電話越しにあざ笑
ってやりながら、すかさず携帯電話を取った。

「大西」

「なんだ」

もう、疑いようがなかった。手紙を送って、一輝達を脅迫してい

るのは大西じゃない。大西の言っていることは本当だ。

「聞こえるか。こいつだ」

そういつて家の電話の受話器を携帯にあてた。

「何だこれは」

「ご本人の声だよ」

「なんだか間抜けそうだな。ずっとアーって言ってるぞ」大西が怪訝そうに言った。「俺達はこんな奴に脅されてるのか」

「そうらしいな」

第3章（7） / 10

「もういいだろう。とにかく分かってるな。金を持ってこなかったら全てをばらして、お前達が二度と人前を歩けないようにしてやる。いや、こんな話を話されれば、いやでも人前に出たくなくなるかな？」

「だけど、金なんてない」

「君は仮にも大会社の経営を勤めた男の息子だろ。それぐらい何とかしろよ。10万円で我慢してやったのはむしろ情け深いくらいだよ。それに君は親に頼んなくたって自分の力でやれるだろう」

思わず息を呑んだ。無意識のうちに後ろへと目を移し、台所の母さんの様子を伺った。水場前のカーテン越しに動いている影が見える。

「それは・・・盗めってことか」

「それ以外にあるか？」

容赦なく、言う。

「できるわけないだろう。もうやめたんだ。それだけじゃない、10万集めるためにどれだけやらなきゃいけないと思ってるんだ。それこそ」

「ああ。それこそかなりの人数を相手にしなきゃならないだろうな。場合によっちゃ捕まることも十分に考えられる」

「無理に決まってるだろ。期日まであと何日だ。自分で言ったことだろ。それとも、延ばしてくるって言うのか」

言うてから、一輝は自分がその気になっていることに気づいてぞつとした。やはり、俺は心の奥底の部分ではあの頃から何も変わっていないのだろうか。もつとも、1年近い期間は10数年の人生の中ではあまりにも長く、そう簡単に抜けきれるものでもないのかもしれない。けれど、いつまでそれが続くのだろうか。一輝はあんなことをしながらも、どこかで、いつかは自然としなくなるだろうと

思っていた。だからこそ平気でやれていたという所があった。あくまで、人生の中の一部、一過性の嵐のようなものだと思っていたから。

けど、本当にそうなのか？人は、そんな簡単に過去から切り離せるような物なのだろうか。

一輝は今はじめて自分の考えていることが単なる思い込みなのだと気づいた。テレビをつければ簡単に見つかるような人生の転機、起死回生のストーリー、そんなものは所詮想像上の物でしかないのだ。過去は常に人にまわりつき続ける。一度に切り離せる物では決してない。俺は無意識のうちに、テレビや小説でしかありえないような都合のいい理屈だけを信じていたのだ。人は簡単には変わらない。体の中に降り積もった欲望は、身を潜めることはあるけど、勝手になくなることはない。一度押し上げられてしまった欲望のラインは自然には下がらない・・・

「君はもう戻れないんだよ。自分がそういうことをし始めたときに考えなかったのか。自分のしていることはどういうことかってって少なくとも、普通に考えれば分かるさ。中学生の坊主が手を出すには早すぎた。そして、一生、君は自らの責任を負って生きるんだ。死ぬまで。一生。罪を消すことはできない。人生に取り返しはつかないんだ。僕から逃げることなんてできないよ。馬鹿だよ、君は」
こらえきれないと言う風にこみ上げる笑いが相手の声について出てきた。機械がその声を写して一輝の鼓膜にいつまでも、いつまでも響いている。

俺は馬鹿だ。本当に、馬鹿だ。もうどうしようもない。俺は、人生をなめていた。

「やめろ」

は？と妙に甲高い機械の声が応えた。

「やめろ！！」

一瞬、空気が凍りついた。流しの水が流れっぱなしで音を立て、カーテン越しの影が固まった。笑いが受話器の向うに吸い込まれた。

もうやめろ。言うな。俺にこれ以上聞かせるな。今は、まだ、やめろ。

「ははっ」

一度消えた笑いが炸裂した。

「ははははっ、笑える。マジで笑える。何だ？今までなんだかんだで余裕ぶっこいててさ、いまさら『やめろ』だって？いざきつくなると、今度は現実逃避か？笑わせんじゃねえよ。君ってどんだけ自己受話器が、鋭い音を立てて電話に叩きつけられた。」

大西が何か言っている。どうなったのか聞いているのだろうか。一輝はそれも切った。

何も無い。何も聞こえない。何も見えない。何も、分からない。もついいのだ、どうだって。何だってなるようになる。だから、俺にできることなんてない。考えるのはやめた。

考えたくなかった。

第3章(8) / 11

7月18日

とんでもないニュースが飛び込んできた。

その日前田はいつもよりも遅刻して羽間出版本社についていた。

前日は小学校の頃の友達との同窓会で夜中の2時頃まで飲んでいて、家に帰ったのは3時近くだったのだ。目が覚めた時にはもう9時過ぎで、朝のニュースは終わり、テレビには主婦にお徳情報を伝える番組くらいしかやっていない時間だ。電源の切れた携帯電話には宮元からの冷やかしのメールがたまっていた。

あわてて着替えて電話もせずに家を飛び出して電車に乗った。会社には知らせるようなことをする必要はなかった。何しろ自分の時間は自分で考えて使えるというのが会社のモットーなのだから、電話をして手間を取らせるくらいなら何も言わずに遅れたほうがいいというわけだ。一応会社なのだからそれくらいの社員管理はしたほうがいいのではないかとも思ったこともあったが、取材やら何やらで忙しくなるうちにそんなものは不要のだと分かってきた。むしろ会社としては残業代をやる必要がなくなつて都合がいいらしい。

急いでいたから新聞も読まなかったし、駅中のコンビニにある新聞の大見出しを目にすることもなかった。

だから、会社についてはじめて前田はそれを知った。

「一体、どうして」

「横須証券の社員の中に幹部のしていることを知っていた人間がいたんだ」

「だから、殺した？そこまですることか？」

「犯罪者のすることなんて分からないだろ」

犯罪者。確かにそうだけれども、横須証券の役員だって人間だ。いくらなんでも殺人とは。家族をネタに脅すとかもつと他に手はあ

つたんじゃないのか

横須証券の役員6人が、非指定暴力団に社員の殺害を依頼していた。いや、少なくとも横須証券とつながりのあった暴力団が横須証券の社員を殺害していたというニュースは、どの新聞にも一面大見出しで飾られていた。

ビルの内側の凶行。金銭欲と殺意。週刊誌はおどろおどろしい記事を載せておりたて、日本企業の裏側が露見したただのまくし立てた。金のためなら犯罪も、殺人でさえもいとわない。日本人の道德観念の崩壊。

殺害されていたと分かったのは少なくとも2人、名前は堂本弘雅と田中正志。堂本弘雅は広報部の部長で去年の4月から、田中正志は経理部の部長で、今年の3月から行方不明になっていた。堂本弘雅は所帯持ちで、田中正志のほうは独身だった。今月2日、田中正志の死体が富山県の山中で見つかり、所持品の免許証などから本人の確認が取れた。死体は土の下に埋められており腐乱もひどかったが、全身に強い打撲痕とその衝撃によると見られる頭蓋骨のひび等からそれが死因なのだと分かり、一度自動車か何かに轢かれて、それから山中に隠されたのだと推測された。

そして死体の発見後に役員6人を事情聴取し、田中正志の殺害を6人が知っていたのかと追求すると、1人がそれを認めたのだった。その後の調査でさらに堂本弘雅が行方不明になっていることが判明し、その時期が横須証券の不正取引の始まった以降のものだと分かり、同日役員の一人が堂本の死体が福岡県の山中に埋まっているということ暴露したのだ。役員は埋められた場所について詳しいことは知らず、殺害や死体遺棄は暴力団員が行ったものだという見方が強かった。

そして今日の朝、警察から田中正志の殺遺体の発見と堂本弘雅が殺害された可能性があるという発表がなされた。

マスコミにとっては幸いにも事件そのもののおきたのがわずか2ヶ月前だったので、このような大々的な報道になったということだ

った。

どうして殺人だったのか。動機についてはまだ何の供述も得られていなかった。というよりも、役員6人は殺害についての自分達の関与には全面否定しているのだ。

「俺達とは根本的に考え方が違うんだよ。犯罪者だぞ。何を考えていたかなんて分かりはしないさ」

宮元の口調にいつものような柔らかさはなかった。殺人の話をするときの宮元はいつもそうだった。なんで聞いてみたことがあったが、適当にぼかされて宮本は何も教えてくれなかった。

「そういうものか？」

「そうだよ」

絶対だ、と言い切った。

「でないなら、前田には殺人者の考えが分かるのか？」

そういう風にいわれたら、なんて答えたらいいか分からないじゃないか。

けど、確かにいわれてみれば、人を殺す人間の考えなんて前田には分からなかった。金のために人を殺すなんてのはさすがにやろうとは思わない。

だからこそ、金のために人を殺して見せた横須証券の役員の気持ちに分からないのだ。金のためだけとは言いい切れないかもしれない。事が露見すれば、自分の社会的地位、その後の人生が全て崩壊するのだ。けれどもそれで人を殺すか。もっと他にも手はあっただろうに。

それとも本当に、6人は殺人には関与していないのか。

第3章（9） / 11

「そういえば、おまえ横須証券について調べてたのはどうなったんだ。何か分かったか？」

「まあ、あれから少しだけ」

分かったといえば分かったが、事件そのものとは全く関係のなさそうなことだった。あれから前田は青島真二の家に行っていた。

「もうそろそろ潮時かな」

「なんだ、もうやめるのか」

「もう少しだけ調べるよ。それとも、今回のことで加持さんたちも横須証券の記事を書こうって気になってくれたならまた張り切るけど・・・」

「じゃあ諦めるんだな」

「何とかなんないものかね」

「無理だつて。なんだったら自分で殺された2人について調べてみればいいじゃないかよ」

「またか？もうごめんだよ。一人じゃ限界があるつて。前回のことで懲りたんだ」

結局あれだけ時間をかけても、ほとんど何の進展もなかったのだ。今回、殺人事件の調査がつとまるとは思えなかった。

「1人じゃなきゃ、やるのか？」

宮元が怪しげに笑った

「なんだよ」

「いい奴を知ってるんだ。別の出版社の知り合いだ。もしかしたらそいつが取材についていろいろ教えてくれるかもしれない。会ってみるか？」

「どこの出版社だよ」

「出版だ」

「え」大会社じゃないか「そんなところの社員が手伝ってくれるの

か？」

「まあ、友達のよしみてやつた」

何がおかしいのか、宮元は始終ニヤニヤ笑っている。

「どうだ、話をつけてやつてもいいんだぜ」

「ああたのむ」

「よし、承った。早速電話しといてやるよ」

そう言つて宮元はすぐに携帯電話を取り出した。

「おい、こんな時間に電話してもいいのかよ。相手は 出版なん
だろ。忙しいんじゃないのか」

「フリーライターなんだ。たぶん今の時間は自宅にいる」

フリーライターって。おい、まさか。

「お察しの通り」

「ちよつと、やめろ」

「もう遅いぜ」

携帯電話を取り上げようとしたが、その通り、もう遅かった。宮元は机の間を縫つて前田から逃げ出していた。

「どなたなんですか」

後輩の亀井が、こちらの様子を見て面白そうに聞いてきた。無視して前田を追いかけてようとしたが、ご丁寧にも前田は大声で説明をしてくれた。

「こいつの昔の知り合いさ」

「言つな、やめろ」

ここにいる全員に暴露するつもりか。

「もう2年近く会っていないらしいんだけど、俺はこいつに紹介されて、それから何度か連絡を取っていて」

腕を伸ばしたが、携帯にはかからずに空振りした。

「前田さんは何で連絡を取っていないんですか？」

亀井は容赦ない質問をぶつけてくる。

「喧嘩してな。別れたんだよ」

「別れたってまさか・・・元カノですか」

言いやがった。おっしやる通り佐山翔子と俺は2年前まで付き合
っていた。

亀井、後で表に出ろ。

第3章（10） / 12

7月20日

その日はあいにくの雨だった。天気予報では一日中曇り空と言っていたのに、午後になって小雨が降り始め、それからだんだんと雨脚は強くなっていった。

6時間目の終わりごろ、今日は傘を持ってきてないからぬれて帰ることになるな、と思いながら一輝はぼんやりと窓から外を見ていた。教科書もノートもぐしょぐしょになるかもしれない。

ノートはとっていたけれど、一輝はろくに授業を聞く気がなかった。どうせ聞いたって、頭はどこかに飛んでいて、まともに耳に入ってこないのだ。2日前から調子が悪かったけれども、昨日からは気力を出すことさえも諦めていた。全てが悪い方向に進んでいる。なんとなく理解できているのはそれくらいだった。

横須証券内で殺人があったというニュースを聞いた時、一輝は一瞬、何かの冗談じゃないかと思った。証券取引法違反の時はそんなことなかったのに、今度は目の前で起きていることを信じることはできなかった。あの時はまだ予感があったからかもしれない。前の日に聞いた父さんのおかしな行動や、証券会社に勤めているんだ、と言っ日ごろからの身構えが。

けれど今回は違った。少なくとも一輝は、親が殺人に絡んでいるところなど想像したことのないような普通の高校生だった。だから、家に帰って、NHKのニュースのテロップに“横須証券役員が殺人に関与？”の文字が流れ、事件の詳細がキャスターの口から語られて6人の顔写真が映し出されているのを見た途端、体が固まってしまった。例の件を脅される電話が来たという昨日の今日で、今度は父親が人殺しをするなんてとてもじゃないが信じられなかった。人生そんなに不幸に出来上がっているものなのだろうか。悪夢とさ

え思った。それくらいに実感が無かった。

母さんがそのニュースを見ながら何事も無かったかのように雑誌を読んでいたのも、一輝に夢を見ているかのような錯覚を起こさせた原因の一つかもしれない。

母さんに声をかけたが、返事はなかった。朝のニュースを見ていたから、殺人事件のことはとづくに知っていたのだろう。一輝は何も言わずに自分の部屋に戻った。

何もかもがどうでもよかった。なるようになればいいのだ。俺にできることなんて何も無い。そう思ってこの2日間をぼんやりと過ごしてきた。

10万円だけはお年玉や、今までの貯金を全て足して何とかなかったけれど、それで問題が解決したわけじゃないのは一輝にも分かっていた。奴は、俺をずっと脅し続けることができるのだ。10万円を出してもそれで終わりじゃない。いつだって、それこそ俺が人とかかわりを断ち切るか、泥棒話が笑って流せるくらいの時間が経つまでずっとこの脅しは有効だ。それまでに10万円が10回、それくらいで済めばまだいいほうかもしれない。奴は俺が青島真二の息子だということを知っている。そのうち一回に100万円要求してくるような事だってありうる。そしたら俺はどうなる。また盗むのか。親の金を？いくらなんでも、そんなことをしてはれないはずがない。第一、盗む金が残っているかどうか分からないのだ。母さんはまだ意地を張って父さんの持っていたたくわえだけで生活していこうとしているし、そのたくわえがいつなくなるかも分からない。奴らにそんな言い訳は通じない。あくまで、出すものは出させようとしてくる。もし出さなかったら、どうなる？面白半分にあることを暴露されたら・・・俺は、おしまいだ。

そうして、今日が来た。金を渡す約束の日だ。

今日しかない。今日しか状況を打開するチャンスはない。それは分かっている。分かっているけど、どうしようもないのだ。何の手のうちようもない。俺にできることなんて、ない。

一輝は、ぼんやりと窓の外の遠くのビルを眺めた。自分の人生が暗闇に転落していく。実感のないままに、そんなことを考えていた。

昨日と同じく、今日も、気づけば家に帰っていた。線の××方面に乗り、12駅行ったところが一輝の家の最寄り駅だった。ロイヤルマンション坂田に住んでいたときと違う路線で、前よりもっと混んでいて、さらには乗車時間が30分以上増えていた。引越すときになるべく安い場所を選ばなければならなかったのだ、どうしても都心の東京から遠くならざるをえなかったのだ。

部活が終わって、家に着いたのは7時過ぎだった。今日は剣道でも散々だった。集中力がなかったせいだ。久々のトーナメントでの練習試合で、一輝は結局少しも押せないままストレート負けした。

約束の時間まで、あと3時間がある。一輝は喉を通らない夕飯をほおばりながら今晚の手はずを考えた。母さんには、ちよつと近くのTUTAYAに出かけてくると言えば家をでるのは何とかなる。そしたらあとは小学校の校舎裏に自転車で行って、奴が来るのを待つ。

その先はどうするか。考えても、いい案なんて浮かばなかった。決死の覚悟で殴りかかるか。いや、その前に相手が誰なのか、本当にあいつなのかどうかを確かめることだ。解決の糸口もあるとするならそれだけだ。あいつを、あいつらをどうやって説得するのか。

第3章（11）／12（前書き）

前話の更新からずいぶん時間がたってしまいすいませんでした。

加えて、前話「第3章（10）／12」の末尾に一部追加しておきました。

第3章（11） / 12

雨が降ったせいか外はいつもよりも多少は涼しかった。ただ、その分湿気はひどかった。自転車に乗っていても、爽やかな風どころかむしむしとした空気に全身を包まれているような感覚しかなかった。自転車を走らせながらまわりを観察していたけれど辺りには全然人影が見当たらなかった。せめて外に人がいて、あいつらのやろうとしていることを目撃しているようなら今日の待ち合わせはなくなるんじゃないかと思ったが、それは無理そうだ。

一輝はポケットに入った10万円に封筒の重みを確かめて目的の場所へと向かった。

もう、いまさら考えるようなことはなかった。ここまできたら、実際あいつらと顔をあわせて話すしかない。言いたいことはたくさんあった。何でこんな事をしたのか、いつから計画していたことなのか、どうして俺なのか。

聞いてみなければ、もう俺には何も分からないのだ。1年間共に罪を重ねてきた仲間、遠く向うで、俺の敵となってしまったのだから。

どうしてこんな事をするのか、今したいのは、そう竹田達に尋ねることただそれだけだった。

校舎裏には、誰もいなかった。

その代わり、フェンスに1枚の紙切れが貼ってあった。暗く見えなかったと言ってこのまま帰ったとしても、あいつらに言い訳できてしまいそうなくらい小さな紙切れだったけど、一輝はそれを手にとることにした。近くに電灯があったのでなんとか文字は読むことができた。ここに10万円を置いていくように書いてある。間違いない。誰か一人は、一輝がここに来て金を置いていくのを見張っている。そんな場所はこの近くでは学校の敷地の中しかなかった。「でてこいよ。竹田か、谷か？それとも・・・」

「気づいてたのか」

聞こえてきた足音は、フェンスの向こう側からだった。

「竹田か」

「そうさ」竹田の声は無表情だった。一昨日ボイスチェンジャーを使ってかけてきた奴と同じ、無表情な声だった。「おい、村上、三上、谷、出てきても構わないとさ」

途端に、四方から自転車がペダルをこぐ音が近づいてきた。一輝がやってきたほうの道から谷が、その反対から村上と三上の姿が現れた。

「久しぶりだな、青島」

谷が冷めた口調でそういった。

「お前達が全部していたのか」

「そうだ」

「一体いつから」

「最初からさ。最初から、お前が力モになることは決まっていた」

「どうしてだ」

「金があるからさ」

「そういうことだよ」

いつの間にか竹田が一輝の後ろでフェンスを乗り越えようとしていた。そのまま竹田は道路へと飛び降りた。

「青島、金を出せよ」

「どうしてこんな事をするんだ」

「いいから黙って出せ。俺達のやってきたことを言いふらされたくはないだろ」

「一緒にやってきたんじゃないか」

「黙って出せって言ってるんだよ。聞こえないのかボケ野郎が」

一輝の知っている竹田ではない、と思った。これが本当の竹田で、今までの姿はわざと着飾って見せていた物なのか。

そうではない、と思い直した。竹田自体は変わっていないのだ。

村上も、三上も、谷も。変わったのは俺だ。今までは仲間だった青

島一輝は、もう、ただの金ずるにしか過ぎなくなったのだ。ただの金ずると接するなら、どんなにぞんざいだって構わない。ただの唐突に怒りが湧き上がってきた。

第3章（12） / 12

「何でこんな事をするんだ」

竹田は答えなかった。答える代わりに、大きく一つため息をついてみせて、それから一輝の顔を見下ろすように眺めた。その表情には、強者が弱者を哀れむかのような優越感が満ちていた。

「青島、お前は大きな誤解をしているよ。お前はもう俺達の仲間じゃないんだ。ただの力モさ。だから俺達がこうしてお前を脅しているのに理由なんて要らないんだ。分かるか？」

「力モ・だと」

「そうだ。力モ。ただの力モ。利用するだけして、搾り取られるだけ搾り取られて、それでお終いの力モだ。分かったならさっさと金を」

「ふざけるな！！」

竹田が言い終わらないうちに、一輝は右手のこぶしで竹田の顔面を殴りつけていた。殴ったこぶしに顔の骨があたって痛みが走り、遅れて鈍い音が辺りに反響した。

竹田がよろめきながら何とか体を支えて足を踏ん張った。地面に何かが滴り落ちている。電灯の光による反射で一輝はそれが竹田の赤い血液なのだと分かった。

生まれて初めて人を殴った。頭の中が、まるで熱にうなされているかのように熱い。こぶしの先がジンジンと痛かった。

「やめろ、青島！」

谷が叫んでいる。

“青島”だと？お前はもう俺の仲間でもなんでもないんだ。軽々しく呼び捨てにするな。

そう言っただけなのに、声がでていなかった。

自分の息が妙に荒くなっていた。走ったわけでもないのに、体まで小刻みに震えていた。

ゆらりと、そういう言葉がぴたりと合うような動きでそれまでうつむいて鼻を押さえていた竹田が、ゆっくりと体を起こした。夏の蒸し暑い夜の空気が一瞬凍りついた。谷達が反射的に身構えて、一輝も両手を即座に持ち上げた。

竹田は口元を真つ赤な鼻血でぬらしていた。鼻からはまだまだ血が流れ続けてノースリーブのＴシャツに赤いしみが広がっている。血の色が電灯の光を受けて映えていた。

そして、その顔には満面の笑みがあつた。

「本当に愚かだよ。青島一輝」

骨を打ちつける鈍い音があたりに炸裂した。

「やめろ！」

後ろから村上とが飛び掛つて体を押さえつけたが、一輝は続けざまに左手で竹田を殴りつけた。今度は右腕を繰り出そうとしたが、抑えつけられたので弱弱いパンチにしかならなかった。それでも一輝はやめなかった。足を振り上げて、スニーカーの先で腹のど真ん中に振り入れる。足をつかんでくる手を振りほどいてひたすら蹴り続けた。数人のこぶしに頭を殴りつけられて自分が倒れるまで、ウツとかグツと唸って両腕で体をかばいながら地面に崩れ落ちていく竹田を一輝は力の限りで殴るのをやめなかった。

「やめろ、青島！死んじまう！」

渾身の蹴りが竹田の頭を直撃し、竹田は後ろへと吹き飛んでコンクリートの上に崩れ落ちた。あたり一面に血が飛び散って赤い斑点がそこら中に広がっている。か弱い息使いをかすかにもらしながら、竹田が体を丸めてうずくまり、体をぴくぴくと痙攣させていた。

「このヤロウ！」

何がおきたのか分からなかったが、気づいた時には一輝は地面に体を叩きつけられていた。数秒遅れて首筋に割れるような痛みを感じて殴られたのに気づくと、続けざまに蹴りが腹をめがけて入ってきていた。両腕で体をかばおうとしたが意味がなかった。ところ構わず、スニーカーが全身を蹴りつけ、踏みつけ、転がされた。体中

に痛みが迸って、目の前が真っ白に眩み、その視界にもスニーカーが飛び込んでくる。

左腕に電撃が走り、一輝は絶叫を上げた。が、かすれた声が口からこぼれただけだった。腕がバーナーで焼かれているのかと思った。痛みの信号が壊れている。いたい、と呻いていた。骨が折れたのだ。辺りに、荒い呼吸の音がいくつも聞こえている。肉を打ち付ける音がやんでいた。引いていけない激痛のせいで、しばらく経つまで一輝は3人が殴るのをやめていることに気づかなかった。

耳元に地面を踏む靴の音が聞こえた。

「これは、俺達に逆らった罰だ」

誰かが話している。誰が言ったのか分からなかった。

第3章（13） / 12

「腕が…」

「折れてるよ」

息切れた声で谷がはき捨てた。

電灯の逆行を浴びて、3人が覗き込むようにこちらを見下ろしていた。怖いとはじめて思った。殴られるかどうか、見逃してもらえるのかどうか、このまま家に帰ることができるのか、その全てをこの3人が決めているということに、一輝は情けないくらいに恐怖が湧き上がってくるのを感じた。瞼からあふれ出てくる涙もとめることができなかった。情けなかった。恥ずかしくてしかたなかった。けれどそれ以上に恐怖が全身を包み込んで離れなかった。

意味がないと分かっているのに、一輝は折れていないほうの右手を伸ばして、必死に谷達から逃れようと体を引きずった。体が地面をこすって揺れると左腕が悲鳴を上げてそれ以上進むことができなかった。痛みで息が速くなった。滴り落ちる鼻水も止まらずに氣道を塞ぎ、余計に呼吸を苦しくした。

もついい。10万だって、この先の人生だって、この痛みと恐怖から遠ざかれるのだったら何もいらぬ。頼むからやめてくれ。頼むから…

「金を出せよ。おい。まだこれでも懲りないってか？」

「分かったから。やるから。幾らだってやるから…」

そうかよ、という谷はぐつと顔を近づけて、胸倉をつかんで一輝の体を持ち上げた。腕に激痛が走って悲鳴が口から漏れたが、谷の手は構わずに上着に内ポケットをまさぐった。10万円の入った封筒がするりとぬかれた。

「馬鹿な奴だな、お前も。おとなしく渡してれば何にもないってのに」

服をつかんでいた手が離れて、折れた腕から体が地面に倒れた。

絶叫が夜道に溢れた。

「これだけ大声を出せば誰かがパトカーでも呼んでくれるだろうな」
皮肉な笑いを浮かべて、谷は残りの二人に肩を支えられていた竹田のもとへ歩み寄った。

涙で視界が歪んでいたが、竹田がこっちをにらみつけているのだけははっきり見えた。顔についた血が街灯に反射して不気味な赤い色をしていた。

竹田は2人に支えられて一輝に近づいてきた。そして、一輝の前に来ると立ち止まった。

「青島、これだけは言っとくぞ」竹田が真つ黒な目でこちらを覗きながら言った。「お前は俺達のことをただの犯罪者で、頭の狂った冷酷な人間だと思っているかもしれないけどな、それはお前だって一緒なんだよ。俺達がお前を力モにしてなければ、お前だって都合のいい誰かに同じようなことをしていたんだよ。何でだか分かるか？

俺達は今もう、今までみたいなケチな犯罪じゃ我慢できなくなってるんだよ。もっと刺激のある、もっと大きい、もっと完璧な犯罪じゃないと、今の俺達は満たされない。お前だって思ってるだろ。ごまかしはきかない。お前とは同じ道を歩いてきたから分かる。

別に、欲が膨れ上がったんじゃない。欲はいつだって同じだけある。上がりも下がりもしないさ。変わったのは立っている位置だ。

ラインだよ。ラインが上がったんだ」

ライン…

「ラインは自然には下がらない。痛みを知るまで、ひたすら上がり続ける…」

遠くから甲高い機械音が響いてきて、一輝の耳に入った。拡声器が道を譲るようと言っていた。

「お前はある意味幸福だよ。もう、この火車から降りられるんだ」
そう言ったのを最後に竹田達は背を向けて一輝から遠ざかっていった。

後には少しずつ近づいてくるサイレンの音が残っているだけだっ

た。

第3章（14） / 13

7月24日

待ち合わせの場所は××駅だった。羽間出版の最寄り駅であり、まだつきあっていたころ、佐山翔子と初めてデートをした駅でもあった。待ち合わせ場所をここに指定したのは宮本だったが、最初に翔子の勤める出版社の元最寄り駅にしようと言ったところ、休日なのにいつも行っている駅になって降りたくないと本人に断られたら、そのなりゆきで××駅に決まったらしい。はじめてのデートの時と今日の待ち合わせが同じ駅になったのを知ったときはまさか宮元が仕組んだんじゃないかと疑ったが、そうではないと分かると今度は逆に偶然の皮肉さを呪わずにはいられなかった。

何もこんな時じゃなくつてもいいのに。

よっぽど場所を変えるように頼もうかと思ったけれど、やめた。どちらにしたって気まずいことこの上ない面会なのに、わざわざ手間をかけるような気が起こらなかったのだ。

宮元には何とか一緒に来てくれるようにと説得できた。もともとこちらが勝手に申しつけた面会で、後から断るのも悪いと思ったし、だからといって2人だけで会う気はさらさらなかったのだ。

けれど、なんといつても一番分らないのが翔子は何を考えているのか、ということだった。

翔子は宮元と今でも多少連絡を取り合っていたから、はじめのうちは、友達のよしみという意味で約束を取り付けてくれたのかと思っただ。そして実際、彼女の割り切った性格からしてもそれはごく自然なことのように思っていた。

けれど後々になって、今度は別の考えが頭をもたげるようになってきた。正直なことを言えば、前田は未練が全くないと言うわけではない。つまりそういうことだった。

だから、宮元と一緒に来るよう誘ってから、密かに後悔したりもした。もつとも、今日になってはそのほかない希望も、既に後の祭りだ。

駅の構内は休日なのに人ごみでごった返しになっていた。10分前に場所に着いたけれど、2人ともまだ来ていなかった。暇つぶしに本を読んだりする気にもなれず、前田は人ごみの中を待ち合わせをしている人たちの間に立って改札の向うを見ながら翔子たちを待つことにした。

ちょうどそのときだった。ポケットの携帯がなった。取り出してみると、宮元からの電話だった。

「わるいな。今日は行けそうもないわ」

「は？」

唐突で、言葉が出てこなかった。

「急の用が入ったんだ。待ち合わせは2人でしてくれ。いま佐山にもメール送ったから」

「ちよつと待てよ。何でこんな直前に言ってくるんだよ！」

「こうでもしないとおまえ、2人きりで会おうとなんてしないだろ。あのさ、前田ってそういう後手なところがあるからいけないんだよ」

「いや、っていうか俺達一度別れてるんだぞ」

「だからこうしてもういちど関係を取り直す機会を提供したんじゃないか」

そんなこと頼んだおぼえはないってのに。

「お前なあ……」

続きを言おうとした口が固まってしまった。

佐山翔子が改札の向うに姿を現した。

第3章（15） / 13

「翔子…」氣まずい。あまりにも氣まずかった。なんて事してくれ
たんだ宮元！！

「あれ、宮元は？」

「いや、実は…」

図らずも、しどろもどろの声しかでてこなかった。なんていって
もこんなシチュエーションは全く想定の範囲外で、当然2人だけで
会話をする気構えなんて少しも用意していなかったのだ。土台不器
用な俺に、いきなりこんな場面を攻略できるはずがない。

「遅刻？」

明らかに距離をとろうとしているようなしゃべり方だ。

「違うんだ。俺もついさっき聞かされたところんだけど、あいつ急
に用事が入ったらしくて今日来れないって…」

「え！そんなこと聞いてないよ」

翔子の目に、明らかに疑いが込められている。まさか、俺と宮元
が共謀してこんな場面を作ったのだと思ってるんじゃないだろうな。
冗談じゃなかった。だまされたのは俺のほうなんだ。

「今聞いたばつかなんだって。電話もまだつながって」

差し出そうとした携帯電話はとくに切られたあとだった。

「ない」

「…そう。じゃあ仕方ないか」

翔子は諦め顔でうなずいた。

「宮元だからこんなことなんじゃないかってうすうす考えてたけど、
まさか本当に実行してくるとはね。後であつたらボコボコにしてや
るわ」

翔子が口になると冗談に聞こえなかった。付き合つて分かったこ
とだが、翔子は見かけとは裏腹にかなり気が強い。

「それで、これからどうするの？一応資料やら何やらはここにある

けれど」

「悪いな、手間かけさせちゃって」

「いいの別に。これ、会社の同僚が調べた物なんだけどもう使わな
いってことらしいから」

いまさら帰るわけにもいかない。

前田と翔子はとりあえず駅中の喫茶店で話をすることにした。

「これが田中正志の履歴書。生まれは山梨県の市。学歴は…ま
あ、普通の学生って所ね。23歳の時に横須証券に入社してる。ん
でもって28歳の時に東京に引っ越し。死亡したとされているのは
今年だから、45歳まで22年間勤務していたってことになるわ」
「22年か。それで会社での地位は？」

「広報部の部長」

「とすると、上層部の、小暮や青島との接触は十分に考えられる」

「それで会社の不正を知って、口封じに殺された」

「と考えると自然だけど、果たしてそれだけで殺人までするかね。

言わないように念を押しておけば済む話じゃないの？」

「それ以外にどんな理由が考えられるのよ」

「内部告発をしようとしたとか」

「内部告発？でも、そんなことしたら会社はもうお終いじゃない。

自分の首を絞めるようなもんよ」

「そうか…。じゃあ、田中正志が特別正義感の強い人間だったとか」

翔子はふつと鼻で笑った。

「なんかおかしいこと言った？」

「22年も会社勤めをして、まだ正義感なんて持つてる人間なんて
いるわけない」

「きついことをおっしゃいますな」

「だって普通に考えたらおかしいよ。正義感が全くないと言うわけ
じゃないけど、目先の危険を避けることと正義感のどっちをとるっ
て言われたら、普通の人は前者だと思う。私も当然そうよ」

「まだ社会に出てから5年しかたってないのに？」

「6年よ。それにうちみたいな業界は人を腐敗させるのが早いの」
「確かにそうらしい。前より言うことが辛辣になってる」
丸めた資料が飛んできた。

「くだらないこと言っていないで、次は堂本弘雅の資料。えーと、こつちも23歳の時に入社だけど、田中正志よりは8歳も年下ね。出身地は同じ山梨県。30歳の時に東京に引っ越してる」

「とすると田中正志と堂本弘雅の2人は同じ年に東京に引っ越してるのか」

「そうみたい。どうも横須証券の本社はもともと山梨県にあつてそれから東京に越してきたらしいから、そのときに2人は東京に引っ越したみたいね。ついでに1部に上場したのはそれから7年後」

「ちよつと待った。これは？」前田は堂本弘雅の履歴書の小学校の頃の欄を指した。「何度も引越してるみたいだけど」

「さあ、なんでしょうね。親の仕事の都合とか？」

「それにしてもこの時期にだけ集中しすぎてないかな」

資料を見ると、堂本弘雅は6年間に4度の引越しをしたということになっている。どこに引越したとまでは載っていないかった。

「転勤の重なる時期つてのもあるんじゃないの？何度が引越して、それから一つの職場に落ち着いたとか」

「でも、なんでこの欄だけ引越し先が載っていないんだ？東京に移った時は載ってるのに」

「これ調べたの私じゃないから…」

「じゃあ、この資料をまとめた人つて、どうしてもう知らないって言つて、翔子にくれたわけ？」

「取材が終わつて記事が書き終わつたからよ。決まってるじゃない」

「つまりもう調べてないつてわけか…」前田は黙つてうつむいた。

「もしかして」

「もしかして？」

「堂本弘雅はわざと自分の引越し先を分からないように履歴書かなんかに何も書かなかつたんじゃないか？」

「隠したって事？何のために？」

「分からない。でも、何か都合の悪いことがあったのかもしれない」
「この事件に関係した何かが？」

「そこまでは分かんないけど。いや、まてよ。だとすると」

前田はもう一度田中正志の資料をひっぱし出した。

「ここを見ろよ」

田中正志の高校生のときの欄を指差した。

「やっぱり引越してる。堂本が最初に引越した、そのちょっと前だ。同じように殺害された二人が、過去の同じ時期に引越してた。この時間には何かあるのかもしれないぞ」

「気になるな」翔子は資料を見比べてうーんと唸った。

「調べてみないか？きつと新しいことが分かると思うんだ」

翔子は苦笑いを返した。

「悪いけど私そんなには時間取れそうにないから。最近仕事がいっぱい入ってきちゃって」

「うらやましい理由だ」

「悔しかつたら面白い記事でも書きなさいよ」

「ああ書くよ。この事件の裏側が明らかになるとくれば文才のない俺にだって何とかなりそうだ」

「まあ、応援してる」

そして前田と翔子は喫茶店を後にすることにした。情報提供料金と言ふことで代金は前田が払うことになった。

「あ、それと一つ聞いていい？」

「何？」

「もう彼氏とかいるの？」

「ざんねん。いませんよ」

「そろそろ身を固めておかないと時期が行っちゃうんじゃないの？」

「余計なお世話ね。はっ倒すよ」

「スイマセンでした…。じゃあ何か進展があつたら連絡するから」

「宮元に伝えといてよ。今度こんなことしたらただじゃ済まなくな

るって」

情報は手に入れることができた。これからの取材の方針も掴めた。あとは……ストーリーカー規正法で訴えられないように気をつけるだけだ。

第3章（17） / 14

7月30日

真っ暗な山道の中の沿道を、車で走っている。

辺りはヘッドライトも吸い込まれてしまいそうなくらいに闇が立ち込めていて、早鐘を打つ心臓の音は不安の洪水で押しつぶされてしまいそうだった。

誰もいない。ライトの照らす目の前の10メートル以外は何も見えない。窓ガラスは閉めているのに車の滑走音に混じって森の木のざわめく音が聞こえてくる。車はまた一つ急なカーブを曲がった。うそだ。嘘に決まってる。

心の中で何度もそう唱え続けていた。

突然、目の前の山道に、折れた枝や石以外のものが現れた。急ブレーキを踏む。車はそれにぶつかるところで止まった。一目散に車から飛び降りる。

そこにあつたのは倒されたガードレールでも、小動物の死骸でも、誰かが捨てたゴミの袋でもなかった。

ヘッドライトに照らされたそれに近づいてゆく。それはちょうど人の体の大きさで…

「おいどうした」

青島真二は飛び上がるような勢いで布団から起き上がった。全身に汗がべっとり張り付いている。

目の前にあるのはさっきまで見えていた山道ではなくて、小汚いコンクリート壁の4人部屋だった。

「うなされてたぞ。気味が悪いったらありやしない。ぶつぶつぶつぶ呟きやがって。目が覚めちまったじゃねえか」

半田が布団の脇に立って、こちらを見下ろしていた。

「もう朝だぜ」

「悪い。またあの夢を見てたから」

「まったく何なんだよその悪夢ってのは。いい加減中身を教えてくれたっていいじゃないかよ？」

「いろいろとあったんだ」

そう。本当にいろいろなことがあった。だから俺は今ここにいる。ロイヤルマンション坂田のような豪華な部屋とは比べ物にならないくらい質素で、アンモニアと汗のにおいで蒸しかえる8畳間に。

「別に恥ずかしがるようなことじゃねえだろ。俺だってお前にいるとしゃべってやったじゃんか。隠し立てするようなもんじゃないぜ」

「事情があるんだ。察してくれよ」

捕まったってのに何をいまさら、と言って半田は不満そうな顔をした。

確かに、これがただの犯罪で捕まって終わりということだったら俺だつてとづくに全部話してるだろう。だけどそうじゃない。まだ何もかも暴露するわけにはいかないのだ。

「おい！もう朝だぞ。起きろ。おまえらそいつらを起こせ！」

「はい！」

いつのかにか刑務官が部屋の前に来ていた。刑務官の命令には絶対服従だ。半田は彼が遠くに行くまで待つてから小さな声でささやいた。

「危なかったな。見つかったのが坂田の親父（刑務官のこと）じゃなかったら絶対に懲罰だぞ」

半田と青島は2人で寝ている4人を起こしにかかった。

起床は6時40分。7時50分までが朝食の時間だ。

時間厳守、私語厳禁、異動時には掛け声、これらは刑務所内の鉄則だ。守れなければ間髪入れずに刑務官の制裁の拳が飛んでくるし、その後は懲罰が待っている。

懲罰の対象は恐ろしく細かく、厳格で、その懲罰自体もとても耐え難い物だった。

さっきのように、起床時間前に話しをすることはもちろん、作業中にわき見をしたり、食べ物などの受け渡しや、水を使って物や体を洗ったりしただけでも5日から10日の懲罰になる。喧嘩や論争は、20日の懲罰だ。

そうした細かな違反が、絶え間なく監視を続ける刑務官達の目に入ればすぐに取調べと懲罰審査会が開かれる。

懲罰と言うのが、これが鞭で叩かれるとか肉体的なものではなくて、起床してから他の囚人たちが作業を終了するまでの時間、正座と安座をただひたすらに繰り返してじっと一点を見つめ続けていなければならぬのだ。

真二は入所してすぐに不注意で懲罰を受けてから、7日間の懲罰を受けたが、それはまさに苦痛という言葉でしか言い表せなかった。時間だけがひたすらゆっくりと流れ続け、窓から漏れる太陽の光を眺めることぐらいしかすることがない。

そんな日が1日となくひたすら続くのだ。

そんな7日間が終わると、今度は工場を別のところへと移されて、等工が落とされ、作業金が減らされ、さらにははずめの涙のような所持金を削りとられる。場合によっては刑期が2、3年伸ばされることもある。

作業は民間企業や国の製品を受注して作るといったもので、自給は10円にも満たず、一ヶ月の収入は千円と少し。最低労働賃金で計算して食費などを合わせてみると、囚人はただ飯ぐらいというイメージは、とんだ思い込みだということが分かった。

第3章（18） / 14

いつもなら工場へと向かうはずの時間だった。

だが、今日だけは違った。

「青島真二、行くぞ」

教官に連れられるままに、真二は仲間の列から外れて一人通路へと出るようになった。半田の視線が疑い深げにこちらを覗いた。全員の視線が、顔は前を向いたままこちらを観察している。

廊下は暗く、コンクリート張りで、昨日の雨のにおいが染み付いていた。真二の横には2人の教官が並んで歩き、廊下には3人以上の姿はない。

いつかはこの日が来るのだと分かっていた。覚悟はできていた。心臓の音が妙に大きく聞こえてくるのはこの日があまりにも早くやってきたせいだろう。どこから発覚したのか、社員の証言か、家族の提言か、それとも羽鳥達が何か警察に漏らしたのだろうか。それは真二の知ったことじゃない。真二がしなければならないのは、ただ羽鳥達との約束を守ることだけだった。

嚴重な錠に加えていくつもの南京錠がかけられた扉に突き当たったところで、廊下に響く3人の足音が止まった。そこは刑務所の出口へとつながる通路だった。

金属の触れ合う音が反響し、教官が外した鍵を手に、扉を開いた。もうひとり片手で壁のスイッチを押して部屋に明かりをともした。はじめに来た時と何も変わっていない。がらんと置いて無表情で小さな部屋の中に、机が一台と着替え用の個室がぽつんと置いている。机の上には、真二がここへやってくるときに身につけていた所持品が並べられていた。会社用のスーツ。スラックス、腕時計、箱の中に収められた革靴。

ここに来た日の記憶が波のようにどつと押し寄せてきた。

刑が決まって拘置所を出ると、乗り込んだ警察車両の外にはどこ

から聞きつけたのか、慌ただしくフラッシュをたきながらハイエナのごとくマスコミ連中が群がってきた。それを抑える警官の怒号、詰め掛ける人々の勢い、顔を伏せながら車に向かう真二と小暮たち惨めさと絶望と空虚感で既に体はぼろぼろだった。たきつける光を顔に浴びながら車に乗り込み、発車した車窓から目をそらして前を向いたが、それでも追いかけてくるマスコミの姿が目に入った。そして数時間を車で揺られ、この刑務所へと辿りつき、所持品の全てをここに残した。

「着替える」

横山刑務官が、戦前の軍人さながらに完全に侮蔑したような下目使いで命令した。真二はそれにしたがって個室に入って、水色一色の制服を脱いでスーツを着込んだ。

いったいあと何回このスーツを着られるだろうか。刑務官によるチエックを受けながら、そう思って真二はたまらず身震いした。

「よし。では行くぞ」

部屋をいくつか抜けて、真二はついに建物の外に出た。作業をするために工場への通路を通るためでもなく、余暇の時間に広場に出たでもない。

真二は久しく吸ったことのない刑務所の外の空気を、思い切り大きく吸い込んだ。

田中正志、及び堂本弘雅の殺害に関する裁判についての初公判の日、外に出られたという気概を十分に満喫することもなく、青島真二は待ち受ける警察車両に乗り込んだ。

空は気の遠くなるくらいに熱い晴天で、車の外は昨日降った雨のせいで蒸しかえていた。中は窓も締めてクーラーも寒いくらいにきいていたけれども、こころなしか、そんな夏の空気を真二は肌で感じているような気がした。

暗幕をかけられて真っ暗な車内でできることなどない。

久しぶりに煙草が吸えるというわけでも、家族や友達に会えるわけでも、ただゆっくりと一人何も無い部屋で休めるということすらなかった。

もつとも、真二はこれから自らの罪を裁かれに行くのであって、何も刑務所での生活の気分転換だとか物見遊山に行くわけではない。それでも、多少の期待を持たずにはいられなかった。

自分の人生の土台が足元から崩れてゆく音を何年も聞き続け、それからついに崖から足を踏み外して、刑務所での3ヶ月間を過ごした。あまりにも、それは長い期間だった。そして、ようやく今その長い苦悩から開放される時が来ようとしているのだ。

いや、羽鳥達と会って始まった不幸じゃないのかもしれない。この顛末が始まるずっと前から、真二は泥沼の中でもがき、苦しんでいた。社会人として世間に出てきてからずっと、年数にすれば20年近くになる。だから全てが終わったときに、底のない疲れと、それと同時に救われたような安心感もまたどこかで感じていたのだろう。

だから俺はこうも簡単に羽鳥の最後の要求を呑んだのだろうか。今度こそ、本当に全てを終わらせて楽になりたいと思っていたからこういう結末になると予想していたから。

俺にとって羽鳥が現れたことが、救いだっただでもいうのだろうか？

羽鳥：羽鳥祐二。あいつは自分の人生のことをどう思っているん

だろう。人を食い物にし、破滅させ、かつての親友を裏切つてまで、その生き血をすすって歩むしかない人生。あのときはまだ、羽鳥が本当に暴力団に入つて、どつぷりと漬かりこんでいたということが信じられなかった。その姿を、4月の雨の中で目にしても、真二の頭の中にある羽鳥祐二は、学生時代の共に中学時代と18歳になるまでに過ごした姿が全てだった。共に同じ道を歩み、笑い、仲たがいもし、一度は道を踏み外して、それでも前向きに進んでゆこうとした羽鳥が全てで、それはたった一日の再開と裏切りで打ち砕くには、あまりにも頑丈な思い出だった。

あいつは変わった。

そうさせたのが時の流れか、目も当てられない過酷な現実か、それとも羽鳥自身の中に巣くう何者かによるものだったのかは分からない。どうやったって、分かることはないだろう。そして今となつてはもう二度と、あいつに会うことすらできない。

仕方のないことなのかもしれない。人生のうちでたった一人の人間がかなえることのできる望みの数など、たかが知れている。それは、俺のような奴にはなおさらのことだった。

そう。もう誰と会うこともできないし、何かを見たり、食べたり、聞いたり、触れたり、感じたりすることもできなくなる。人間誰しも、そのときはやってくる。それは人によつて早かったり遅かったりして、真二の場合は、たまたまそれがあと少しでやって来るというだけのことだ。

ただそれだけのことはずだった。

なのに、どうしてこうも悲しいのだろうか？どうして、瞼の裏側が熱くなるのをおさえられないのだろうか？

真二は前部ドアから外の道路を見ようとした。流れてゆく車の列、青い標識、信号、空……全てが、ぼやけて見えた。袖をぬらして霏をとろうとしたが無駄だった。

真二は泣いていた。とめどなく流れる涙を、ひたすらぬぐって泣き続けた。

25年ぶり、18歳の秋の最後に流して以来の、涙だった。

「法廷が開くのは12時ちょうどです。それまでここで待っていないさい」

高級なスーツを身にまとった痩身の男は、そう言うとすぐにすばやい足取りで廊下の奥の方へと去っていった。まだとても若く、真二よりは10歳以上年下だろうか。男は真二の弁護士だと名乗っていた。真二が自分で国選弁護士をつけてもらうよう依頼はした覚えはなかった。刑務官の誰かが勝手に手続きを行ったのだろう。

個室の中は、刑務所の6人部屋よりもずっと狭くて、同じくらい薄暗かった。この部屋にだって、今回のようなことでもなければ一生来ることがなかっただろうと思って、真二は微かな哀愁に浸った。恐怖や不安は、不思議と感じない。自分の気がおかしくなっているのだなと思うことにさえ抵抗感がなかった。

裁判の時間はあつという間にやってきた。真二は部屋に入ってきた数人の警備員に連れられて部屋を後にし、法廷へと向かった。不思議と緊張感はない。というよりも、今回の裁判が自分とはまったく別の人物に対して開かれているような気さえしていた。

法廷までの道は一面防音設備が施され、思いのほかその道のりは短かい。どこまでも高い天井と、無機質な灰色一色の壁は、この全てはただ法律にのみ支配されていて、逃げる空間などどこにもないのだということが無言のうちに語って真二を見下ろしているかのようにだった。警備員に囲まれてゆっくりと歩きながら、真二はその廊下を眺めていた。逃げ出すつもりなんかない。ここで全てを終わらせて、精算するつもりだった。

警備員が立ち止まり、それに知られて真二も足を止めた。目の前には荘厳ないでたちの扉が道を塞いでいる。警備員の一人が取っ手に手をかけ、そして思い切り開け放った。

最初に耳に飛び込んできたのは、漣なみのように法廷に溢れたどよめ

き声だった。傍聴席は好奇心に満ちた人たちで満員で、立って見ている人も座っているのと同じぐらいの数がいた。皆、真二のことを見て、互いに囁いたりじつとこちらをにらみつけたりしていた。スパーでよく見かけそうな主婦から、学生と思わしき若い男、高齡で白髪だらけの男女まで、特徴を挙げていけばきりがなかった。そうした人たちが傍聴席がはちきれんばかりに埋まっている。

何が楽しくてこんな場所に来るのだろうか。自分が犯罪者について分かったような気になるためだろうか。いかにも正義感で溢れるという目をした青年を横目に入れて、真二の胸の中に小さな怒りが灯った。

「被告人は席に着きなさい」

裁判長の声がそう命令した。

真二は警備員に導かれるままに席に着いた。誰もが真二の一挙手一投足に注目している。四方から降り注ぐ視線が痛いくらいだった。真二はもう一度、今度はゆっくりと傍聴席に目をやった。真二の知っている人は誰一人としていない。

最前列には、遺影を胸に抱えた50代くらいに見えるの女性の姿があった。堂本弘雅の遺族だろうか。母親ということではあるまい。おそらくは堂本の妻だろう。まだ30台の後半だというのに、その顔には遠めから見てもはつきりと分かるような深いしわが刻まれていて、諦めたようなどこか遠くを見る目をしていた。この俺が夫を殺した犯人だとして処刑されれば、多少はあの人の心の傷も癒えるだろうか。

裁判長が高々と開会の宣言をした。騒がしかった法廷が一瞬で静まり返った。

法廷には裁判官、検事、真二の裁判官ずらりと並んでいる。彼らは今、俺に、青島真二に科せられる刑罰を決めようとしている。

刑罰は一度目の法廷よりもはるかに重いというのに、一度目ほどの恐怖はなかった。それでもやはり、空気は肌に痛い。

まずはじめに裁判官に関する基本的な確認が行われ、次に、罪状

が読み上げられた。

「被告人、青島真二は、自身の勤務していた、横須証券株式会社の社員である堂本弘雅を、4月の23日頃、自身の乗用車車ではね、全身打撲で殺害し、さらにその遺体を、福岡県××市 山の山中に埋めて遺棄した疑い、加えて同様の手口で同じく横須証券株式会社の社員、田中正志を殺害、富山県 市 山山中に遺棄した疑いで、7月13日に再逮捕されました」

「これから今朗読された事実についての審理を行います、審理に先立ち被告人に注意しておきます。被告人には黙秘権があります。従って、被告人は答えたくない質問に対しては答えを拒むことができますし、また、初めから終わりまで黙っていることもできます。もちろん、質問に答えたいときには答えても構いませんが、被告人がこの法廷で述べたことは、被告人に有利、不利を問わず証拠として用いられることがありますので、それを念頭に置いて答えて下さい」

一連の諸注意が終わると、真二の弁護士が立ち上がって、検察官が提示した証拠は不十分であり、犯行に被告人の乗用車が使われたからといって、必ずしもそれが被告人の手によって行われたものだとは断定できない、という旨の陳述をした。

まだまだ若いその弁護士が、自分の受け持った仕事の重大さを自覚して気合のこもったしゃべり方をしているのは、法廷にいた誰もが感じたことだった。

真二はこれから自分が何をしようとしているか、その意思を彼に伝えられないことを申しわけないと思った。

第3章(20)/14(後書き)

この話の中に出てきた裁判の内容については、不正確な部分が多々あるかと思いますが、どうぞご了承ください。因みに黙秘権に関する記述は、実際の裁判で言われる内容を引用したものです。

第3章（21） / 14

裁判は検察官の陳述へと移った。30歳代と見える女性の検察官は、青島真二が殺人を犯したのだという証拠を挙げていった。神経が図太いせいなのか、彼女は傍から聞けばとても裁判の弁論だとは思えないようなのんびりとしたしゃべり方をしていた。

「青島真二の所有している乗用車には、明らかに人を撥ねたものと見られる痕跡が残っているのが分かっています。被告人の所有している車のバンカーの曲がり具合は、ちょうど50キロから60キロの物体に、時速約80キロほどで衝突した場合と、同じくらいの衝撃が加わって曲がったものです」

彼女は衝突の状況と衝突物の関係について、数分間、科学的な検証を説明した。

「さらに、発見された二人の死体には、背中からの強い衝撃を与えられたことで出来たと思われる、幾つかの骨折の跡が残っており、田中正志の死体には、同じような骨折だけではなく、被告人の所有する車のバンパーの形に、およそ一致する打撲痕も認められています。これらの点から、田中正志、堂本弘雅の両被害者は、同様に、被告人青島真二の所有する乗用車によって轢かれて、殺害されたのだと考えられます」

検察官はそう言い終えてから席に着いた。

「異議あり」

「弁護人の発言を認めます」

弁護士が立ち上がった。

「検察官の発言にあったように、確かに2人の被害者の殺害は、被告人青島真二の所有する車によって行われたものだと思います。しかしそのことが、青島真二が実際に二人を殺害したという明確な証拠にはなりえません。

犯行が行われたと推測され、2人の被害者が失踪したとみなされ

ている去年の4月14日と今年の3月21日はともに休日であり、どちらの日も青島真二が会社にいなかったということが分かっています。いま犯行に使われたとされている青島真二の車は、横須証券株式会社本社の近くの駐車場に常時とめてあり、車の鍵は青島真二の部屋にありました。部屋の鍵はピッキングなどで開けることもでき、無断で鍵を持ち出せば、犯行は会社内にいた人間の誰であつても可能でした。被害者である田中正志と堂本弘雅に対しては、別件で被告人と一緒に逮捕起訴され現在服役中の、横須証券役員5人もまた殺害に至る十分な動機を持っています。これらの点から、犯行を行ったのが被告人であるという検察官の意見は、いささか確証に欠けるものだと思います」

「異議あり」

「検察官の発言を認めます」

「被告、青島真二の弁護人は、先ほど横須証券株式会社の幹部の残りの5人であつても十分に犯行が可能であり、動機も十分にあつたと発言しましたが、だとすると、何も共犯関係にあつた被告人の車を使わなくても、自分の車を使って犯行に及んだほうがずっと効率的です。そもそも、今日この場にはいない5人の役員にとって、手間をかけ、窃盗と言う行為に及んでまで犯行に踏み切るメリットなんて、どこにもありません。したがって、被告人の車を使って犯行を行ったのは、被告人自身以外には考えられないものと思われる」

「異議あり」

「弁護人の発言を認めます」

「被告人を除く横須証券の役員5人にとって、彼の車を使うことは十分にメリットがあります。まず第一に、2人を殺害した真犯人が別にいたとすれば、その人物は青島真二の車を使って青島真二が犯行を行ったと見せかけて自らの嫌疑を退けることが出来ます。第2に、例えば田中正志と堂本弘雅を殺害したということが警察に露見したとしても、真犯人は6人全員に犯行が可能だったと主張して1人に犯人が絞られることを防ぐことが出来ます」

「異議あり」

「検察官の発言を認めます」

「弁護人の意見からして考えると、同じ事を役員6人全員が考え、共謀して殺害に至ったとも推測できます。それだけではありません。犯行を実際に行なった人物が6人全員に犯行が可能だと主張し、真犯人を特定させないという策謀は、被告人以外の5人だけではなく、被告人青島真二もまた、同様に行なえたのです。」

そして、今回の犯行を一番実行しやすかったのは、紛れもなく被告人、青島真二です。こうして考えると、6人の中でもっとも犯行を行った可能性が高いのは、被告人です」

「異議あり」

「弁護人の発言を認めます」

「裁判は可能性いかんで決まるものではありません。重視すべきなのはそこにある」

「もうやめにしましょうか」

法廷の中の時間が止まった。真二は席から立ち上がって、まっすぐ裁判官を見ていた。弁護士が口を開けたまま呆然と固まっている。法廷に、ざわめきが巻き起こった。

「静粛にしてください！被告人は許可なく発言することは控えなさい」

「裁判長、もうやめにしましょう。この裁判は、無駄です」

「何を・・・」弁護士が驚ききつたと言う風に、素っ頓狂な声を出してこちらを見た。

「裁判をしたって意味がないんです。あなたには申し訳ないと思っています。しかし、犯人は、私なんです」

法廷内は相変わらず嵐のように飛び交う人々の声で、ろくに一人だけの声を聞き取れるような状態じゃなかった。

「いま、何と・・・」

「ですから私は、あの2人を殺した犯人です」

「静粛にしてください、静粛に！裁判が続けられません！」

弁護士は、目の前で起きていることが飲み込めずに、当惑した様子で真二を凝視していた。

「ちよつと……待ってくださいよ。じゃあ、あなたは一体何のために今日の裁判をしたっていうんです。冗談じゃない！変なこと言わないでください。裁判はまだまだこれからですよ？何を思ったのか知りませんが、このまま続ければ絶対に勝てるんですよ？」

真二は何も答えなかった。そして、弁護士から視線を外し、裁判長のいるほうを見上げた。

「裁判長！！田中正志と堂本弘雅を殺したのは、この俺だ！！」
引き潮のように、溢れかえっていたざわめき声がおさまった。

「俺が……2人を殺したんだ」

誰も、一言も発さなかった。黙って、被告人席に立つ一人の男を見ていた。

嘘のような静寂の中、時間だけがゆっくりと流れていた。

しばらくして、裁判官が口火を切った。

「あなた……被告人は、今の言葉を裁判の中で参考にしてもよい発言として、言ったのですか」

弁護士は打ちのめされたような、あきれたような表情を浮かべ、誰も彼も、何がおきているのか分からずこちらを見ていた。

「そうです」

「あなたは、この発言をした上で、判決をあおろうとしているのですか」

「そうです。これ以上、何も言うことはありません。犯人は私です」
裁判長は当惑を顔に浮かべ、隣に座っている裁判官に何やら囁きかけた。ざわめきの波が再び法廷におこった。

真二は目を瞑った。やるべきことは全てやった。後はただ流れるままに流されるだけだった。

止まるところを知らないざわめきの波を耳の奥に聞きながら、真二はただじっと、立ち尽くしていた。

どれだけの時間がたっただろうか。辺りに大きく響いた木槌の音

で、真二は目を開いた。

ざわめきが掻き消えた。

全員が壇上に立つ裁判長に視線を送っていた。

「では、被告人、青島真二への判決を言い渡します」

第4章（1） / 15

3月11日

田中は一人、会議室の窓際に寄りかかっていた。昼下がりの曇り空、窓の外からは威勢のいい車の滑走音ばかりが聞こえてくる。

何もかもがもう、取り返しのつかないところまで来てしまった。

これこそが、本当のどん詰まりだ。

俺は人生を間違えたのだろうか。やろうと思ったならもつと別のまともな生き方だって選べたはずだ。俺はその全てを蹴って、今日この日にまでたどり着いてしまった。何をどこで間違えたのかわんてことじゃない。どれか一つ、ではないのだ。選択肢一つ一つは、言うなれば全てが間違いでもあり、正解でもあった。そして、田中の場合はたまたま、その組み合わせが悪くて、こうなってしまったのだ。

役員6人には黙って、警察に自首してくるしかない。6人にとつても、俺にとつても、唯一残された最善の方法はただそれだけだ。

田中は部屋を出た。廊下には誰もいない。そのまま、何事もないような様子を装って、田中は会社を後にした。

外は、曇り空でも十分に明るかった。その光を浴びて乳白色に輝くビルの壁や舗装を眺めていると、自分の今住んでいる世界が何もかも嘘であるかのようにだった。

忙しく行き交う人ごみの中を、ただ一人、ぼんやりと進んでゆくうちに、田中には、自分の人生がひどく喜劇じみたものに思えてきた。めかしこんだ観客が、満席になったホールで座席に背中をかけながら、主人公の馬鹿な振る舞いを見て、その日の鬱憤を吹き飛ばそうと笑い声を上げる喜劇の席。俺はその主人公の役を演じて、観客を笑わせている。観客の笑っている表情までが目に浮かんでくるかのようにだった。ストーリーは順調に進んでいた。生まれて、子供

から始まり、青年になり、それから少しぬけている大人になった。いくつもの茶番を繰り返して、これでもかと笑いを誘って会場を盛り上げた。劇はもう既にクライマックスへと近づいている。最後のどんでん返し、主人公は誰もが予想していなかったハッピーエンドを迎えることになってる。だが突然、舞台監督は主人公にこう告げた。

ハッピーエンド？何をほざいてるんだ。そんなものは用意してないぞ。お前が最期に演じるのは、無残な死に様だ。ほら、観客が待ってるから、さっさと行け。

俺は監督に舞台裏から突き飛ばされて、ステージの上に尻餅をついた。観客はそんな俺の姿がおかしかくて大きな声で笑ったが、すぐにやんだ。期待するようなまなざしが、俺の顔に集まっている。俺はそのときようやく、舞台の真ん中に断頭台の刃がスポットライトを浴びて輝いていることに気がついた。

行かなければいけないのか？俺は無言で監督に問いかけた。彼もまた無言で、行けと言いつ返した。俺は観客の好奇の視線のさなか、おぼつかない足取りでよろめきながら、舞台の中央へと向かった。俺は観客席を振り返り見た。皆、何も言わずに最後のクライマックスで俺が首を切り落とされるのを待ち構えていた。ステージの上には、俺以外には誰もいない。死刑囚を断頭台へと引きずっていくはずの刑務官も、断頭台の刃を落とすはずの死刑執行人もいない。それなのに俺は自ら断頭台のもとへと行かなければならなかった。ここまで演じてきたというのに、いまさらやめることなんて出来ない。

田中は騒がしい歩道の真ん中で、突如立ち止まった。会場に溢れんばかりにいた観客も、舞台裏から田中を見つめていた監督も、物言わずに置かれていた断頭台もそこにはなかった。

あと10分も歩けば、交番に着く。田中は小さく首を振った。あんな馬鹿らしい妄想など、いつもはしないのに、今日は本当にどうかしている。

田中は自分に言い聞かせて、自首することなんてなんでもないと、

無理やりに歩を進めた。

これが、最善の手段。最後の、せめてもの抵抗。そして堂本への償いなのだ。あいつの توسطで、こうすることが本当に供養になるのかは知らない。けれども、これが、田中に出来ることの限界だった。だから今こうして歩いているのだった。迷いもない。恐怖も、この足を止めてしまうほどではない。歩くしかないのだ。

田中は人の流れをぬって進み続けた。車道を抜け、踏切を渡り、ひと気のない道もひたすら進み続けた。

そして、ついに交番を目にした。いや、目にしたと思った。

あと一角曲がればたどり着くというところで、田中ははたと後ろに人の気配を感じて後ろを振り返った。だが、蛇のように伸びてきたその手が正面を向くよりも先に田中の口を押さえつけて、ハンカチを持った掌を押し付けた。

（お前は・・・）

声を上げるより前に、田中は意識を失っていた。そして、突然押し寄せた眠気に飲み込まれて、地面に崩れ落ちていた。

第4章(1) / 15 (後書き)

これから約2週間の間、学校の行事で家を留守にするのと、テスト週間が入るので、更新が滞ります。ご了承ください。

第4章(2) / 15

絶え間なく流動する波に飲まれて、底なしの沼の中に落ちてゆく一枚のコインのように、田中は朦朧とする意識の底へと沈んでいった。全身の感覚がなく、なんとか腕を沼の上のほうへと伸ばそうとしても、本当に動いているのか、それとも動いていないのか、ということすら感じられない。

真つ暗な沼の中にいるのに、沈んでゆく自分の姿は見えていた。夢なのだ、と気がついた。体中がだるかった。軽い吐き気もする。夢だっただけに抜け出せるはずなのに、田中は、泥沼の中から体を起こすことができなかった。

まわりつく倦怠感が拭い取れないことを知ると、田中は次にじわじわと心の底から恐怖が沸いてくるのを覚えた。

ここはどこなのか。

自分は今どういう状況にあるんだ。

後ろから押さえつけたあの腕は誰だったんだ。

蛇のようにしなり、薄ら寒くなるような、あの無感情で冷たい腕には既視感があった。1度だけじゃない。田中は幾度となくあの腕を、あの腕の持ち主と会っていた。

”あいつ”だ。あいつに見張られていたのだ。

田中は自分の馬鹿さ加減に嫌気が差した。

迂闊だった。少し頭を使えば分かったことだろうに。平日のそれも昼間に出てくるはずがないと思って油断でもしてたのだろうか。それにしたって、せめて人影のない通りにくれば用心してもおかしくなかったのに。

危険を無くすためなら、私は手を抜かない。

あいつはそう言った。俺の目の前でだ。堂本が失踪して、それから初めていつもの場所で会おうという連絡が来た時だ。

あいつと会う場所は、いつだって人気ひつけのない酒場だった。そのた

めだけに、俺はいつも都心の外れまで、眠気からくる頭痛をこらえて、深夜に車を走らせなければならなかった。だから、会うときはいつだって疲れきっていて、頭が重いを感じながら話した。俺はそれ以上に、あいつと会うことに疲れを感じていた。はじめのうちは違かった。それこそ不安と猜疑心ととても気を抜いてなんていられなかったからだ。

慣れを感じてきたのは、いつからか分からない、計画が成功してそれからだろうか。そうしているうちにだんだんとスリルと恐怖が消えて、それまで身を潜めていた疲ればかりが表れるようになった。自分のしていることが途方もなくあほらしく思えてきた。

だから俺はあいつに、これ以上は止めたほうがいい、手を引けと勧めた。実際計画には行きづまりが見えてきていた。けれど、あいつはいつも自分の要件を伝えるだけで、俺の意見を聞こうとするとはなかった。

私に任しさえすれば万事大丈夫だ。変な口出しはしなくてもいい。私はいうなればプロだぞ。失敗はない。

あいつは、そう言った。

もしあのとき、俺があいつにとって掌の中で転がすだけのただの駒でしかないということに気づいて、何もかも終わらせてさえいれ

ば。

だが、後悔してももう遅かった。

夢は醒めない。田中は一瞬まどろんで、次に意識が浮かび上がった時には、まったく別の光景の前に立っていた。

10歳の頃の田中が、小さな体を丸めて、布団の中で震えていた。冬でもないのに全身が凍りつくように寒かった。

30年以上昔のことだ。それなのに、夢の中の映像と感触は、空恐ろしくなるほどに鮮明だった。

隣の部屋では、父が大声で何かを叫んでいた。早口の怒鳴り声が部屋を震わし、ときどき物にこぶしの叩きつけられる音がし、張り手が空気を裂いた。母もまた半狂乱に何かを叫び、涙交じりの声で

必死に父の話の間に割り込もうとしていた。

狂ってる。

二人とも狂ってる。

田中はわけの分らないことでわめき続ける両親の声を聞きながら、半ば絶望的につぶやいた。

もう1ヶ月近くが、ずっとこの調子だった。

親父がずっと家にいるようになったのも1ヶ月前だった。それまでは昼は会社に行っていて、12時近くならないと帰ってこなかった親父が、時たま家を留守にしてゆくだけで、それ以外の時間はテレビを見たり、自室で書類に向かって何かをしているようになったのだ。仕事をしているのかと思って食事の席で聞くと、親父は怒ったように黙り込んで何の返事もしなかった。頑固な性格で、本人にとつていやなことを尋ねられると何もしゃべってくれないのはいつものことだったから、それ以上無理に聞こうとはしなかった。

一日中不機嫌で、特に、外から帰ってきたときには近寄りがたいほどの険悪な雰囲気を出していた。そういう時は必ずお袋と喧嘩をするので、田中は早々に親父のいる居間から離れて自分の部屋に引き下がることにしていた。それでも今日みたいに逃げ損ねてとばかりに殴られることがあった。

子供心にも、親父が失業したことは察せられた。

二人が怒鳴り散らすいくつかのわけの分らない単語も、仕事や将来についてのものなのだと思った。

第4章(3) / 15

両親が離婚するまでに、それほど時間はかからなかった。もともと喧嘩ばかりしていたのもあったのだと思う。親父が失業した頃から半年ほどで、二人は分かれることになった。

親権は親父が持つことになった。というよりも、押し付けられるようにして無理やり父親の後をついてゆかされたのだ。

離婚から少し経ってから酔っ払った親父がそのわけを伝えてくれた。お袋は家業を継いで実家に戻ることになったのだけれども、そのときお袋の家が顔を見るのも嫌なくらい毛嫌いしていた親父の子供が来ることは、お袋にとって都合が悪かったのだという。酒気で顔を真っ赤にさせながら、親父は、お前の母親は母親失格の最低の女だ、と怒鳴り散らした。田中がなんの表情も変えずにその言葉を聞いていると、親父はさらに怒った。お前はあんな人間の肩を持つのか、とまで言われた。けれど別にお袋が好きだったわけじゃない。愛情なんて感じていなかったから、そんなことを聞いたってショックでもなんでもなかったのだ。

親父が自殺をしたのはそれからすぐだった。親戚はじめ何も言わずに黙っていたが、葬儀が終わって少ししてから、電話で親父が飛び降り自殺をしたのだということを知った。関東から遠く離れた山口県の崖の下で、遺体になって発見されたのだという。親父は友人に向けて遺書を残していて、そこに記された場所に向かった頃にはもう事が終わっていたというらしい。理由までは言うてくれなかったが、それくらいは教えてもらわなくても分かった。親父は会社が倒産し、それまでも危なかった借金のやりくりがいつきに破綻して、どうにも行きづまっていたのだ。親戚との折り合いも良くなかった親父は頼る相手を見つかることもできず、バブル崩壊で混乱した社会のなかで職場を見つかることもできずにいた。

毎日毎日あてもなくパチンコ店に入り浸って借金を重ね、苦しみ

を忘れようとしては更に自分の首を絞めていった。

友達も皆親父のことを見捨てた。唯一、遺書を預けられた友人だけが親身に相談に乗ってくれ、たびたび家に来たりして話をして、お前ら親子のことが心配だという風な言葉を口にしたりしたが、その男もまた生活苦で金を工面することはできず、ついには親父の生命保険を借金の返済分としてそっくり持ち去っただけで消えてしまった。

親父の葬式の時、田中は悲しみを感じることができなかった。ただ、両親と過ごす時間が終了したのだ、としか思わなかった。もう殴られることも、両親の汚した部屋の後片付けもしなくてもいいのだという実感だけが沸いてきて、田中は開放感に喜びを覚えた。それでも葬式の時はそのような態度は微塵も出さないようにしたし、周りの荘厳な空気に身を潜めてじっとしていた。数少ない親戚が親父の悪癖を非難している時も、ただじっと黙っているだけだった。

しかしそれからすぐに、田中は自分の周りの環境がちつともよくならないということを身をもって知らされた。

田中は親父の葬式の後、すぐに親戚の家に移ることになった。その家は昔の家よりもずっときれいで過ごしやすく、田中はそこがとても気に入った。家の人も親切で、田中はこんなにいるところに俺なんかが住んでもいいのかと信じられない気持ちだった。

田中は夢見心地で毎日を過ごした。以前はできるだけ早く家を出て行くためにできるだけはやく働きに出ようなんて事を考えたりもしたが、今度はうつて変わって、できることならずっとこの家に住んでいたいと思うようになった。ここ以上の居場所はないと思った。やさしい親戚の家族はもはや本当の家族のように感じられた。

しかし、当の親戚の人たちは、田中と同じ事を思っていないかった。13歳、中学校に上がるという、ちょうどそんな時だった。

田中は今でもその日のことをよく覚えている。

その日、田中は卒業式を終えて友達と午後7時まで遊んできた帰りだった。帰りが遅くなつて怒られるのかと思っただけ、おじさん

たちは何も言わなかった。それどころかおかしい愛想笑いを浮かべては、田中が謝ろうとしたことや卒業の話をしようとするのを上の空に、こちらから始終目をそらしてばかりいた。

おじさんとおばさんは食事が終わると田中を居間に残るよう言うて、二人の子供には部屋にもどるよう伝えた。

田中は3人になってようやく、部屋に漂う深刻な空気が間違いないことを確信した。

おじさんたちは、なかなか本題を口にしようとしなかった。曖昧なことを言うてことをはぐらかしたがっているのも、露骨と言うていいほどに伝わってきた。

それでもよかった。何も聞かないですむのなら、苦しい時間がずっと続いたって構わなかった。けれども、結局は、田中の望むようにはならなかった。

君はもう、うちのようなところにいるべきじゃない、君には君にとってふさわしい家が他にあるんだ、とおじさんは言った。

田中は何も言わなかった。何も言葉が出てこなかった。言っても意味がないのだということは、分かりきっていたから。

おじさんは、田中の沈黙を、田中の理解が追いついていないためだと思つてさらに言葉を重ねた。

君がここにいてくれることはとてもうれしいよ、でもね、君にとって、それは本当にいいことじゃないんだ。子供に必要なのは、本当の親だよ。僕たちのような、代わりの親じゃいけないんだ。

大人の使う詭弁だと分かつていても、田中は何も反論しなかった。要するに、おじさんとおばさんは俺がここにいることを望んでいないのだ。俺に、どこかに行つて欲しいのだ。それだけ分かれば十分だった。ここは俺の居場所じゃなかった。ただ、それだけのことだった。

第4章（4） / 15

おじさんたちの言っていたことが嘘なのは、お袋の実家についてその最初の1日ではつきりした。

お袋は田中が引越す当日まで、1度も顔を見せに来たことがなかった。だから不安だったというわけではないけれど、むこうでの生活はもう今までのようにはいかないんだとは予感していた。もともとは引きとるのがいやで父親に預けたはずの子が自分の元に戻ってくるというのを、お袋が穏やかに受け止めてくれるはずがなかった。

不安は、悪いほうの意味で裏切られた。

お袋の実家での生活はとても信じられないものだった。

家は思っていたよりも大きく、2世帯が暮らすのにも十分な広さもあって、そのおかげで何とか自分の部屋をもらうことができた。

学校はそれなりに通い易く、入学してすぐに何人かの友達もできた。学校は楽しく、新鮮さに満ちていた。そのおかげで、家に帰るときは苦痛はよけいに大きくなったが。

中学に入って体も大きくなったためか、暴力を振るわれるようなことはなかった。親父がいなくなったことで、お袋の不満が俺のほうに全てのしかかってくるかもしれないと恐れていたのだ。

もっともそれは、おじさんたちの家で暮して曲がりなりにも“普通”の家庭の姿というものを知ってから、暴力にあっても今までの様に無抵抗ではなくて、お袋を変えてみようと思っていた田中にとって、いくらか拍子抜けしたことでもあった。

そして田中にとって悪いことに、おふくろ達の不満のぶつけ方は、暴力のように目に見えた、分かりやすいものじゃあなかった。

田中は家の中で、徹底的に無視されるようになったのだ。

さらには、敵はお袋一人ではなかった。

子は親に似るのだということを、田中は自分の身をもって学んだ

つもりだった。

暴力もしかり、キレかたもしかり、生活習慣もしかり、田中は親父やお袋と似ているところがあつた。そのせいでこれまでに何度も苦しみ、どうにか2人の呪縛なら逃れられないかと願いながら、過ごしてきたのだ。もちろんそれは誰だつて同じことだった。自分以外の人もまた良かれ悪かれ親に影響を受けて生きてるはずなんだから、それを免罪符にして人生に言い逃れすることなんてできなかった。

しかしこれを、田中のまわりにいる人たち、たとえば友達には当てはめてはみても、自分の両親そのものについて考えたことはなかった。親父は親父、お袋はお袋で生まれた時の性格のままに生きてきたんだと思いこんでいた。

だがこの家に来て、お袋もまた同じなのだとを知った。

お袋と、祖父と祖母は、同じくらいに田中のことを憎んでいた。

正確には親父のことを、死んでもなおやまなくらいに憎んでいた。そして俺は行き場のない憎しみを向ける矛先にされた。小さい頃から祖父母に会った記憶があまりない理由も良く分かった。祖父母は親父と血のつながった俺を見るのも嫌がったのだらう。親父側の人間とは、縁を切りたいとずっと思っていたのだ。

2年経った頃には引越しが決まった。学校にもすっかり慣れて、部活動も大会に向けて盛り上がってくる頃だ。引越しは唐突で、田中にはろくに身支度をする時間も与えられなかった。

同じことがまた何度か繰り返され、大学に上がってからようやく、で一人暮らしをすることに決まった。

お袋はもうあんたの顔を見ないで済む、と言って田中を送り出した。

そのときも田中は怒りを抑えて何も言わなかった。

大学を卒業し、田中は横須証券に就職が決まった。大企業とまではいえないものの、収入もある程度安定した物が期待できるところだった。親戚の手を借りることなく、自分の手で生活できると知っ

たとき、田中はお袋に別れの挨拶をしに行くことを決めた。

春先に、突然家にやってきた田中を、お袋と家の人たちは少し驚いて、それでも動揺を隠そうといつも以上に邪険に振舞った。遠まわしに帰るよう促すお袋たちの間を、笑顔を装いながら押し入った。ろくに会話もしたことのなかったお袋に感情をぶつけて怒鳴ったのは、そのときが初めて最後だった。

俺はそれこそ小学生の頃から、あんたらから離れるためなら一人暮らしでも何でも構わないって思ってたんだ。けれどもうこれでお前らなんかと顔を合わさないで済むんだ。ありがとよ。そして、永遠にさようなら。

呆然とするおふくろ達を尻目に、田中は家をでた。そして二度と戻ることにはなかった。

第4章(5) / 15

横須証券に復讐をしようと決めたのは40歳になった頃だった。

部署が変わって新しく赴任した職場で、会社が行なった過去の業績に目を通していた時に、偶然にも田中の目に、その資料が飛び込んできた。過去に横須証券と合同事業を行なっていた会社のリストの中にあったその会社名は、親父の当時の勤め先に間違いなかった。ふと目にした名前は、田中にどこかで見たような印象を与えた。

親父が勤めていたというのを確かめるのはわけなかった。親父達が離婚した年は、その会社が契約を打ち切られたわずか1年後のことだった。すぐにパソコンでデータを調べると、会社はその年の内に倒産したとのことだとはつきりした。

俺は親父に勝ったんだな、と思った。それだけだった。田中は特に気にせず仕事を続けた。

帰りの酒場で田中は羽鳥に始めて出合った。

普通のスーツに、普通の酒。特に高く着飾ったというわけでも、会社で重職についているというわけでもなさそうだった。ごく普通のどこにでもいるようなサラリーマンだ。ただ一つ変わっていたのは、その日たまたま一人で飲みに来ていた田中に話しかけてきたことだった。

話が合うな、と思っただけで、特別な印象をもらったわけでもないし、その日1日会っただけでもう二度と会うことはないだろうとも思っていた。

だが、田中がその日見つけた親父の資料のことを話しているうちに、羽鳥はだんだんと態度を変えていった。

「じゃあ、ほんとに復讐してやりましょうよ」

田中がまどろんで、今にも眠りに落ちてしまうところ、羽鳥は言った。

そのときどんな話をしていたのか、田中はよく覚えていない。親

父の会社が倒産したおかげで、俺は散々な人生を送らされてきただとか、そういうことを言っていたのかもしれない。田中は当然、羽鳥が相槌を打つためにそんな返事を返したのだと思った。

「ええ、まったく。そうしてやりたいですよ」

羽鳥は何故だか分からないが、笑った。

「できますよ」

その言葉は、相打ちをしたわけでも、田中の戯言を流そうとしたわけでもなく、計略と確信をもって響いていた。

現実味のない受け答えを聞いて、おれは少し目が覚めた。この人は何をいつてるんだろう？

「私に任してくれば、できます」

「まあ、冗談はこれくらいにして・・・」

不安を覚えて、おれは話を切り上げようとした。

「私の仕事っていうのは、実は普通の会社勤めじゃないんです。まあ要するに、声を大きくしてはいえないような仕事です」

グラスの酒を飲みほす羽鳥の顔には、得体の知れない笑みが浮かんでいた。こいつは、普通じゃない。早くここから出なければ。

「なんなら証拠を見せてあげてもいいですよ」

「・・・証拠？」

「見たいですか？」

「まあ・・・」

羽鳥は今までの愛想笑いが嘘のような鋭い目線でカウンター席のバーテンのほうを見た。そして、コートの内側をめくって見せた。

“それ”を見た瞬間、おれは思わず息が止めてしまった。眠気が一度に吹き飛び、体が氷のように冷たくなった。

「そういうのが、趣味なんですか？」

黒光りする拳銃から目を離さずに言った。よくテレビの刑事ドラマで見るようなものとは違う、握り口が太く、反対に銃口部分の細かい小さめの拳銃だった。銃身に無理やり押し込まれた形のリボルバーには、それだけ銃身と違う銃弾が金色に光り輝いていた。

モデルガンという意味で言ったつもりだった。羽鳥もまた、そんな思惑を察したうえで返事をしたのだろう。

「ええ。こういうのって手に入れるのが難しいと思われるようですけれど、案外楽に入手できるんです」

言葉が出てこなかった。拳銃は内ポケットの中に収まってるはずなのに、銃口がこちらを向いているかのように錯覚した。

「こういうチャンスって、なかなかありませんよ。どうです。一つ私に任せてみませんか？」

「じゃ、社長を殺すつもりですか」

バーテンに聞こえるように少し声を上げていったつもりだった。

羽鳥はおかしそうに笑った。

「これですか？そんなことをしたら大事件になりますよ。」

「はは」

「私が提案するのは、もっと確実に、法律にのっとって横須証券をつぶす手段です」

「どういうことですか？」

「言葉の通りですよ」羽鳥は声を潜めて言った。「きちんと法にのっとった手段で、正しく言うなら法の裁きによって横須証券をつぶす方法です」

「とりあえず、それを・・・」

田中は内ポケットの中の拳銃を指差した。

「ああ。分かりました」羽鳥は拳銃を見せるのをやめた。

「今日はこの辺にしときましょう。私なんかには、あなたの言おうとしていることは理解できなそうだ」

こいつは本当に頭がおかしいのかもしれない。だとしたら適当にへつらつてごまかして逃げるのが一番だ。

「私は冗談であなたに話を持ちかけようとしているわけではないんです。いたってまじめで、もちろん気が触れているわけでもありませんよ」

こういう人間の出てくる小説を読んだことがあった。自分の気が狂っていることに本人が気づかず、どんなことを言っても聞かない、それでいて自分を否定しようとする人間を逆に排除しようとする。おれは本の中の人物を幻覚に見てにでもいるのだろうか。

「細かいことや事の運びは私達で何とかします。あなたには、会社の内部から手を回して、幹部の動きを監視して欲しい、ただそれだけです」

「断ります。そんなことをしたって私にとっては迷惑なだけです」

田中は救いを求めるようにバーテンを見た。知ってか知らずかバーテンはグラスを磨いてこちらに微塵も注意を払おうとしなかった。こいつをどうにかしてくれっ、と大声で叫びたかった。

「利益ならありますよ」

「会社への復讐なんて、ほんとはどうだっていいんだ！」

「1億で手を打ちませんか」

「何を言ってるんだあんたは」

「1億です。あなたの年を考えたら、仮に会社がつぶれて職を失うとしても十分すぎる金額だと思いますよ。前金として300万円、翌日までにあなたの口座に振り込んでおきます。私達と手を組むかどうかは、それから決めてください」

「分かりました、ですから今日はいったん帰らせてもらいます」

田中は席を立ち上がってカウンターに向かい、財布から1万円札取り出してバーテンに渡した。

「あなたはまだ私の言うことが信じられないようですね」

急いで店を出ようとすると、後ろから羽鳥が声をかけてきた。田中は後ろを振り向いた。羽鳥は口もとに小さく笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「そんなことはないですよ」

「構いません。明日になればつきりすることですから」

田中は店を出た。そしてすぐにタクシーを拾って家に帰った、タクシーに乗っている間も、後からつけてきやしないかと何度か気になって後部ドアを覗いたが、閑散とした夜道に怪しい車は見当たらなかった。

翌日は、羽鳥のことなどまったく気にせずに過ごした。羽鳥という名前すら覚えていなかったし、当然、口座に金が振り込まれていくかなんて確かめようとも思わなかった。

しかし、次の給料日に、田中は自分の口座に300万円が振り込まれていたことを知ることになった。

2日後に羽鳥からの電話がかかってきた。

「見ましたか、300万円」

「どうやって・・・おれの口座番号を？」

「あの夜にあなたが自分の口で教えてくれたんです」
記憶になかったが、そうだったに違いない。

「どうです？話を聞いてくれる気になりましたか」

「一つだけ教えてくれ」

「何です？」

「仮に俺がお前達の計画に乗るとして、いつまでに全額を払ってくれるんだ」

「計画を実行に移したとき、すなわちあなたが協力を開始してから3年内には。全額、月ごとに振り分けて入れておきます。計画が始まるのは、今から見積もってほしい1年後くらいでしょうね。あなたの協力が必要になったら、そのときに連絡します」

「こちらからも連絡先を教えてください」

「申し訳ないが、それはできません。なにしろこっちは汚れ仕事をするわけですから、いざというときにあなたが裏切ったりしたら困ります」

「計画って言うのは、どういうものなんだ」

「それも、今はまだ答えかねます」

「そうか・・・」

「あと、住所などは極力変えないようにお願いします」

「分かってる」

「私達に協力してくれるということで、よろしいんですね」

田中は何も答えなかった。

「ではまた1年後に」

電話が切れた。

第4章（7） / 15

それからは銀行預金が増えているということも、羽鳥から何らかの連絡が来るということもなかった。不穏なことが行なわれているというのに、その内容が分からないことが田中を不安がらせたが、その不安も時が経つにつれて、薄れていった。

300万円はすぐに全額を使い切った。羽鳥がまともな連中にながっていないのなら、実力行使で奪い返しに来る可能性もなきにしもあらずと思ったからだ。高級車を見られて友人にいぶかしがられもしたが、それくらいでは田中のしていることが露見するはずもない。今はまだ、問題はなかった。

そして、田中が羽鳥と最初に会った同じ日に、ようやく連絡が来た。

「誰にしゃべっていませんね？」

開口一番に羽鳥はそう尋ねた。

「もちろん」

「ではいいでしょう。準備はもう万端です。あとは実行に移すだけです」

「何をすればいいんだ」

「まずは、青島専務にコンタクトを取ります」

青島専務とは仕事上の付き合いで何度か会ったことがある。

「どうして専務を」

「いきなり幹部全体に干渉するとパニックを起こしたり、変に結束されてしまうからです。だからまずは一人一人を脅迫し、バラバラにこちらの掌中にいれます」

「まで。お前らがどうやって脅迫するつもりなのかは知らないけど、そう簡単にいくか？会社の経営に関することで易々と首を縦に振るとは思えないぞ」

「ですから、まずは下準備をします」

「どういうことだ」

「さっき言ったように、私たちは全員いつせいに要求を突きつけるようなことはしません。まず、例えば、親族に危害を加えるとかいう執拗な嫌がらせを仕掛けて、手始めの脅迫をします。けれど、これがそれほどの功を労するとは思ってはいません。警察に通報されればおしまいですからね。ですから、はじめに本当に小さな要求だけをします。具体的には、決算の改ざんです」

「それがなんになる」

「同じ決算について、小額づつを改ざんさせるのです。一人では誤魔化せるが、6人ではまずいことになる、そういう金額です。脅迫の内容は個人的なものですから、互いに相談することもできない。本人達は自分がちよっと手を加えるだけで全て解決すると思っているからなおさらそんなことをしようとは思わない。そこだけはしっかり念を押しますが、もしかしたらということもある。だから、あなたにはその監視をしておらうと思っています」

「なるほど……。分かった」

「盗聴器を仕掛けるとか、いろいろ細かいことは後で説明します。こうして積み重なった決算書が、本当の脅迫のネタになるんです」

「冗談ではないんだ、といまさらながら思った。本当に、横須証券をつぶす手伝いすることになるのだ。」

「それで、これが具体的にどうやってあんたらの利益になるんだ？」

「それは教えられません。大事な企業秘密ですから」

「企業秘密、か。立派な物言いだ。」

「あなたの仕事の話をしましょう。青島専務への干渉です。青島専務には数枚の手紙を渡して欲しいんです。前に会ったバーかどこかで落ち合って、そのときに渡します。郵便なんかでは跡がついていけないので」

「脅迫を書いた手紙を渡すのか？そんなことをしたらそれこそ跡がつくじゃないか」

「ちょっとした演出のために必要なんです。それに、彼はきつと私の要求を呑んでくれるでしょうからね」

「なんでそんなことが言い切れる」

「大丈夫。信用してください。私の経験則です」

経験則・・・？わけが分からなかった。何をもってそんなことがいえるんだ。それとも、この羽鳥という男が、今までも同じようなことを手がけてきたとでもいうのだろうか。

その日は場所を聞いただけで話は終わった。

後日、田中は羽鳥から手紙入りの封筒を数枚もらい、それぞれの使い場所についての説明を受けた。

朝早く会社にきて1枚目の封筒をビルの前に貼り付けたときは、不安で仕事に集中できなかった。その日は1度だけ青島専務の姿を見たが、特に変わった様子もなかった。

羽鳥から突然の電話がきたのは、その日の夜だった。

「計画に支障が出ました。前にお話した段取りは忘れてください。全員をいっせいに脅迫し、要求を突きつけることにします。もしもこれが失敗したら、計画は断念するものと思ってください」

「どうしたんだ。なにがあった、いまさら変更なんて」

羽鳥は少し黙って、それから舌打ちした。

「まあいいでしょう。教えてあげますよ。どうせ言っても言わなくても同じことですからね。今までは黙ってたんですが、私達に協力してくれた横須証券の社員は、あなた以外にもう一人いるんですよ。そのもう一人が、仕事をしくじったんです」

「もう一人？もう一人いるのか？どうして今まで黙ってたんだ」

「理由なんてどうだっていいでしょう。とにかく、おかげでいろいろと問題がでてきて。いいですか。明日までにあなたの自宅のポストに封筒を入れておきます。こちらを、次の手紙を持っていくはずだった場所に置いてください。いいですね。間違ってもおかしいことをして誰かに気取られたりすることのないようにしてください」

「住所を、言うのか？」

「しょうがないでしょうが。それとも今から受け取りに来てくれますか？」

もう夜の1時を過ぎていた。それでもなくても体の疲労がたまっているのに、今から車を出す気力なんてなかった。

「言っておきますけど、私達は必要とあらばいつだってあなたの住所なんて調べることができますよ。言わなくたって時間の無駄になるだけです」

「分かった」

しかたなく田中は住所を教えた。

「では明日の朝に。頼みましたよ」

「待ってくれ、代わりに二つ教えてくれ。もう一人つてのは誰なんだ」

「あなたに言う必要はありません」

「言えない理由でもあるのか」

「そんなことはない」

「じゃあ教えてくれ」

羽鳥はまたもしばし黙って考えて、おもむろに言った。

「宣伝部の堂本弘雅という男です。しかし、コンタクトを取るようなことはできる限り控えてください」

「そうか。ありがとう」

「では」

田中はソファーに寄りかかった。

堂本弘雅。知らない名前だ。羽鳥はできることなら堂本の名前を言うまいとしていた。二人で結束して組まれるのを避けるためか、二人が知り合い出ないほうが自然で怪しまれないと思ったのか、又はそれ以外の理由か……。だとしたら、危ないものが隠れているような気がした。

羽鳥は俺に計画の内容も羽鳥達のことについても一切語ろうとしなかった。さっきの電話にしてもそうだった。あの男は一体なにを考えているのだろう。

なんにしても、危険には違いなかった。羽鳥が何を考えているのか、突き止める必要がある。そのためにはまず堂本弘雅と連絡を取らなくてはならない。

第4章(8) / 15

堂本と連絡を取るのとはそれほど難しいことではなかった。

人事課にいる友人に話を通して、堂本がどんな奴なのか、資料を見せてもらった。

それを見ると堂本は田中よりも8歳年下で、そして田中の親父がそうであったように、堂本の父親もまた横須証券によって職を失っていたということが分かった。会社は違ったけれども時期が同じだった。その頃はちょうどバブル崩壊のあおりを受けて横須証券が系列会社をはき捨てるという経営転換に打って出ていて、経営破綻した会社がいくつもあったのだった。これらはみな田中から教えられて知ったことだった。

「その頃はまだ年もそれほどいってなくてよく覚えてはいないんですけど、両親が心中自殺をしたらしくて、俺だけが残されたんですね。その後は身寄りのもとに預けられたんですけど、それもやっぱりよく覚えていないんです。気づいたら孤児院で暮していて……。いろんなことがありました。世の中、両親がいないと、融通の利かないことが多いですからね。田中さんもそうだったんじゃないですか？」

「知ってるのか、俺のことを？」

「はい。羽鳥から聞いたんです」

「羽鳥が・・・そうか。もしかしてこの話に乗るときから羽鳥は俺のことを話していたのか」

「そうですけど、何か？」

「いや。なんでもないんだ」

ということは、羽鳥は俺と話を通してから横須証券を利用することを本気で計画しただのだろうか。それまでは予定段階でしかなかったのに？だとしたら、俺が絡んだせいで計画が始まってしまったのか？

堂本はそのせいで巻き込まれたのか？

「正直はじめは冗談かと思っていました。けど聞いているうちに、だんだんと現実味が見えてきまして。結局話に乗りました。どちらにしても一度あの人らに目をつけられたことには、参加しなかったらただじゃ済まないでしょうしね」

「それで本当に、良かったのか？無理やりでもいいから断ればよかったじゃないか」

「俺が自分で望んだことです。あの人たちの強引さにはちょっと嫌気がさしましたけど。大変でした3人で交代交代に・・・」

「3人？羽鳥以外にも誰がいるのか？」

「ええ。小宮山と大船っていう羽鳥の手助けをする男達です」

話に聞いたことすらない。そんな奴らがいたなんて。

「それで、しくじったってのは一体何なんだ？計画を変更しなきゃいけないとか羽鳥は言ってたけど」

「ああ、いや、すいません。小暮社長が警察に羽鳥達がしたことを通報してしまったので」

「そうなのか」堂本は俺の知らされていないところで、別に行動していたということか。「けど、どうしてお前のせいになるんだ」

「小暮署長と電話口で交渉していたのは俺でしたから」

「羽鳥が電話をしてたんじゃないのか」

「はい。そういう風に指示をされていたので。田中さんのほうは違うんですか」

「こっちは羽鳥が電話をしたんだ。俺は手紙を青島専務に分かるよう壁にはつつけたりしただけで、あとはすべて羽鳥がコンタクトを取っていた」

「妙ですね。俺は他に二人にも同じような電話をしるといわれてたんですけど」

「どうして青島専務だけを・・・」

羽鳥が俺と堂本に指示していたことで、食い違いがあったのは青島専務への電話の件だけだった。だとしたら、これが俺たち二人に

面識を取らせまいとした理由だとしてもいうのだろうか。

田中はついには知ることはないが、そのとき堂本は羽鳥と青島専務との間にもととの繋がりがあったあつたのではないかということに思い至って、後の調べで二人が高校時代に面識があるということ突き止めていた。けれども田中は堂本の失踪まで、ほとんど堂本と話すこともなく、その事実は何に葬られる形になった。

それから数ヶ月が過ぎた。

「どうということだ」

田中は汗で滑る受話器をぐつと握りしめて電話口の向こうにいる羽鳥にすこんでみせた。

「なにがです？」

「ふざけるな。堂本が無断で会社を休んでからもう10日も過ぎてるんだぞ」

10日間、本当に気の遠くなるような10日間だった。そして今日、ようやく羽鳥からの連絡が来たのだった。「お前達がやったんだな、堂本を」

電話口からは何の声も流れてこない。田中がいよいよ大声で怒鳴ろうとした時に、羽鳥は口を開いた。

「ええ、そうですよ」

田中は背筋がぞつとするのを感じた。口調が、笑っている。

「なんでだ！どうしてあいつを」

「そんなに怒らなくなつてちゃんと説明しますよ。まあ、落ち着いて聞いてください。彼はね、われわれを裏切ろうとしたんです。警察に出頭して全てを暴露しようとしたんです。だから私達はそんなことが起こる前に彼を」

「嘘だ。そんなこと信じられるか。どうしてあいつがそんなことをするんだ」

「私にだって分かんないんですよ。ほんと、何が不満だったというんでしょうかね。復讐も果たせて、金だつて手に入るというのに」

羽鳥は何か楽しいことでもしゃべるかのように言った。

「堂本はお前らの都合で消されたんだ。邪魔者になったからだろう。利用価値がなくなったから、だから殺したんだろう！」

「田中さん。落ち着いて考えてください。私には、あなた達の協力が必要不可欠なんですよ？どうして好き好んでそんなことをしなきゃいけないんです。変な勘繰りは止めてください。大体そんなことを言ったらですね・・・」

時間が止まった。いや、実際には羽鳥は間を空けてなんかいないのかもしれない。それなのに、田中の頭のなかでは時間は止まっていた。

「あなたも殺されなきゃいけないですよ。田中さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9576c/>

ライン

2010年10月26日02時45分発行